

---

# ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔

先駆ミヤマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔

### 【Zコード】

Z8321P

### 【作者名】

先駆ミヤマ

### 【あらすじ】

ここに世界をめぐる男がいた。 神々と悪魔の世界を起点にガンダム、エヴァ、スパロボ、DQ、FF、KH、コードギアス、遊戯王、モンハンなどの世界を回り続けてきた男。 彼らの中のさらには優秀な戦士たちのチームが存在し、そのリーダーとして動く悪魔の戦士、ガルーム・ザ・レジンド。

仮面ライダー、スーパー戦隊の世界の旅を終え新たな世界へ。 降りたつたのは化学の進行がない中世。

今、主と使い魔たちの物語が幕を開く。

## 見つけたもの（前書き）

この物語はギルム編と途中からクロスしていきます。ガルームの視点とギルムの視点の一観から書くのでそこら辺は…まあ、ご了承ください。

### ガルーム・ザ・レジエンド

黒髪の青年。黒曜石の様な真っ黒な瞳、切れ目で常に相手を睨みつけているように見える。身長は176cm 日本人にしては大きいが外人から見れば少々小柄。性格は氷のように冷たく闇のごとく冷酷。

## 見つけたもの

俺はガルーム。世界の中をさまよう罪人だ。俺はある世界に降り立つた。名はリアルマジック地方。広すぎてその範囲はわからないが、魔法の世界らしい。だが：文句の一つぐらいは言いたい。ここはリアルなんかじゃない。ここは中世だ……。

俺は闇夜に降り立ち最も強い魔力の持ち主を探していた。この世界を、守るために最も強きもの、あるいはもつとも異質なものを探す必要性があつた。

ようやくこの場所も分かつてきました。ここはハルケギニア大陸、トリステインという国の学校らしい。

図書館らしき場所は蠟燭だらけ。本以外何にもない。検索のためのパソコンはもちろん、監視の兵士一人もいない。しかも棚は人間の身長では足りないほど高い。大体7mはあるな。

本は見たこともない字で書かれてあつたが：リンクゴの絵が描いてある絵と解説があつたのでそこで文字を理解した。

俺の能力に見たことも聞いたこともない文字を理解する能力がある。ただし、条件がある。その文字、たつた一つでいい。正確に理解すること。『あ』という文字を『い』と理解したら他の文字は読めない。だが理解できれば他の文字や言葉を自然と理解できるようになる。

その時俺の剣が声をかけてきた。

『ガルーム、 強き魔力の持ち主を感じした。』

「そうか。 礼を言うソウル。」

俺の剣、 ソウルブレード。 魂は決して揺れ動かない。 その力を操る妖しの剣。 言語を口にし俺のサポートをしてくれる愛刀だ。 俺は本を閉じ再び闇に身を溶かした。 その場所へ、 剣が感じた場所へ。 それが俺ができることだと信じて。

「ガキじゃないか。」

今は夜。闇の中から俺はその主を見た。

『まだ、未覚醒だが他の者と異なる魔力の流れを持つている。』

ソウルが言った子の前に立つが…あまりに予想外で啞然としていた。ピンクの髪。起きてからじゃないと分からぬがおそらく美少女の部類に入る子であろう。小型の体…口リコンとかなら喜んで飛びつくな。

『どう思つ?』

ソウルは問う。この子がこの世界の未来を握る子なのか、そういうのか。

「このガキに何ができるかは知らん。それが世界にプラスになるか邪魔になるかと考えてもこいつのこと調べなければ話にならない。」

事実だけを俺は言つ。風が窓をたたく。今始まりの戦鐘を鳴らした。

これが…俺と…俺が巻き込んだ最初の人物・ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールとの最初の出会いだった。

## 見つけたもの（後書き）

いまだに小説は上手じゃないですが楽しんでいただければ幸いです、さてこのガルーム編ですがアニメ版ゼロの使い魔の三つの作品のストーリーを中心に介入していきます。また、楽しんでいただければ幸いです。そのうち私のオリジナルキャラ一覧を作りますので…。よろしくお願いします。

## 召喚された者（前書き）

召喚の儀辺りです。ちょっと、原作っぽく書けないかも…。間違つていたり変だと思った時にはすぐに連絡してください。

## 召喚されし者

風は走る。田を閉じながらも外の風景が予測できた。煙の中に混じるその香ばしいパンのにおい。木の上は自分の体重に比例して反動による痛みを感じるものだが、体がマヒしているのだろう。痛みはない。

もう少し眠つても、良いかな…？ 全ての感覚がまた遠ざかっていく。

(…起きる。)

ソウルは木の上で眠る俺を起こした。あれから…結構時間が経つたのか。地平線近くにあつたはずの太陽は空高く昇っていた。

(あのガキ達は召喚をしているようだ。潜り込むなら利用しない他はないぞ。)

ソウルは周りの状況からそう教えてくれた。

「俺に使い魔になれと言つことか?」

彼らが行っているのは使い魔召喚の儀式。使い魔つてのが小説とか出てくる召使しか思い浮かばないのだが…。俺が目に掛けた少女は唱えだした。唱えている様子だけしか分からなかつたが。

『契約など必要無いはずだ。』

そう、俺が行かなくても彼女が呼んだ相手は来る。それが何であろうと…そいつと契約した後に自分で適当なルーンを体に刻めばいい。ソウルへの短かつた。彼女を見るとタクトを振っている。前に出した瞬間爆発した。

「確かにな。」

俺は転移魔法ダークエンジで彼女が起こした爆発の中に降り立つた。そして俺の後ろには現代人の少…青…いやまだ16、7だな。幼さが何処かに垣間見える。そんな奴が一人いた。こいつが彼女が呼んだ使い魔…か。

「見ろよー平民を召喚したぞ!」

平民…？何の話だ？まあいい。今、俺ができるのはこの学園に潜入り、あの少女を監視すること。まんまると太った貴族に何言われようが興味はない。

「我を召喚したのは、汝か？」

いかにも私は有名な召喚されし者……そんなフレーズを言つ。

「そつ、そうよ…」

「我が名はガルム。またの名をガルム。」

『（おい！ちょっと待て！）』

俺の中にいるガルム、本名アンチガルムニストが文句を言つ。だが俺は彼の名を使いたかつた訳ではない。

「ガルム……？まさか……。」

「人は我……俺を悪魔と呼ぶ。」

辺りの人間（あの少女も）が一三歩下がつた。

「安心したまえ。神により救済され今はいかしめのために色々と拘束を身につけている。誰かを殺す……なんて事はしないから。」

安堵した様子で顔を見合させる者様々だった。

『（逸話のガルムの事だったのか…。）』

(やつこつ事だ。)

後ろの奴も目を覚ましたようだ。<sup>リアル</sup>青いパー<sup>マジック</sup>カーニジーンズ。髪は黒<sup>マジック</sup>日本人かな<sup>マジック</sup>。そうか、だから現代<sup>リアル</sup>魔法地方か。

「あんたは?」

少女は聞く。

「何だつて? 何処だ、こ<sup>ニ</sup>?」

少年は答えずに辺りを見回す。

「言葉が通じないの? 何処の平民?」

俺には双方の言葉がはつきりと聞こえたので言ってしまった。

「嘘だろ?」

「…あんた、日本語喋れるじゃんか!」

俺の言葉は分かる<sup>マジック</sup>。ああ、まだ言語が頭の中で翻訳されてないのか<sup>マジック</sup>。後ろからはあの少女を罵倒する声が聞こえた。

「さすがゼロのルイズ! 期待を裏切らない結果だなー!」

他の生徒の笑い声が……つざこ<sup>ニ</sup>なんか腹立つ……!

「こつら着てるもんといいかなつやばこ<sup>ニ</sup>ぜ。」

彼は歩伏前進で逃げ出す。つたぐ！逃げるなつて。

「ちゅうと待て…。」

首根っこを捕まえた。その時咳ばらいと共に先生らしき人物が言った。

「ともかく卑くしなさい！でないと君は本当に退学になってしましますぞ！」

……悪いな少年。 女の方に突き出されると彼女は上から田線で一言言つて口づけをした。 …… 契約完了だな。 僕も右腕に小さな熱さを感じる。 …… つて事はこいつがこの世界の守護者？ いや…それにしては気配が弱すぎる。

「なつ、何すんだ！」

「契約だよ。詳しい事は後だ。」

彼から湯気が昇り左手首を押された後文字が刻まれ彼は氣絶した。俺も昨日見たローンの中から一つ選び……右手に刻み込んだ。そして彼を足を掴んで一気に左肩へ担ぎ上げた。

「おい、俺の主。」

「何よ…。」

言い方に腹を立てたらしい。 言い方に棘があつた。

「部屋はどこだ？」こいつをおいてくる。 「

指差す塔へ歩きだしたが首だけ右から振り返り言った。

「生徒達、俺の主を罵倒しちゃあんなよ。殺しはしないが怪我を負わせないとは言つてないからな。」

答えは聞かずそのまま歩き去った。

俺も変に木の上で寝ていたので疲れていたらしくて。あの少年を連れてきた後壁に寄り掛かって寝ていた。木の上におりつけまだマシだ。

『あの少女が帰ってきたや。』

力チャコと開く扉の音で田を見ました。ウンフに指を鳴らしてかけた。なるほど…この世界の魔法は日常の事まで扱えるんだな。

「向してんのよ。』

「やる」と無いからただ寝ていた。といひで俺達を平民と呼んでいたが、この世界では平民とはどういう意味だ？」

「はあっ！？あんたそんな事も分からぬのー？」

「俺はこの世界の人間では無いのでな。」

呆れている。見下しているのかも知れない。どうやら俺は中世で質の悪い時期に来てしまったのかもしれないな。ダークネスの話をするのは当分先になりそうだ。心中で小さくため息をついた。

## 召喚されし者（後書き）

認められないのは自分の常識外のこと。人とはこんなにも分かりあえぬ存在なのか？逃げる背を追い俺は思う。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとりの使い魔 縛  
られた使い魔

次回をお楽しみに。

## 縛られた使い魔（前書き）

感想ください……最近は皆さんが私の書く小説についてどう思っているのか、気になつて気になつて仕方ないです。

## 縛られた使い魔

寝ていた少年を呑いた。

「おー、起きる。」

「……………はっ！夢か…？」

誰もいな方を向いて彼は言い、 ゆっくりと油の切れたロボットのように俺達の方を向いて一言。

「夢じやねえ！？」

「胃が痛くなるほど悩んだけどあなたたちを使い魔にする事にしたわ。光栄に思いなさい。」

少女は宣言するよつてひき声で俺たちから離れていった。 一々なんか…上から見てるよつな…。

「一体何処に拉致したんだ！？」

彼は錯乱して色々と呟つ。 だが、 彼女は無視して寝巻に着替えだす。 少年に自分の着ていた制服をぐりゅぐりゅに投げ付けた。

「それ、 洗濯しといてね。 言葉が分からなくても使い魔ならそれくらこ分かるでしょ？」

自分がどれだけの無茶を言つてこるのか、 またくづいていいない。

「（無理だろ…常識的に……）」

当然通じるはずもなく彼女の下着姿を見ないように顔を隠すばかり。  
……俺はどうしてるかって？ そんなの知らぬ存ぜぬの勢いで無視しているに決まってるじゃないか。 別に彼女の下着姿を眺めていても構はないのだが、見ても何も面白くないし見てたら平手が飛んできそうだつたので部屋の観察をしていた。 質素とは言い難いが、必要最低限のものは充実している部屋。 まあ、ほとんどは木材…腐敗してはいな」よつた。 耳は二人の漫才を一言一句逃さず聞いていた。

「命令すら通じないなんて、犬以下だわ……。」

大袈裟に肩を落としたのだろうな。

「おー！ 一体何がどおなつてんだよ！ つーかお前誰だよ！？」

「あーあーうるさい……ピーピー吠えてばっかだし……あつ！ 口封じの魔法、去年教わった奴……。」

確かにうるさいが沈黙の魔法はやり過ぎじゃないか？ と思つたがすぐに後悔する事になる。 俺が見た時、左指で呪文を思い出させるためか、こめかみを抑えていた。 ゆっくりと少年に杖を向け言つた。

「アンスール、レルアン。 直ちに沈黙をもちて我が要求に応えよ！」

「（…！？沈黙の呪文なんかじゃねえ！この魔素の流れは爆は……。）」

最後まで思うことなく、少年も服を持ったまま、その場に魔力が収束し向けられた先で暴走し爆発した。彼は煤で汚れ服は散りになつた。

「なんだ…今のは…。」

少女は小さな驚きの声をあげた。

「ちょっとばかり可愛いから遠慮してたけどこいつなりや力づくりで…あまりにくだらなかつた。だから俺は苛立つ気持ちを隠さず少年と少女の前に立ち彼らの前に手を出した。

「おい…てめえら、俺をブチ切れさせへえのか?ガキ少女、少し主導権を借りるべ。まあ、拒否権は無いがな。」

睨みつければ何かを言おうとするが踏みどまる。この時彼女は一步後ずさる。俺は殺氣を丸出しにして睨みつけた。だから、怖かったのだろう。青年も一步下がる。ふうーとため息一つ。

「まず…状況説明から、だな。」

少年、平賀才人は愕然としていた。の何処かだと信じているようだった。ていたのが手にとるように分かった。たいみたいだな。

だがそれを信じずまだ外国目はちらちら扉の方に向いていた。どうにも隙を見て逃げ出しだが

「で、内容を整理するぞ。ここはハルケギニア大陸のトリステインという国で貴方はこここの魔法学校の生徒で間違いないか？」

ルイズが頷いた後才人は言つ。

「で俺達はルイズさんの使い魔なんだろ？魔法使いとかが連れて歩くあれ。そういう事なら映画や漫画で知ってるよ。」

頷く才人は何処か期待しているようだ。ここでルイズがどちらかを復唱したら才人はここを外国の何処かだと思ったのだろうが…。ただ無視してため息をつく彼女を前に静かに扉を見た。

「はあ……何で私の使い魔が平民なのよ、ドラゴンとかグリフロンとかそういうカッコイイのがよかつたのにーー！」

頭を搔きむしり扉を離したのを機に才人は走り出した。逃げたな

…。やはり非常識な物は誰も受け入れられないのだろうか…。

「あれ？ヒラガサイト？」

発音が間違った言い方でそう呼ぶがすでに扉の向こうだった。

「ガルーム、あんた何処に行つたか分かる？」

俺は黙つて半開けになつてゐる扉を指差した。

「逃げた！？使い魔が！？嘘でしょ！？」

俺は知らないがこれもまた非常識な出来事らしい。まつ、いいや。ともかく……捕まえるか。

「先に行く。」

と言つて外へに出た。左右を見て音のする階段の方へ走る。螺旋式の階段を下れば話し声が聞こえた。

「貴族の手を煩わせもつ一人は僕らを齎したんだ。何も言わずに去るのは礼儀知らずじや無いのか？」

なんだその言い掛かりは……？ 誰かは知らないが、ふざけたやつもいたものだ。

「ああそういうでしたか。それはどうも。それじゃ、そういう事で！」

俺の足音を聞こえた時には才人はさりに走つていった。

「失礼！」

茶色のローブに身を包む少女と黒いローブに身を包む少年。吐き捨てられた言葉は俺の俗称。

「……悪魔……。」

だつたら話しかけるな。金髪の少年をひりひりと睨み見た。

「用は主に聞け。」

それだけを言うと奴を追つた。一階まで降りると才人はすでに出口に走っていた。

「ちつ。魔法無しじゃ追いつけねえ。」

外に出た俺は右脇腹に手を置いた。手に当たる柄。それを握り引き抜けばプラチナの剣、ソウルブレードがあった。俺は念じる。鞭の姿を。剣は鋭いレイピア、ランス…からしなやかになる鞭に変わる。

体制を低くしながら放つた一撃は大回りしながら才人の足を捕らえ彼を転ばせる。なにしろ魔力で30mは伸びてくれる業物だ。芝生の上に転ぶ才人。

「おい、何転んでいるんだ?」

「知るかよ!何かに躓いたみたいなんだけど。」

もちろん鞭はすでに隠してある。

「それはともかく才人、上を見てみな。」

白々しく話を変えた。上空に浮かぶ大きさの異なる二つの月。

「……マジかよ。」

その直後俺達は宙に浮いた。いや浮かべられ無造作に動かされてしまつた。

「うわああつ！助けて！！」

「…くそー離せ！…」

才人は悲鳴をあげ、俺はじたばた足搔ぐ。…魔力無しじゃ脱出できねえ！

「全く、こんな事をするのは当分嫌だね。」

さつきの金髪の少年が薔薇を動かしながら囁く。…あれがあいつの杖か…！ちくしょう、さつきの仕返しか！？

「！」主人様から逃げ出す使い魔だなんてほんと信じられない～！

見物と思われる褐色の女がそう言った。  
立場と現実を知った才人はただ叫んだ。

「つるだらおおおおおおー！…！」

## 縛られた使い魔（後書き）

俺たちの世界とは常識もなにも通用しない中世の時代。俺は悪魔ゆえに、才人はその常識はずれなゆえに世界の刃にさらされることになる。」

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとつの使い魔 貴族の力

次回をお楽しみに。

## 貴族の力（前書き）

感想ください。

レベルが下がつてきたよつな… 戦闘シーンが余計むちゃくちゃになつたかも。

## 貴族の力

部屋に戻るとルイズは才人の首に首輪を取り付けた。俺はなくて助かつたとは口が裂けても言えないな……。

「だから…さつきも説明しただろ！…」

サイトは声を荒げルイズをひたすら睨みつける。

「……信じられない！そんな異世界があるなんて…。」

ルイズもまたこの異常を認められなかつた。

「だが事実だ。」

俺の一言にすごい形相で睨みつける。それ程俺が気に入らないか？  
ルイズは着替えだす。

「寝るからそれ洗濯しといてね。」

下着まで脱ぎ…………その…………ペタンコの胸を見てしまつた。…………あ  
いつを思い出す。同じペタンコの胸のコンプレックスを持つ心優し  
き人魚を。

「テテイ…。」

漫才とも思える二人の会話を聞きながら俺は一人大切な仲間を思つ  
ていた。

その夜……

「よかつたな、才人。女の子の下着を洗濯できて。」

すでに寝ているルイズだが才人はまだ眠れずにいたのでそう話し掛けた。

「嫌ですけど、地球じゃあそんなこと出来ないし。ガルームさんはしたかつたんですか？」

「女の下着の洗濯は慣れてないからバスするよ。それと俺に敬語はいらねえ。」

ふと、彼が震えていたのでゆっくりと窓を閉めた。 ゆっくり閉めたのはすでに寝ているルイズへの配慮だ。

「サンキュー。」

「才人の日本ってどんな感じだ?」

ふと、才人の日本が気になつたので尋ねた。 日本は色々回つたが、色々ありすぎた。 例えば一年中夏だつたり、 タイムスリップしていたり、 政府じゃないがものすごい権力を握つた科学施設が大量にあつたり……。

「何つて普通だよ。」

「普通……か。」

現実に近いってことか。まあ、ある意味一番ましな日本…少し羨ましいな。

「何言つてんだ、アニメはアニメの世界だろ。」

才人は何俺を少し馬鹿にしたよつて言つ。全く言つてくれる。

「そうだな。もつ寝よつ。ここ的生活に慣れるまで大変だ。」

「ああ。お休み。ガルーム。」

「お休み。」

しばらくしていびきをかいて眠りだしたがそれでも震えていたので俺はマントをかけた。そして俺も壁に寄りかかりながらゆつくりと田を閉じた。

「…」

朝日を感じ目を開けた。二人はまだ眠っている。俺は窓に近づき下を確認すると窓をゆつくりと開け窓縁に手をかけて下に飛び降りた。かなりの高さがあつたがこれくらいなら造作もない。

校庭へゆつくりと歩いていく。そして自らに幻術をかけた。

周りに現れる敵の群れ。魔物、人間、機械…さまざまな種類の生命体が俺を見る。右手にすでに来てソウルブレードを握りしめる。

近くにいるものから順に切りつける。  
後ろに迫つたトカゲ人間に

に剣を逆手にして貫を弓を抜く

ビームを放とうとする機械をかまつたがる他の物に向ける 機械は自動的にビームを乱射した。 玉切れと同時に俺はそれを地面

にたたきつけた

月の間も一晩に数回で、朝まで二本の枕を這いながら

「後方に敵！」

と同時に左に飛ぶ。

『左に敵の群れ！』

つま先でステップを踏み右回転しながら敵を引き裂いた。

でよりも強く剣を握りしめた。

『ラスト!』

さつきのゴーレムに飛び切りを加え俺にしか見えないが爆発が起き

た。

「はあ……はあ……タイムは？」

『約10分。警告なしでは後3分はかかつていた。だが、気を落とすことはない。お前は魔法と剣技、二つがそろつて初めて最強の道が開ける。』

俺は2種の拘束を身にまとつている。ひとつは超魔素拘束鎧。  
そしてもう一つは超重身体拘束鎧。これに加え俺のありとあらゆる力を封じる鎖を百重に巻きつけたのが俺の通常状態。しかもある人物から俺の魔法を自重しろと言われていた。まあ、戦闘になつたら従う気はさらさらないが…。

「ともかく汗を流す。人目のないところはあそこだけか？」

『学園の外だな。警備もいない。』

外に移動し誰もいないのを確認する。

「バブル、クリア。」

全身が泡に包まれると水となつて足元に流れしていく。これは肌にのみ反応し汗や汚れ、匂いすらも洗い流す特殊魔法。鍛錬後のシヤワー代わりによく使つている。目を開けるころには更に日が昇つていた。

降りてきた所に戻ると後ろから誰かが声をかけた。

「何をなされていたのですか？」

黒髪のメイドがそこにいた。胸がかなりでかいことだけは追記しておぐ。

「鍛錬だよ。いつから、見ていた？」

「最初のほうから…一人で暴れているようでした。そのあと、外に行つて戻ってきたんですね？」

バブルクリアだけは見られてないな。

「ああ。ところで君の…いや自分からなるが礼儀だな。俺はガルーム。」

「私は学院勤めのメイド、シエスタと言います。」

「シエスターか。良い名前だな。じゃあ俺はそろそろ主のもとに帰るよ。またな、シエスター。」

「はいー。」

笑顔を垣間見た後俺は昨日の道をたどった。帰ると一人はすでに起きていて、下に行くと言い、ルイズから出て行つた。才人が隣に来た時尋ねた。

「…どうだった？初めての朝は？」

「最悪…。着替えを手伝わされた。」

「いいじゃないか。女の子の生着替えを手伝つなんて地球じゃできないだろ?」

「状況が状況だから。」

まあ、いつか。こういう男なのだろうからな。下では貴族の食事が並んでいてサイトも手を出そうとしたが俺たちに贈られたのはたったの一つのパン。テーブルの上ではものすごい豪華な食事を…いや、朝にこれほどかと思うほどの量の食事がそこにはあった。

「使い魔は本来外で待機しているのよ。特別に「あれなら、外のほうがマシだ!!」

サイトの発言にルイズは、歯をかみしめる。才ともルイズを睨むばかり。

こんなタッグで大丈夫か? そう思つていたが……強い殺氣を感じ振り返る。

行くしかないな。

「主、才人、これから予定は?」

「今日は授業は休みよ。」

「俺にあると思つか?」

「…では、少し学園を一人で散歩してきますので、失礼します。」

一礼の後彼らと正反対の方向に歩きだした。しばらく歩いていくとそこには20人近くの生徒がいた。マントは紫、黒、茶、3種あつた。

「要件は何だ?」

その中の一人が杖を向けると突風が吹き荒れ俺を殴りつける。

「くつ…。」

吹き飛ぶなんてことはない。ただ受け入れた。

「生意氣な…平民が…。」

その姿に余計に腹がつたらしい。紫マントの一人が言った。

「いいか!ヴェストリの広場でその生意氣な口を閉ざしてやる!おめえら行くぞ!…」半不良どもはそのまま歩き去つて行った。つまりは決闘といふことか。

「…ちつ…面倒だな。」

勝つのは間違いなく俺なのだが…そんなことに割く能力がもつたいないな…。

「どれもただの生き物じゃないな。若干動物が混じっているが…。」

それにも生き物に目立つあのマーク…あれは一体…。よそ見していたのがいけなかつた。急に目の前に現れた目玉のモンスター

を上からぶん殴ってしまったのだ。モンスターは地面に埋まつたまま動かなくなる。

「はっ！すまない！おーー大丈夫か！？」

「ピッピ……（痛いです…。）」

彼（？）は声を出した。俺は頭を撫でながら叫んだ。語るのは声だけ思いを伝えるモンスター語。

「グルル。（すまない。びっくりして殴り付けてしまった。）」

「ピッピン～ピッピン（こしても言葉が分かるなんてビックリです）。」

近くで生徒が震えながら近づいて来る。

「グググ…ギュル（迎えだ…こきな。）」

田舎の生き物は主に向かっていき、生徒がそれを掴むと一回散に逃げ出した。俺の周りから5mほどの距離をとる者達。俺は黙つてルイズを探しつづけた。

「主。」

「ここまで散歩したのよー。」

ルイズはお茶などを飲んでいなかつた。お茶すらないのだ。だ

が今は、早くあの馬鹿どもをかたずける必要がある。

「遅くなりました。所で、ヴェストリの広場は何処でしょうか？」

「何で？」

「いや……」

しまった！言い訳を考えてねえ…ビーブする…。

「そ、そのような場所があるとは聞いたのですが、あいにく場所まで聞けなかつたもので。」

ルイズはじつといつちを見た後言った。

「あつちよ。サイトがギーシュと決闘することになつたの。止めてもらひえる？」

俺は立ち止まりルイズを見る。

「主…私は貴族と平民の違いを知りません。ですが所詮同じ『人間』と言つ生物のはず。才人の怒りもそこに機縁します。だから今聞いておきたい。」

「魔法が使えるか使えないかよ！そりや私は…」

俺はその返答の続きを聞く気は無かつた。

「主、実は俺も決闘の用がある。」

「なんですかー！？誰とー！？」

「知りません。三色のマントでしたので。数は約20人。」

彼女は震え出してしまった。

「どうして…平民は貴族に勝てないのよー。」

くだらない…

「俺は悪魔ですよ？では失礼。」

「増えたな。」

見渡す限りの生徒。 その中で俺に喧嘩を売つてきたやつらを見て  
そう言った。

「どういう事だよ、ガルーム。」

先に来ていた才人が俺に訪ねた。

「何、軽い挑発が馬鹿なガキどもを起こらせただけだ。」

それだけで殺氣…怒気が強くなる。 ルイズが走つて来てギーシュ  
と思われる胸元をはだけた少年を止めようとしたが無駄だった。  
正直あいつにもガツンと…昨日の復讐~~讐~~したいんだが…

彼の手の薔薇の花びらが一体の青銅のゴーレムを呼び出した。  
騎士甲冑に鉄の鎧。 あの鎧、借りるとするか。

「おい！お前をぶつ潰したい連中を増やし続けるけどいいよな！もう50人越えるぞ！！」

止めてほしいのか、俺に泣き叫んでほしいのか、真意は見えない。だが一つ確実に：才人を殴り倒したゴーレムが後ろから迫ってきたので、そいつの心臓部を貫き大空に放り投げた。

「ほらよ。」

バランスを失った騎士が立て直す前に跳躍し腕を砕き、鎗を奪つた後、ギーシュに人形を蹴り返した。

「魔法無しで50人の魔法使いと戦うんだ。武器の一つや二つ…あつてもいいだ、ろー？」

既に70近くいたガキ達に本物の殺氣をぶつける。同時に鎧に自信の魔力をまとわせ、傷をつけても……上辺だけになるよう…力を調整した。

もし誰かを、こんな人前で殺したら…ルイズが殺人鬼の主になつちまつからな。

「行くぞ。殺さないつもりで行くがショック死は対象外だからな。」

「この…平民が！」

すでにギーシュと才人の戦いはギーシュのいじめに変わっていた。なにも抵抗できずにただ殴られ続ける才人。

俺は鎗を握りしめた。吹き荒れる風を、燃え盛る火炎弾を、土の手を、水の玉を槍を回転させ弾いていく。

「なつ……」

「！」の程度か？俺はまだ本気じやないぞ。もつと、楽しめや。」

「…すげえ～」

観客から聞こえる声。

「あれだけのメイジ相手にあそこまで立ち回つてやがる。」

そろそろ仕掛けるか。走り出し鎗の刃なき端を一人の肩にぶつけ、ゴキと嫌な音、俺にとっては幸せのベルが静かに響いた。情け容赦なく破壊する。隣のターゲットの腹を貫いた。血が吹き出て緑の草原が赤い大地に変わった。その瞬間空気が変わる。

「痛い！痛い！..」

悲痛な叫びにその場から逃げ出す者の前に跳び中央に蹴り飛ばす。互いに頭をぶつけ氣絶する者。俺は鎗に貫かれたままの生徒を鎗から外し他の者に突っ込む。

「ひつー!？」

「来るな！！」

さつきの怒氣は何処にも無い。あるのは、恐怖。

「死ね。」

それだけ言い貫くのではなく、棒の部分で殴り倒す。頭を、鳩尾を。

無茶苦茶に放つ魔法を回避し一人ほど鎧で肩を貫いた。

「これが決闘…戦いだ…！」

愚か者に宣言する。鎧を構えなおした。

「お前、人を殺さないんじゃないのか…？」

端で震えながらこっちを睨む、茶色のマントの少年が叫んだ。

「身勝手だな。決闘をこんな大多数で売つてきて今更命乞いか？それに臓器は貰かない程度で済ましてるんだ。むしろ感謝して欲しいね。」

だがその後に飛んで来たのは才人。

「才人…？」

「隙あり…！」

残った者が一斉に炎と風を放つた。俺は才人や関係の無い者が後ろにいる事に気づいた。

「ちつ…！」

もはやガードをする余裕は無かつた。

「マグネ！プロテクト…！」

攻撃を俺の前で一点集中させ、念のため周りにバリアを張つて鎧で

守りの体制に入っていたが……鎗にはひびが入っていた。バリアは最後に跳んできた岩に砕かれ、鎗はそれを撃ち返すと同時に砕けた。無手になり、体制も崩した俺は風によつて吹き飛ばされた。

「ぐあっ……」

壁にたたき付けられた。同様に才人も巻き込まれて飛ぶ。

「もう十分でしょ？ あんたたちはよくやったわ。だから、もう止めて！」

ルイズが慌てて駆け寄りそういった。先に指がピクリと動き、才人が起き上った。

「いいからどいてろ……」

ガキに負けるわけにはいかないよな……。

「主、邪魔だ。この程度……。」

だが俺はその場にひざまずいてしまった。ざつやら……捻つたらしい。

「まだ続ける気はあるかい？ その気が無いなら僕にこいつ言つんだ。『ごめんなさい』とね。」

「お前もだぜー！」

「ついでに一度と調子乗りますんつてなー！」

最初にギーシュ。続けて紫マントの太つた奴と瘦せた奴が俺に言

う。ふざけるな……。

「「誰が……」」

痛みを堪え立ち上がり才人は剣の方へ、俺は戦場へと歩いて行く。

「主、才人を頼む。」

「でも……」

「足を捻った程度でハンデにはならない。早く、才人を。」

ルイズは才人の側に走っていく。

「武器が無くなつたな。」

「どうかな?」

ここから逆転するには、新たな武器を呼び出すしかない。  
つらに致命傷を『えず』に大ダメージを『えるのは……』  
目を閉じ心で呟く。

「（風の竜王よ。我に翼を『えよ。偉大なる風の剣を。』）」

後ろで才人は剣を引き抜く。熱さを前方から感じる。

「下げるくねえ頭は下げられねえ！――！」

「何も知らないガキどもに負けるほど……。」

目を開けばさつきと同じ光景があった。火も、水も、風も、土も、俺の敵。しかし唯一の違いは俺の右手を風が包んでいたこと。

「弱くねえ！お前達に教えてやる！俺のフルネームはガルーム・ザ・レジェンド！人は俺を『悪魔』！『最凶の守護者』と呼ぶ！」

ようやく形となつた翼の剣を一振りすればなにもかもが消し飛ぶ。

「終わらせよう。最凶の守護者として。」

槍を持っていた時には実は違和感があった。だが剣を握った時にはそれはない。

「お前、メイジか？」

黒ローブの男がたずねる。メイジだろうが、名人だろうが関係ない。

「いや…言つただろ？ガーディアン守護者だ。」

まだ立つ敵を切り裂く。杖から魔法が放たれる前に斜めから斬る。真横から腹を斬る。

「巻き起こせ、いかしめの嵐！…」

切り裂かれた傷から風が吹き荒れ俺と敵対した全てを巻きの中に閉じ込めた。

「風は命を運び、閉じ込める力。」

竜巻はさう早く回り出す。 剣を地面にさし、 僕は右手を前に出した。

「水は命を産み、 命を移す力。」

目の前に顔がないただの人間の形をした水が現れる。

「土は命を支え、 封じる力。」

右手を握りしめるとそこには鋼鉄の Gandrill が出現した。

「火は命を育て、 殺す力。」

その Gandrill に炎がともる。

「全てを碎く…くらえ、 Handrill · Nakkur ! ! !」

竜巻は彼らを拘束し、 その水人形はターゲットにダメージを移し、 鋼鉄の Gandrill は敵の命を封じ、 火は彼らを焼き払う。 僕は右手で急所を外した全てを殴り、 殴り、 殴り…悲鳴が聞こえようがなんだろうがただ殴り続けた。

豪速の連打で彼らを傷つけ最後はアッパー・カットを叩き込んだ。 最初に鎗で貫いたやつら以外が地上に墜ちていった。 それをただ黙つて見つめた後僕は倒れた才人とルイズを連れ部屋に戻つていつた。

裏から聞こえる怨嗟のぐもつた声を無視して。

## 貴族の力（後書き）

傷つけたもの。恐れるもの。だが俺は自らの道を突き進む。どんなふうに思われてもかまわない。俺の目的はただ一つ…。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとつめの使い魔 魂  
の在りか

次回をお楽しみに。

## 魂の在りか（前書き）

今作よりオリキャラ登場。そして…感想ください…。

### レン・ラ・フローレンス

ゼロの使い魔でのオリジナルキャラクター。ゼロ魔では保険の先生（当然女性）がいなかった。（原作を読んでおらずアニメ知識だけですが…）だから作った。後悔はしていない。反省は…ちょっとだけ。イメージはクリミアの天使『ナイチングール』です。水のトライアングルですが、実戦経験は無し。病気の人たちをいやしてきたことからオールドオスマンに腕を買われ、保険の先生として魔法学校に赴任した。

## 魂の在りか

戦闘後、俺は痛みを堪えルイズの部屋に帰った。ルイズを誰かが呼びに来て彼女は出て行つてしまつ。

才人をベッドに乗せた後才人がいつも寝ている藁の所で、俺は壁を背に崩れ落ちた。強大な回復魔法『リバイバル・ライフ（無詠唱なので効果は激減）』で捻挫を治し、何もすること。才人にもほんの少し魔法で治療した。才人には悪いが現代人相手に魔法は使えない。

理由はただ一つ、彼が魔法世界の住人でもなくいつ彼が現実に帰れるのか？ともかく魔法の無い世界に魔法を持ち込ませる訳にはいかない。後はただ、ぼおつとしていた。

「…本当にあんたバカでしょ！？」

最初に飛んだのは激怒した彼女の声。

「あ」「いいから手伝いなさい！！」

…才人は全身痣だらけ。骨も逝つてしまつてゐるかも知れない。まさつき回復魔法はかけていたので死ぬことはないだろうが…。

「仕方ないな。全く…。」

彼を介抱していると彼女から言つてきた。

「…あの後呼び出されたのは知ってるでしょ？」

「ああ。」

「そこでね、男子からも女子からも凄い勢いで謝られたの。」

「そういえばこいつは…。 昨日から出会つてからも周りに馬鹿にされていたんだつけ……。」

「で、なんて言ったんだ？」

俺達に差し込むはずの太陽は、当初差し込まなかつた。

「もう言わないでつて。あたしからも釘刺しどくからつて言つたわ。… 今日みたいな事は二度どごめんよ。」

ようやく太陽が彼女の顔をさした。

「主、俺は貴方を少し誤解していました。」

彼女の肩を優しく掴み顔を彼女の顔の前まで下げた。

「魔法が使えず周りから蔑まれていた貴女…どれほど苦しかったかはかりかねます。」

「……」

「だが貴女はその中で必死になつた。優しい心を持つた。だから教えます。貴女は魔法使いだ。」

「だつて……魔法は……。」

彼女の小さな声を俺が遮る。

「異世界の物ですが、爆発の魔法は存在します。」

「嘘よー。」

「いいえ、本当です。私も爆発の呪文は使用できます。何か不要、  
或は邪魔な物があれば……。」

黙つたまま首を振る。俺は窓を開き空に向けて指を向けた。

「爆散しろ、フレイム、バースト！ エクスプロージョン！！」

沈みゆく太陽の上に小さな太陽が出来て空に昇り。

ドーン！！

「……」

花のように舞い散った。

「爆発はある意味、美です。爆発は対象をただ破壊する力ですが、  
使い方によつてはそれをよい方向に変えられます。例えばあの花  
火のように、道を塞ぐ巨大な硬い岩も内部から爆発させれば壊れる  
でしょう。」

実際ダイナマイトなんて物もあるし。

「結局、それくらいじゃない。」

可愛げのない屁理屈だ…。 しょうがないか。

「でも、他の者は使えない。主だけの力です。それと今後主をルイズと呼んでも構いませんか?」

視線をいつもの位置に戻し手を差し出す。ルイズはその手を握った。

「今後も世話になります、ルイズ。……ルイズ?」

何の反応を示さないルイズを、もう一度下から見上げるとその目は潤んでいた。

「……ありがとう。」

小さな言葉は沈んだ太陽の世界で響いた…。

明くる日、俺は中央塔の最上階に来ていた。

「失礼します。」

「んつ？誰じや？」

外に誰がいるかなんて見てている癖に白々しい……。

「ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールが使い魔、ガルームです。学院長に少々用があつて参りました。」

「うん、入れ。」

おそらく…こいつは昨日の出来事を知っているだろ？ 学院長などだから。他の者はいない。

「一つの質問と一つのお願いがあつて来ました。まず質問から、現在の我が主ルイズ。彼女は爆発しか使えないと聞いていますがこの世界の魔法と言つるのは四大元素を使つた魔法だけですか？」

彼は顔をしかめる。

「どういふ意味かな？」

「私は異世界の魔法の中に爆発をわせる魔法があるのを知っています。しかしそれは四大元素魔法ではない。貴方は彼女の魔法を本當は理解しているのでは無いのですか？つまり…別種の魔法。私は予想として…『無属性魔法』じゃないかと。」

彼は杖を扉に向け扉を閉めた。

「…当たりですね。」

彼は手を組み言つた。

「おぬし、何者じゃ？」

確かに感じる……歴戦の戦士たちの氣配に似たこれは……。

「生徒との戦闘…喧嘩を聞いていれば知つていてるでしょ？」

「…まあよい。で、ヴァリエールの三女の魔法は爆発のみ。他の魔法を使おうとすれば爆発する。無属性魔法…失われた系統の虚無の魔法はその使い手が長年おらずその魔法の正体があまり掴めておらん。唯一分かつてるのは、虚無の使い手は特殊なルーンを持つ使い魔を連れ、一般の魔法より永い詠唱を必要とするだけじゃ。」

□元に握り拳を寄せ少し考えた。条件はほとんど満たしている。才人と他の使い魔のルーン…マークが完全に異なっていた。

「それともう一つ。」

オールドオスマンは一冊の本を差し出した。

「『始祖の祈祷書』じゃ。これには虚無の魔法がかかっているはずなのじゃが……。」

パラパラとページをめぐるが何も書かれていない。だが、僅かに見えた文字があった。

「エクス、プロージヨン……？」

不意に目の前で爆発が起きて互いに黒焦げになってしまった。

「すいません。」

「つむ。じゃがこれで可能性は見えたの。」

ルイズの所持する力……それは虚無。立ち去りつつとする俺に彼は言つ。「よいか、決して他言はせぬようにな。」

他の連中では少々悪い話なのかもな……。まさか人体実験なんて事は……無いよな?階段を下る途中で足を止めた。

「あれ?何か忘れているよ?」

ふと、昨日ボコボコにした連中を思い出す。そういうえば、保健室の場所を聞きに行くつもりでもあつたんだ！！慌てて階段を駆け上がり扉を握りしめ開こうとしたが開かない。結局冷たい風の中待ち続けるしかなかつた。彼の秘書が来るまで。螺旋階段の上は寒かつた。今度からは気をつけよう。

「あら、貴方は？」

保健室につくとまだ昏睡状態の生徒でいっぱいだつた。内装はベッドと隔離のためのカーテンだけがある。窓は開かれていた。

「貴方がレン先生ですね？」

まだ新任の水のトライアングルと聞いていたが……。年若いベージュ色のカールした女性。それが彼女だ。

「……貴方、まさか……。」

彼女は杖を掲げるが。その前には彼女から杖を奪つていた。そして強奪物を彼女に向ける。

「こいつら全員ヤバイのか？」

杖で軽くベッドを叩くと黙り込んだ。

「いいだろう。」

杖は彼女の頭上を通り越え向こうで渴いた音とともに落下した。彼

女がそれを目で追う間に俺の手は右脇腹の位置にあった。手の腹が何かにぶつかるのを感じるとそれを握り引き抜いた。白銀の刃が光る。

「武器！？」

俺はレンに刃を向けた後剣の腹を向け目を閉じた。

「（意識を研ぎ澄ませろ。周りの魔素から対象の距離を知れ！自らの魔力を絞り圧縮し癒しの魔素の流れを掴め！）」

ギンと目を開き直つ。

「禁術、55の5-リバイバル、ライフ！！」

剣から光があふれ傷つけた者達を包んでいく。昨日自分にかけた詠唱無しの中途半端な物とは異なる本物の…何万人もの致命傷を癒す禁術。

「じゃあこれでこの前の喧嘩はチヤラだ。」

ふと、気づけば彼女が子供のよつな、キラキラした目でこっちを見ている。服の袖が捕まっていた。

「どうしました？」

「……師匠と呼ばせてください…！」

「はい！」

訳がわからず悲鳴をあげた。

レン・ラ・ハブリエド。それが彼女の名前。それだけが俺の頭の中で燃っていた。あの後。

「夜に外のカフェで待ち合わせをしましょう。」

と約束してルイズの部屋に戻ってきた。

「ルイズ、授業は？」

「サボった。」

「…大丈夫なのか？」

「平氣。コルベール先生の授業だから。」

コルベールつてのがどんな奴か知らないが、相当下手くそな授業なんか？

「後、仕事。」

「仕事？」

出されたのは洗濯力ゴ。……ああ分かった。

「ではルイズ、行つてきます。」

返事は無かつた。

「…サイトとは違つ。他の人とも違つ。ちい姉様に似てる…？」

私は何故か動搖していた。ガルームは優しい。最初の悪魔（自称）のようない冷たい接しかたじゃない。昨日からそうだった。私を認めてくれた。

「そういうば、サイトもガルームもどんな生活をしていたんだろう。」

サイトはよく分からぬ。非常識な行動ばっかりするし、平民なのに貴族に勝つちゃうし。勝つちゃうのはガルームもか。ガルームは自分で魔法が使えた。武器を自在に扱い何十人ものメイジを倒していた。もし…戦場だつたらもつと楽だつたのかも知れない。ガルーム、『臓器を貫いていない』って言つっていた。事実ガルームが最初に貫いたはずの生徒はお腹の傷がほとんど無かつた。ううん、ひょつとしたら今日か、明日には皆元気になつてゐるのかも…。優しいけど…怖い。あの人は何をやろうとしているのか分からぬ。私は眠るもう一人の使い魔の隣で悶々と考えつづけた。

「…」

無言で洗濯をしていると人の気配が近づくのを知り振り返つた。

「ガルームさん、洗濯ですか？」

「いや今、終わった。シエスタは？」

「もうすぐ昼食なのでテーブルクロスの手入れをしていました。忙しいので、では。」

あつさりとした別れに俺は一言。

「手伝おつか？洗濯物を干したらじぱりく暇になる。」

「でも、ミズヴァリエールが「ルイズ…主は才人につきあつりでな、暇なんだ。残念ながら才人を治療する手だけは俺には無いんでね。」

シエスタは少し躊躇していたが笑顔と共に了承した。

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

……何でなんだろう。妙にあいつらを思い出してしまつ。会いたいと思うのに、ここにもしいたら怒鳴られてくる自分がありありと想像出来てしまつた。

「ガルームさん？」

「すまない、少し考え方をしていた。」

雑念は洗濯物の水つ氣と一緒に振り払つた。

結果から言えばやり過ぎた。テーブルクロスの整備、学院内の掃除、果てには他の洗濯すらも手伝っていた。

「ガルームさん、以前こいつ言つ仕事をなさつていたんですか？お上手です。」

「そうか？」

そう言われるが仕事は彼女の方が早く片付けていく。

「よつと、そだガルームさん、時間があるなら厨房に来ていただけますか？」

「いいだろう。」

そこは小屋だった。入口に立てばおいしそうな料理の匂いがした。

「ガルームさんをお連れしました！」

中の人達が一齊に俺を見る。……何？この羨望の……いや何かに熱中しているファンのような瞳をしているここつらは？

「よつとや、我等が厨房へ！我等の翼！—！」

「我等の翼？」

シエスタが耳打ちしてくれた。

「サイトさんとガルームさんが貴族の方を倒してしまったから、一  
人のファンになつたんですよ。」

なんとも体格のいい大男がいきなり首に手を回してきた。

「ちょっ…」

無意識に体制を低くしていた俺は一步下がる。

「親愛の表れだらうけど、止めてくれ!」

「いや、参ったね…俺はコック長のマルトーだ。」

逃げの体制をとつていたが姿勢を正した。

「俺のフルネームはガルーム・ザ・レジョンド。ガルームと呼んで  
くれ。で、何で俺が我等の翼なんて呼ばれているんだ?」

もつともな疑問を口にする。

「私が命名したんです。ガルームさんが戦つている時、鳥のように  
見えたんです。時に飛び上がり、時に大地を走り召喚した翼の剣で、  
敵を切り捨てて…」

「あれ? ジャあガル」言つとくが魔法使いじゃないぞ。」

誰かが言いかけたが直ぐに訂正する。

「少なくともこの世界の魔法は知らない。じゃあそろそろ何か手伝

おつか?」

だがその言葉は周りのコック達に止められた。粘り強く交渉を続け野菜を切る作業だけを手伝つた。

夕方になり畳に乾燥させていた洗濯をしまいルイズの部屋に戻ってきた。

「遅かつたわね。」

「すまないな。周りの連中と仲良くしてきた。」

「見てたわ。」

最初の直ぐに怒る様子がない。何があった?

「ルイズ、なにかあつたか?」

「……何でもないわ。」

「しかし……」

「何でもないの……」

元には戻つたが俺には彼女が泣いているよつこしか見えなかつた。

ずいぶんと冷え込み夜空には一つの星しか見えない風だけを感じる世界。中央塔と寮の近くに白い椅子とテーブル…。そこに一人腰掛けっていた。

「いたいた。」

レンが歩いてくる。

「貴族が使つている所を借りてすまないな。」

「私は気にしてませんが… 気をつけてくださいね。では本題に入りましょうか。」

「…」口していた子供の笑みから一変、目を細め真面目に顔になつた。

「…貴方の魔法…属性…こそ…ちらに近いものがありますが、決定的に違う。だから教えてほしいんですね。生徒達の安全のためにも。」

「なるほど、興味と教師と言つ義務か。」

「…」めんなさいね。」

「氣にするな。俺がお前だつたら言い回しはともかく同じ事をするはずだ。」

再び子供の笑みに戻つた彼女。つられて俺も苦笑した。

「じゃあ俺の秘密を一つ教えてやる。俺は人間じゃない。」

「それ、秘密なんですか？『悪魔』と豪語なされてたじやないです

か。」

だけど『架空の悪魔』の名を借りたとは言え、『本物の悪魔』に喧嘩売る阿呆が実際いた。

「ガルームさんって優しいですから、自分を恐ろしく見せようとしてる。」「

どうやら杞憂だったらしいが変な方向に取られた。

「いや、本当だから。」

「じゃあ証拠見せてください。」

「ヤニヤしていた彼女を前に俺は悪魔の翼を広げた。笑顔が固まる。再び沈黙が辺りを支配した。

「……」これで分かつただろ？俺は忌み嫌われるべき存在だ。魔法の件もこれで「凄い！」はい？

今まで見た事が無い笑顔を見せたレン。（出会ったのは今日）

「本物だーー！ねえ、飛べるのー？飛べるのー？」

……………どうなってるんだ？普通怖がるよな？

「あの～レンさん？」

「はっ…私は何を？」

深くため息をつくしか無い…

「で、魔法の件はどうするんだ？」

「水魔法を見せてください。私は治療はしたことあるのですが実戦をしたこと無いんです。」

その後色々と話してくれた。彼女は貴族の生まれながら直ぐに両親が亡くなつたという。孤児院に預けられそこで魔法の力を持つている事に気づいたらしく。孤児院で出来たのは治療だけだったようだが。それから平民としての苦しみ、医師としての技術を死ぬ氣で学んだ少女生活を経て偶然にも祖父母に再開し、貴族の名を知りハルケギニア中を歩き平民を中心に医師として活動を続けていたが…オーレドオスマンに腕を賣われ赴任した……。

「そうだったのか。」

「ええ。」

「なあ、どうして俺に話しつけた？普通怖がるだろ？」

草が揺れる音がする。風は一段と冷たくなる。レンはランプを見ながら言う。

「確かに師匠に直接会つまでは恐怖を感じました。でも喧嘩した相手を自分から癒すなんて普通しません。」

「レイズに後ろ指指され無いようにするためだ。」

「違う…純粹に治したいって貴方は訴えてました。」

俺は……根負けした。

「やれやれ……とんだお嬢様がいたもんだ。」

空を見上げるとさつきまで真上にあつた月は随分西へ行ってしまつてゐる。

「やうやうお開きにしちゃうか。」

「そう……ですね。」

俺は彼女にそのまま座るよ<sup>リ</sup>ジ<sup>ス</sup>チヤーした後昨日の決闘で使<sup>ハシマ</sup>した移し身を用いて椅子を作る。触れて確認したが普通の椅子と同じ強度だ。大丈夫だろう。多分。

「これがあの決闘で用いた移し身。」

「ほお～。水の生成から強化による固定……一般的な物でもいいんですね。」

「魔法は戦いだけの物じゃない。人を助ける力だと考えるから。」

「……でお開きじゃないの?!」

「ではもう一つ。魔力の水は魔素とともに消える。だから使える……リバースプラッシュ!」

水椅子の前に彼女の自室までの川ができる。

「原理は自分で考えろよ。じゃあ、お休み。」

水椅子に彼女が座るのを確認すると元の椅子を押した。同様に水椅子も同じ方向：川の上に乗るとゆつたりと流れて行った。俺も部屋に戻つていった。

## 魂の在りか（後書き）

傷ついたものがすべて目覚めるとき、あまりにも確率の低い…奇跡の出会いを果たす。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとつたりの使い魔 真実の剣

次回をお楽しみに。

## 真実の剣（前書き）

才人が美化されていくのはもう少し先になります。にしても……下書きからここまでに時間がかかりすぎ…………。感想がほしいです…………。先生方の性格がおかしくなったかも…………。ほんとすんません。

## 真実の剣

その翌日、才人がようやく目を覚ました。

「ゾゾゾゾ……」

テーブルに伏せる彼女に上着をかける。

「はあ……俺がいるからいいものの……」

才人の事を考慮しあんましふベッド下などが掃除していないことが祟ったのか、部屋が少し汚れている。もちろん清潔の方がいいに決まっているがデカイベッドに振動を『えず』に『じづ』、掃除しきつてんだよ……

こんこんとノック音がした扉を開くとシエスタがそこにいた。

「おはよう、シエスタ。」

「おはようございます。ガルームさん。」

手にしているのはパンと水。

「それは？」

返答をきくまえに才人は目覚めた。

「んん、ああっ……。」

「お目覚めですか？よかつた！三日三晩眠り続けていたんですよー。」

「君が…どうして？」

「…食事をお持ちするよつミス・ヴァリエールから言いつかったんです。」

「疲れたんだろ？ な。ほぼずつと看病していたから。」

そつと近づいて髪を撫でる。

「ガルームさん！？」

「！」の小さな魔法使いへ魔界騎士からの祝福を。」

シエスタは驚きと非難の声をあげるが気にしない。才人もルイズをじっくり眺めていた。

「ひつしてりや 可愛いのに…… もつたいないな…。」

「？」

聞こえてない彼女は首を傾げた。

「へへへ…」

対して聞こえた俺は笑い声を隠すのに必死だった。彼はごまかしの笑みを浮かべた。

「くそー。無駄にヒラヒラしやがって…」

「諦める。これでも量は減らしたんだから我慢しろ。」

しかし才人の怒りは収まらない。いつか仕返しじてやると呴く彼にため息をついた。

「こんちくしょうーー！」

ルイズは俺達に大量…一日分の洗濯をまとめて俺達に押し付けた。しかも才人は今まで手で洗濯などしたことがない。洗濯物を干した所で才人は薄く白い双月を見て呴いた。

「いつになつたら帰れるんだろう…。」

「帰りたいか？」

「当然だろ？」

相当嫌なのが…怒り、悲しみ？憎…今までいくか？ともかく双月を睨みつけていた。その時ルイズが来た。

「ルイズ。」

「教室へのお供もしないで何してんのー？」

「怒らないでくれルイズ。遅れてしまないが。」

「……」

俺が謝つて いる間 才人は終始無言でただルイズを睨んでいた。 さ  
らに視線を感じ周りを見回せば褐色、赤髪の女が才人を見ていた。  
男好みのする… そんな気配を感じた。

「火、水、風、土の魔法は複数組み合わせる事で、より強力になり  
別の効果を発揮します。そして私達メイジはいくつ組み合わせる事  
が出来るかでランクが決まりますがそのレベルは？」

ミセス・シュブルーズ。 彼女は土属性のトライアングルメイジら  
しい。

見かけは既に中年を過ぎ高齢の年に入りそつだが…（失礼なので  
これ以上の考察はしない。）

彼女の問いにルイズの後ろの少女が答えた。

「一つの組み合わせができればライン。三つでトライアングル。四  
つでスクウェアと呼ばれますわ。」

「よろしい。さて皆さんはまだ一系統しか使えない人がほとんどか  
と思いませんが…」

話を遮るように手を挙げた。 視線が集中する。

「どうだ。」

「気に障る」ともなく発言を促した。

「スクウェアクラス。則ち四系統融合魔法… その中でもっとも強い  
魔法を教えていただきたい。」

隣で何か音がするのを聞いて、見てみると才人が女子のスカートをのぞこうとして天誅を受けていた。

まあ、当然だな。

「ひとえにスクウェアクラスの魔法といつても多々あります。今ここで説明するには膨大な時間がかかるので後で私の部屋にいらっしゃいな。私の知っている魔法をお教えしますわ。」

「失礼しました。」

「それに、ミセス・シュブルーズ。お言葉ですがまだ一系統も、使えない魔法成功率ゼロの生徒もありますので。」

ゼロといつ部分を強く囁つのはあの赤髪の女。生徒全員の視線が集まる。

「ああ、なるほどね。」

才人は何かに感づきいやらしい笑みを浮かべる。

「…………」

彼女の手が震えている。

「おほん!ともかく皆高にクラスを田指すよつにーでは今日も確認として『鍊金』の呪文を勉強をしていきましょー!」

この後俺が特に質問することはなかった。

ただ、鍊金…これだけはいつか会得したいと思つた。

授業も終わり、別の塔に向かう途中才人はルイズに言った。

「なんで他の連中がゼロのルイズっていうのかようやく納得したで、です。なるほど、言いえて名ですね。属性ゼロ！ 魔法の成功確率ゼロ！！ そんでも、貴族。ああ～スンバラシ～～～」

まずい、このままではルイズがぶちぎれる。せっかく励ましてやつてるのに！

「才人、その辺にしておけ。ルイズだつて臨んで失敗しているわけじゃない。お前だつてどんなにやってもできることをネタにゆすられたら悔しいだろ。」

「……はつーーー主人様！この使い魔、歌を作つたです！」

「才人！…ふざけたものは歌うなよ。」

「分かつてるつて！」

ケラケラ笑う彼が本当に分かつているかどうかは不安だった。…それは的中することになる。

「歌つて…『らんなさい。』

「はい！かしこまりました！ルイ、ルイ、ルイズはダメルイズ！魔法ができない魔法使い。でも、平氣！ゼロのルイズは女の子だもん！」

腹を抱えて大笑いする才人。

反省などしていなかつた。当然怒りに震える彼女。

「ルイズ、落ち着いてくれ！あなたはダメでも、ゼロでもない！だから、ルイズ！落ち着いてくれー！」

髪が、怒りで揺れている。

'НННННН...' 1

۱۰۷

「」の使い魔つたら、ご、ご、ご主人様になんてことを言つのか  
しや……。」

「あの、ひょつとして怒つてます？それも、猛烈に？」

「当たり前だ！！」

そしてJUHMTNOはトトロ。

「ゼロって言つた回数分、ご飯抜き！！」

もう、見てられねえ。

「当然の報いだ、受けとけ馬鹿。」

その場から早々と立ち去った。

「はあ……」

使い魔たちが集まるその場所で横になる。 最初はだれも近寄らなかつたがあの田玉が近づいてきた。

「ぎょりょ（ひにけは）」

「ああ。」

「ぎょ（へ）」

モンスター語使わないと。

生き物は鳴き声の中に感情を入れる。 だから共通語などない。

鳴き声の中に感じる心から言葉を受け取る。 それがモンスター語。

「グルル（ニニニちは）」

「ぎょろる～ぎょぎょ（今日も～～天氣ですね）」

「グル（そうだな）」

近くにいた大蛇が近づいてくる。

「シユルルル、シユルル？（あんた俺達の言葉が、分かるのかい？）

「

「グル（ああ）」

それを皮切りに周りの使い魔たちが集まってくる。しかも一斉に話したのだから俺にはついていけない。

「がるぐるぐる、グルル（一斉に話すな、俺もだれに話したりいかわからん。）」

「モグモグ（あの…）」

一匹の大きなモグラが近づいてきたのでそつちに顔を向ける。

「モグモグモグググ（ひとつお願いがあるのだが、聞いてもらえるか？）」

「ガル（ああ良一だ。）」

「モグモグ（ご飯ください）」

「はつ？」

周りを見ると同じようなことをいつも使い魔たち。あの風竜ですらこつちを見ていた。

「分かった。マルターのおやじさんに頼んでくる。」

立ち上がりつた時に視線を感じてそけらを見るとシエスタがいた。

「ガルームさん、なにしていらっしゃったのですか？」

「ああ、こいつらの飯を頬もつと思つてね。」

「使い魔の『』飯…ですか？」

「腹ペコなんだと。全く主は何やつているんだか。」

そこに通りすがる男性。長い杖を持つ聖職者（坊主頭だから）の  
ような人だ。

「こんちは、ミスター・ゴルベール。」

「こんちは、シエスター君。それと……。」

彼は急に眼を細める。

わずかながらに感じる殺氣。子供たちとは違つ……こいつ……なにか  
が違う。うつすらとだが、魔力を解き放つ。  
隣のシエスターは何が起きてるのか分からず俺たちの顔を見比べるば  
かり。

「貴方がミスター・ゴルベール。主が言つてましたよ。あまり面白味  
がないと。できれば貴方の授業を見てみたい。」

彼は殺氣を抑える。いや、わざとじゃない。多分この人は俺を  
見て無意識に殺氣を放つていたんだ。

「ふむ…君、名前は？」

「ガルーム、ザ・レジェンド。人は俺を悪魔と呼ぶ。」

「やはり、ガルムではないのだね。」

しまつた。ここにじゅうじや、ガルムで過ごすつもりだつたんだつけ？

「ガルム、ガルームでも所詮は同じ悪魔…。ところで貴方の授業をルイズが受ける日はいつですか？」

「それなら今日の正午」ごろの最初の授業でまた会おう。では、失礼。

彼が去る姿を見ておれも厨房のほうへ。彼らの飯は貴族連中が残していったものをさらに調理しなおしたまかない物だが、彼らは喜んで食べていた。

「ふつ、お前さんほんと、良い奴だな。」

「別に……悪魔は気まぐれなだけですよ。おやつさん。」

「なぜつむぎ？」

「ああ、あまり使わない言葉ですが敬うべき男性の親しい呼び名です。ですから、お世話になりますよ。おやつわん。」

「なんか、いいなそれ。」

「コック長！料理の準備整いました！」

「よし、じゃあ呪つてしまおう。」

「『まご』！」

「ツクたちは作ったものを必死で運んでいく。その誠実さにほおを緩めた。

「どうしました？ 我らの翼。」

「いや、何でもない。」

「…といつわけで、良いですか？ 物質はその姿かたちを温度で変化するのです。たとえば先ほど水を冷やして氷にしましたね？ ですが温まればまた水に戻る。そしてさらに温めると水は消えてしまう。ですがこれは水が水蒸気という別に物質に変わったのです。すなわち…」

水の三態か。つまらない授業ではない。この時代でここまでやるとは実に面白い。

「氷、水、水蒸気、このように固体、液体、氣体のように変化します。これはすべてのものに共通です…」

周りは興味なさそうだな。仕方ない。俺は黙つて手を挙げた。

「どうしましたかな？ ガルーム。」

「いえ、あまりにも周りが退屈そつとしてるので一つ面白話をと。」

「

「これに関係ある話かな？」

「ええ。鉄は熱くなると溶けます。液体状に、ではその鉄を再び冷やすと何になります？」

これは周りの物も興味を持ったようだ。

「すなわち、本当に液体状に鉄を変化させることができたとき、爆撃にもありとあらゆる攻撃から身を守る住処ができるでしょう。魔法じゃ決して真似できない。興味は……ありませんか？ミスター・ゴルベール。」

鋼鉄の可能性を今、示したのだ。

「ふむ……」

「雑談はこの程度にしましょう。それに……基本がわからなければ応用なんてできるはずありませんからね。」

ザワ……

空気が変わった。これならいける。

「ククク……悪魔から啖きは以上ですよ。」

隣のルイズを見ると呆れ半分、だけど興味ありげにこっちを見ていた。

「今晩は、ミセス・シユブルーズ。」

「いらっしゃいガルームさん。」

もはや小さな図書室のような部屋で本だけと言ひ感じだ。

「凄い数ですね。」

「ええ。でもこの世にある物は本では全て納まらない。ソレでしょ？」

「確かに。で、俺が探していたような物が載っている本は？」

彼女は杖を天に向けると、10冊程の本を出した。

「この中に？」

「分かりませんが、間違いないこれには無かったわ。もしあるとすれば、これを。」

一冊の古い本を彼女に手渡す。

「では。」

その本を開けて探すも、一種融合魔法などがほとんどだった。中には同じ属性魔法の物もある。そんな中彼女は言つ……いや独り言だつた。曰はその本に向けられたままだつた。

「この世の伝説に残虐なある王は四つの属性魔法を四本の杖で操つたそうです。ですがその杖が一本、また一本と破壊される度に王は全てを失つていったとか…。」

興味深い話だがそいつはきっとマジックアイテムで魔法を使い分けていたんだろう。…使い魔がそうしたのかも知れないが。

最終ページまで読み進め、閉じた。

「……無いな。」

ふと外を見ると入った時に目に突き刺さった夕日は沈み双月が外から中を覗いていた。

「…この間にかこんな時間までお邪魔してしまいました。」

「…ええ。そうね。私も気づかなかつたわ。……クスッ。」

急に彼女は微笑みを浮かべた。

「レン先生の言つとおりね。」

「?レンさんが?」

「貴方の事を面白く優しい人だと。私も初めはとても心が冷たい人かと思えば…違つたのよね。」

「いや…最初からありのままに接しようとしただけです。帰る予定でいましたが予定変更です。もつ少しここにいてよろしいですか?」

「ええ。異世界の事や貴方の話が聞きたいわ。」

「なら、私もこの世界の歴史や国の事を教えてください。」

互いに笑い、酒とほんの少しのつまみを共に時を忘れて談笑した。  
それでも終わりは訪れた。

「またいらっしゃい。」

「貴方のような美しいかたが若い男を自室に招くといらぬ誤解を受けますよ。」

「あら、そう?..」

「残念ながら私はその気はありませんがね。」

軽いジョークでも微笑んでくれた。

「ふふふ… そうだ。ギター先生には気をつけなさい。」

「何故?」

「彼も貴族主義なの。私のように貴族と平民の差を考えないのは、  
レン先生とコルベール先生と学院長ぐらじよ。変なトラブルを起さないでね。」

「はい。ではお休みなさい。」

「また明日。」

手を振る彼女を見た後扉を閉じた。

このハルケギニアにある大国は五つ。　ジー、トリステイン。　隣の軍治大国ゲルマニア。　魔法大国のガリア。　この大地から3000㍍上空の浮遊大陸アルビオン。　そして…遙か南にロマリア連合皇國。　年若い教皇が治める国らしい。

魔法についても興味深い事実が分かつた。この五つの国は始祖ブリミルと言う者が名称も知らぬ魔法によりこのハルケギニアを作り上げた…この世界の伝説を…だが話を聞けば聞くほど疑問が湧いた。一つ。大陸…いや世界を作る魔法は神々すら自ら禁じる『創造魔法』しかない。だがそれは天上界から一度たりともその情報が流出した事などない。じゃあ誰がブリミルに『創造魔法』を教えた?二つ。いくら魔法の力が満ちる世界とは言え無属性魔法を使っていた彼が四属性を使っていたのが解せない…いや知つていただけか…?きりがないな。止まって外を見て考え方をし続けた時間を切り上げ、ルイズの部屋に向かった。

腹減りの虫が部屋中に響く。

「あの…」

「無理。」

「まだ何も言って無いんですけど。」

扉の向こうまで聞こえる声に顔をしかめ戻ることを止め廊下で睡眠を取る事にした。

「何やつてんだろ……俺……」

啖きは小さな風となる。才人は結局放り出され、偶然通り掛かったシエスタに厨房で案内して貰った後、今度はあの女…キュルケが才人を半ば拉致され、ルイズに見つかった。昼の時よりも怒り狂う。まるで龍のようだ。

ルイズが彼女との因縁を語った。相当深い因縁を……そして俺はベチン、ベチンと言ひ鞭の音を無視し廊下で眠りについた。

「はああつーー！」

土、風の魔力で構成された竜が牙を剥ぐ。体から日々の属性の魔道弾が迫る。

「マグネ・プロテクトーー！」

集中させ防御のバリアが現れる。ギリギリと音を立てれ弾。

「カウンター…マグネーー！」

今度は跳ね返り敵に直撃する。今度は水と炎の竜がブレスを吐く。

「馬鹿が。」

同じ事が繰り返され四匹が怯んでいる間に突進し四体が重なる部分を断ち切つた。硫黄より強い腐つた臭いがした。

今日は昨日の話を参考に四体の龍の尾を無くしたハサのオロチのようにした魔物を幻術で呼び出した。まあ、皮膚は柔らかめにしといたし当然か。それからさらに硬い鱗を持たせた竜を呼び出す。

俺はだらんと手を下ろす。竜は鎌首をもたげ咆哮をあげる。俺はただ攻撃か首が迫るまで待ち続けた。こうなると我慢比べだ。先に仕掛けた方が負ける。それでも竜は口からブレスを吐こうと口元から煙をあげ、俺も殺氣を放つ。背後から死神がはい上がる恐怖を与えた。

「ギャア？ グルルル（どうした？ 長蜥蜴）」

自分で自分にかける幻術だから挑発など意味の無いはずだった。だが四体の内二匹は更なる咆哮をあげ首を伸ばす。単純な噛み付き。だが当たれば人は即死する。連續なその一撃を一步踏み込みかわしまとめて首を飛ばす。硬いが越えられない壁じゃない！

「喰らえ……！」

そのまま走り一匹の胴に剣をぶつける。

「はああつつつつつ……！」

断ち切る……！

そして後ろには鋭いオリハルコンの牙を兼ね備えた土竜が口を開き閉じた。そして一度と開かず光となつて消えた。そこには下に向かつて地面も貫く白銀の刃があつた。明日は更に強力な物を考えないとな……

「お疲れ様です。」

「シエスタか。」

「やっぱ凄いです。今日は何を?」

「竜退治だ。…?」

今、才人とルイズが出かけて行つた?  
にしても才人、馬にも乗つ  
たこと無いのか……。まあ当然か。

「ガルームさん、これ。」

差し出されたのはタオル。

「ありがとうございます。ところでシエスタ、町はどう行けばいい?」

タオルで軽く汗を…拭いてよかつたのか?仕事を増やしてしまつた  
な…

「この道を真っ直ぐ進めば城下街がありますよ。」

「そうか、ありがとうございます。にしても今日もサボりか?」

大丈夫かと思つたのだが。

「今日は虚無の日と言つて授業はお休みですよ。」

田曜日か…なるほど。

「じゃあ俺も出かける。出来れば向こうに行つてもうらえるか?今

からすることを勘違いされたくない。」

頼むと頭を下げシエスタには戻つてもらつた。周りに人がいない事を確認し言つ。

「来い、雷速の一角獸。遠く離れたこの地に、今こそ降り立て  
!! 禁術！ 100の5！！ デイメンジヨンゲート！！ いで  
よ、イクシオン！！！」

真っ直ぐではなく『う』を描くような曲がった角。ふさふさとした白い体毛。筋肉がしつかりとした体。かつてスピラにいた召喚獣『イクシオン』召喚されし獸は今たつた一人の主のためだけに走る名馬。

「久しぶりだなイクシオン。」

「うん。ガルームも元氣で何より。」

ちなみに喋ります。

「さあ頼むぜ。この道を真っ直ぐ道なり!」。

背中に飛び乗り雷速の一角獸に光の手綱を付ける。あくまで自分が落ちないようにするためだ。胸当ての所に結んだ手綱を持ち音を立てる。

「頼むぜ！」

「了解！..」

いななきをあげそれは走り出す。

イクシオンは雷の音と同じ速度、則ち音の速さ（約秒速340（m/s））で走る駿馬。

直ぐに見えなくなるがその名馬を呼び出す光景を見る者がいたとは気づかなかつた。

「見えた、あれだ。」

大きな城が遙か彼方に見えた。町の入口では一人乗りした馬が一匹。

「ルイズ！才人！」

声をかければ振り返りイクシオンは走るのを止め歩きだす。

「一角獣！？」

後に聞いた話だが一角獣は王家の物らしく何処から奪取してきたのかと思つたらしい。

「なあ、もう少しゆっくり歩けよーー！」つちは腰ががたがたなんだ！」

才人は悲痛な声で訴えるが知らん。

「所で主何を買ひに？」

「才人の剣。……ここだ。」

路地に入った小さな武器屋。先に才人に入らせた後、体内からソウルブレードを引き抜き中に入った。「この店…余り質は良くないな。

「こりつしゃい。」

「こりつに合う剣が欲しいんだけど。」

才人を一目見ると少々小さめの突撃剣トライアックを渡した。

「あの時もつと大きな剣を振ってたわよね。」

ルイズが剣を見ている間俺は店主に一つ頼んでいた。

「こりの剣が入りそうな鞘は無いか?」

店主は軽くソウルブレードの刃を弾く。きーんと金属音がした。

「こりや、本物だ。」

「で、あるか?」

「へい、失敗物ですみませんが。」

彼は慌て中に入り一つの鞘を持ってきた。

「…間違つて鉄製の鞘にしたんだな。」

鞘が重すぎて使えないものになっていたが、俺にはちょうどいい。溶かすのもつたいなかつたのだろうな。半分ぐらいは使い物にな

らなくなる。

「へえ。あつしももつと若い頃は自分で打ってたんですが。」

「いくらだ？」

その時後ろからルイズが服を引っ張った。

「ちよつと一買ひのはあたしなんだからね！」

店主は少し迷っていたが…

「新金貨で5枚で。」

「保留。」

「彼には大剣を。これでいいだろ、ルイズ。」

再び店主は中へ。彼は鋼の大剣を持ってきたが、ルイズが今用意していた金では足りなかつた。

「一番安くていい。大剣にしてやつてくれ。」

ようやく彼が持ってきたのは鎧び付いた剣。まあ研ぎ直せば使えるか。

「いくらだ？」

「新金貨100……まけて90でや。」

話の主導権をルイズから奪つてしまつていたがよつやくルイズは言った。

「それ頂くわ。」

「えへー!？」

文句を言いつつ靴も貰い才人は外に出る。俺は最後に店主に言つた。

「あんた売るより作る方が向いてるぜ。」

彼が何を思ったかは知らない。学院に戻った後俺はミセスシュブルーズに鉄の鞘の強度を上げてもらつたうえで漆黒の鉄の鞘に純白の刃を収めた。

「何の騒ぎだ?」

部屋に戻つた。中では才人は今日買つた剣を持っていて、近くにはルイズ、キュルケ。そして黙々と本を読む少女がいた。あれ?あの水色の髪をさつき聞いたような…まつ、いつか。

「帰るわよ、タバサ。」

キュルケとタバサ…彼女らはでていぐ。  
いや、あの青髪の少女が止まり俺の顔を見た。深い瞳が俺をのぞきこむ。その中にあるものは警戒と未知の物を見る心…。長いと思つた一瞬だったが、すぐさま歩いていく。

「おやすみなさい。」

その後ろ姿に頭を下げた。

『相棒…気をつけな。』

「へつ？」

その剣は俺を警戒するようにと、才人に言つた。……ふざけんな。  
冷たくはつきりとその剣に告げる。

「喋る剣か。」

後にデルフリンガーを加えた三人は語つた。あの時のガルームの目  
は召喚直後の見るものを凍り付かせる『悪魔の瞳』であつた事を…  
…。そしてこの出会いこそ運命の最初の歯車だつたこと…

## 真実の剣（後書き）

存在を知る者は恐怖する。存在を知らぬものもその名を聞けば恐怖する。ならば…その存在の意味はどこにある…叩きつけた感情は全てのイメージを破壊していく…そして滅びが始まる。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
歌声、響く

次回をお楽しみに。

## 歌声、響く（前書き）

今度のは相當に自分の文才の無むのオノパレードでした。一曲ほど  
実際にある曲を引用しています。

レーの説明は…またいづれ。

## 歌声、響く

「品評会?」

俺がそう尋ねると彼女は答えた。

「そう言つてお披露目があるの。」

「ぐだらねえ。」

同感だ才人。だが状況が状況だ。

「……で、ルイズは俺達に何をしてほしい? 明日なんだろ? だつたら早く準備する必要がある。」

彼女は俯いて唸つたままだ。才人に話を振つてみた。

「才人は何かあるか?」

「……そうだ! 最新的得意技があるぞ! —!」

これはラッキー! ……そう思えたのは彼の答えを聞くまでだった。

「パンツ洗い! —!」

「はい?」

「……はあ?」

「だからルイズのパンツ洗いの実演つてのは？」

才人はその妄想で実際にやる事を見せた。あまりの気持ち悪さに吐き気を覚えた…てかやるなよくそやうつ…。

パチン!!

ルイズが鞭を持った。……俺は知らん！才人慌てふためいて壁の方に逃げデルフリンガーを倒した。

「嘘！嘘だつて！」

「…！ そうだわ、才人あんた剣を使えるのよね？剣技を披露するつてのは？」

「どうだろ…？」

「止めとけ。才人、一昨日の『剣なんてあの時初めて持つた…』これは事実か？」

「ああ。」

「なら剣の型を知らないお前じや変な動きになるだろつ。舞踏も無理だ。」

落胆したルイズは立ち上がり言い残した。

「悪いけど一人で考えといてね。」と。

「…何か優しいなルイズ。」

「元々優しいよ。ただあいつは周囲の態度と意地つ張りな性格のせいでシンシンしてるのさ、きっと。さて…………どうしようか。」

「何も持っていないしな。何かしろって言われてもさ。……なあガルーム、特技とか何か無いか?」

「……分からん。初めての事も普通に……」

「どうした?」

ピアノ……感情を叩きつけるために使ってきたあのピアノで誰かを笑顔に出来るか?空っぽの心に光を点せるか?

「才人、今日中に一人芝居かお笑いネタを用意してきてくれるか?」

「何か思い付いたのか?」

「ああ。どうかからピアノを探してくる。頼むぜ。」

「じゃあ。つと誰もいない所に……この時間は授業のはず。周りに気を払い深呼吸……。

「禁術100の4—コントルドア—!」

田の前が歪む。黒い歪みは扉に変わった。5日ぶりだな……牙城に帰るのは。

「……静かだな。」

「当たり前だ。何時だと思つてるんだ?」

レイ・トル。彼がそこにはいた。

「久しぶり。レイ。で、何してんだ?」

「ギルムから頼まれてな。」

パソコンの画面に映つたのは一人の女性。片や切れ目のピンク色の髪。もう一人はおつとりした雰囲気を出す金髪の女性。

「……」

「さあな……後一分で解析が終わる。」

それだけ聞くと部屋の端にあるピアノの方へ向かつた。それを一時的に圧縮し左手で握る。同時に彼は叫ぶ。

「解析完了!…………って何コレ?」

「どうした?」

「……」

「……魔力生命体だわ。いや、ビックリビックリ。けどあと

まあいな。」

「うなるとレイは自分の世界に入つてしまふて戻つて来ない。諦めて立ち去りうと黒い扉に右手をかけた。

「…ガルーム。ひょっとしたらお前を呼び出すかもしけねえ。『闇の書』って言うイカれたアイテムがあつてな。ギルムはその事件の收拾に当たるはずなんだ。」

ふざけた時に発するやけに高い声じゃ無い。低く…レイが出せる限界まで低くしていた。

「ギルム フォロ  
餓鬼の尻拭いか?」

「いや最後の刃だ。」

それだけ言葉を交わすと再び闇の扉を歩き去つていった。

「（水と風の魔素を感じる……空気を振動を封じる……流れを止め音を滅ぼせ……解き放て……）」

封じた視界を再起動させ、ピアノの前で叫び。

「禁術84の1、14の1！サイレントエアー！」

沈黙の大気が広がり透明な壁が出来た。椅子を引いてそこに座り、カバーを開いてピアノを叩いた。耳障りな音が響く。誰もが『へたくそ』と言つような、そんな稚拙すぎる伴奏。歌もない。

形もない。何にもない。ただ新しい曲が思いつけばと、ただひたすら叩きまくつた。

「聞かせてやるよ……」

誰に言う気も無かった。気がつけば声が出ていた。音を合わせ、俺は叩いた。弾くのではない。叩くのだ。音はまだ雑音でしかない……

「……いよおつ……」

歌舞伎のまね事と一人芝居。ルイズのを顔を見る限り好評ではなさそうだが……

「ちょっとーその何処が白面の剣技なの？」

「これ、俺の世界の『歌舞伎』って言つ演劇なんだけどさ面白くな

い？」

「……真面目にやってるから多めに見るわ……」

顔をぷいっと横にする可憐な少女。だがルイズでこいつ、なのだ。これでウケるとは思えない。どうする？俺はこの手の類は得意どころか余り知らない分野だからな……その時気配を感じた。この学院にいない者の気配。

「才人、三歩下がれ。ルイズ、そこを動くな。」

鞠つきの剣を持ち待つ。

カツン

まだ早い。まだ階段だ。

カツン

まだ……こいつは誰だ？

カツン

…この階で…こっちに来る。

カツン

今、キュルケの部屋の前辺り…

カツン

隣の部屋……

カツン

止まつた！背の高さは才人より低い……だがルイズより数センチ高いな。

「ンンン……

落ち着け、ターゲットに敵意はなさそうだ。魔力を解放も溜めてもいいない。ならルイズの知り合い？俺は勢いよく扉を開き鞘を首元に近づけた。

「誰だ？」

「ここは……ルイズ・フランサワーズの部屋ですよね？」

女……？

「いかにも。我が主ルイズに何のようだ？」

彼女はフードを取り去ると後ろからルイズが言った。

「ガルーム！早く中に入れて扉を閉めなさい……！」

無言で従つた。世界が固まる。動き出したのは侵入者の方。ルイズ

も彼女に近寄る。侵入者はルイズを抱きしめた。

「久しぶりね、ルイズ・フランサワーズ。」

「お久しぶりですわ。姫様。」

姫……？

「才人、彼女は？」

「あれ、ガルーム知らないのか？今日、学院に来たトリステインの王女、アンリエッタ姫様なんだって。」

彼女は自分がしていた事に気づき離れた。やはり彼女は貴族。王には絶対服従。たとえ、親友でもこうなるのか…。

「申し訳ありません！姫様！！」笑顔から一転少し眉毛を下げ悲しげに彼女を見た。

「そのような行儀は止めて。ルイズ。私達はお友達じゃないの。」

ルイズはその言葉に笑顔で言った。

「もったいなお言葉でございます。姫様。」

俺達はルイズの後ろに行き、才人が聞いた。

「あの～どんな知り合いなの？」

「姫様が御幼少のみさり砌御遊び相手を務めさせていただいたのよ。」

懐かしそうにそつと言う彼女。

「幼なじみと言つてちょつだい。……ルイズ……ずっと会いたかった……。」

感涙し、そつと優雅に涙を拭く。彼女らの邪魔をしてはいけないな。

「……主、少し席を外す。」

「そう?」

「ええ。ではゆっくり楽しんでください。人払いが防音の魔法はりますか?」

彼女は横に首を振る。才人は自分から窓の鍵を閉めに行つたが。

「ではアンリエッタ姫、また明日。」

踵きびすを返しその場を立ち去つた。

中央塔の頂上。瓦の上に腰を下ろした。吹き抜ける風は冷たく頬を撫でてた。

「……」

「誰かいるのかのう?」

「オールドオスマン。」

「おお、ガルームじやつたか。して何をしておる?」

彼は窓を開けひづりを見ていた。

「いえただ用を。入ってよろしくですか?」

「晩酌の相手を探してたんじや。調度良いわい。」

俺は瓦に手をかけ部屋に飛び込む。学院長はワインをだして座っていた。

「平民がいただいてよろしいんですか?」

「わしは気にはせん。それにレン先生やシュブルーズ先生やコルベル先生と仲良くしてゐるそつじやないか。」

知つてたんかい。この爺さん底が見えない。そつと注がれた赤ワイン。彼は風味と香りを楽しみながら飲み干していく。無言で足してくれる。

「…さて、そろそろ話してもらえるかの?お主の正体と目的を。」

いづれ話すつもりだった。ゆつくつと俺は言葉を紡いだ。

「…私はこの世界の星々を越えたさらばに向ひつゝ側、我々が『星の海』と呼んでいる世界と世界を区切る大海の中にある、一つの世界から来た。」

右手で指をパチンと鳴らし幻術を開ける。

今天を越え宇宙を映した。時間と共に後ろに様々な星が集まつた。そして大きな膜に覆われたこの世界…リアルマジック地方がその全貌を見せた。

「ふむ…」

「名は『魔界』。かつて神に罪を着せられ落とされていった天使達の世界。」

様々な世界を潜り赤い空に覆われた世界が映つた。

「俺の目的は人々の負の闇が産む魔物、ダークネス。」

星の海は消え、机の上にその場で歩く蟻のような黒い影…騎士甲冑を纏つた闇人形。

「こやつらが…」

左手を弾いて幻を消した。

「そして…俺は化け物。かつて人の手によつて創造され…殺されるはずが世界の意思が俺と関係なく俺に生きる事を強いた事から歪みは始まる。」

彼はワインを自由に飲みながら話を聞いている。

「俺は人間として作られたはずだった。

だが戯れに作られた命の元は全ての生命。ありとあらゆる生命の長所のみを追求し全てを模倣し超越し、完成させられたのは融

合超生命体。

だがまだ終わらない。闇の中に逃げ出した俺は今度は…いや、俺が完成する前から世界は俺をずっと狙っていたんだろう。ともかく世界の意思と復讐者は俺を利用しようと画策した。」

彼は急に俺に質問をさせるように手を前にだした。額き質問内容を問う。

「お主の言ひ、世界の意思、イレギュラーについて聞きたいのじゃが。」

「世界の意思とは多く存在する世界に宿る意思そのもの。人間と同じで様々な性格があるが、本質的には皆傲慢でずる賢く全て自分の思い通りにならなければ気が済まない。最悪、自らの持つ『修正力』によって世界を（思い通りに）修正する。

そして復讐者とは世界の意思によって消され（かけ）たある世界の意思なんだ。守っていたのは人間がまだ存在しなかつた時代。世界は混沌の中についた。唯一創成の神々はいたが他の世界は……そこで生まれたばかりの世界の意思是存在しない世界を確立させた。それは異次元。奴はその守護者だつたんだ。永い時が過ぎ、異次元が不要になつた時、意思是奴を異次元に閉じ込め異次元の範囲をごく僅かに減らした。皮肉な事に半径5mの球の中何も無い異次元に永い時混沌から世界を守りつけた異次元は調和故に滅んだ。」

「…………。」

「…故に奴は世界を憎んだ。同時に世界の意思是修正力によって思い通りに歪めた世界がつまらないと感じはじめた。」

「何故？」

「もし…ある一日が永遠にループし自分だけがその事実を知つたらどうします？」  
修正力で無理矢理流れを変えた事でそれ以上の進歩が無くなつたんですね。修正のしそぎでね。意思達は協議し答えを探した。そして…

深く息をつく。

「見つけた。」

知らぬ間に俺は血が出るほど手をにぎりしめ口を閉じた。ダークネス戦の合間、一つのカケラに尋問して知つた真実。

パリーン！――！

「…世界をもう一度最初に戻し…世界全体で始まるDEATH・GAME。

世界の勇者達と最悪の魔達を戦わせる物語に修正させた。悪は人の負の感情そのもの。たつた一つ、世界を憎み壊したいと望む。放つとけば大量の血と命を対価に世界が滅ぶ。

だが正義は多すぎて、正義同士が潰しあう…そこに光を入れた。

ふと手を見るとワインは手にかかり血のようだつた。

「それが俺だ。修正力の影響を受けない五人の騎士、彼らとの戦いに放り込んだんだ。ありとあらゆる…力を持つて。」

その場で反り返り天井を見る。真っ白な天井。右手を伸ばす。血が垂れた。

「悪い、湿っぽくなつちまつたな。」

「…………」

「オールドオスマン?」

いつの間にかワインは空になつてゐる。朝田が差し込んでいた……つて事はずつと喋っていたのか、俺?

「あの……オールドオスマン?」

「N N N N N……」

いつしか眠つていたらしい……今日は訓練は無しだ。立ち去りつとすると彼は目を覚ました。

立ち上がつた音で目を覚ましたらしい。じゃあ何でグラスを割つてしまつた音に気が付かなかつたんだ?

「ふわあっ……スマン寝てしまつた。で……なんじやつたかの?」

爺さん……。震える腕を隠し言つた。

「今、明日の出し物の相談内容を語おうと。」

「おお、やうじやつた!で……なんじやつたかの?」

……いいわ。ピアノ弾く予定だつたけど変更。

「少々危険な特技と演技を……ね。」

完全に目を覚ました彼は目を細める。ルイズの虚無の魔法について話し合っていた時と同じ目だ。

俺は掌を割れたガラスに向けた。割れたガラスはひとりでに歩き重なり……黒く光るとそこには「者を焼き、食らう」の大なナニカが青い目をこぢらに向けた。

「……」の時間なら皆起きているだらう。

昨日から放つておいたピアノ。蓋をゆっくり開け一曲奏ではじめた。

まず弾くのは何ともギネス級の不幸を抱えた青年。奴と最初の相棒との「デュエット曲。

「響かせよう良太郎、モモタロス。お前達の歌を。」

ふう…と深呼吸し荒々しくピアノの高音を響かせせる。  
それは赤い鬼（と言うと怒るが…）の短気さを。  
直ぐに流れる水の如く優しくピアノに触れる。優しさ…それは良太郎が持つていた強い心。

「こぼれ落ちる砂のように 誰も時間止められない  
その定め 侵す者 僕が 僕が 消してみせる 必ず  
テンポが早いこの曲は正直ピアノじゃあつこ。もつとゆつたりと

した曲にしようと思えば多分出来るが……それじゃ歌詞の間隔がおかしくなる! もうBパートだ。

「自分の中誰かが 騒ぎだそうとしている  
俺の時間を持つてる 制御出来ない衝動」

元々テコヒット…ソロじゃ声の高さに限界があるな。

「Right now! 目を背けたら… 歴史が崩れてく  
風さえも叫んでいる 目覚めよ熱く  
誰も知らない時空 駆け抜けてゆく光  
Get Ready (お前が) Time to change (  
決める)

」の世界の行方を「

さあ、氣合い、いれていかないとな。さあ、サビだ!

「2つの声重なる時 誰よりも強くなれる  
動き出そつぜDouble-action! 今と 未来 1つに  
なる瞬間……」

後はキーの操作に集中して……。終わった……。訓練並に疲れるな  
これ。

『当たり前だ。異なる動作を同時に行つ能力はな……』

「分かつてら。」

再び深呼吸。……視線? 何処から?  
辺りをみると使い魔だ。使い魔の群れだ。それと……降りて来るド

「おはよハジヤルコモス。タバサさん。」

「…今の…」

「…はい？」

「…何か聞かせて。」

そつと吹く風。更に加わる乱入者あり。

「おはよハジヤルコモスー！」

「シエスタか。これからコンサートを開く。良ければ聞いていくといい。」

「楽器の演奏ですか？」

他の使い魔達は犬のよつとおすわりをしている。

「楽器だけじゃないが…今から歌うのは我が友の一人が作った歌。かの者は最愛の人を失いかけた。その時に歌った歌。ここに伝われ、今こそ届け。貴方に送る『1000の言葉』。」

朝に響く物悲しいメロディー。窓から外を見たり下に行くと自分達の使い魔達が黒い楽器を演奏しながら歌っている男の近くにいた。

「嘘も全部……覆い隠していく……するこよね……」

その男はこの前の戦いで徹底的な恐怖を生徒達に植え付けていた。だから最初は近づかなかつた。だが楽器の音色は澄んでいて、彼の歌声も澄んでいた。ただ歌つていた。そこに悪魔はいなかつたのだ。

「帰つてくるから、追い越していく、君の声…  
意地はつて 強いフリ 時を戻して 叫べばよかつた?  
行かないでと涙、零したら?」

伴奏と歌を組み合わせ、 その思いを感じ、 通り過ぎた願いを再現する。

少し離れた所ではマルトーを含む給仕達が、 ある一室からは姫君が、 レンを中心とする先生達ですら彼の音楽を聴いていた。

「今は出来る…どんな事も……」

そこで奇跡が起つる。

彼を中心に芝生に草花が生えていく。更に見たことの無いピンク色の花びらが空から散る。  
タバサがそれを見て一言。

「雪みたい。」

と呟いた。

「聞こえてる? 1000の言葉を  
見えない 君の背中に送るよ 翼に変えて…  
聞こえてる? 1000の言葉は 疲れた君の背中に寄り添い 抱き

しめる……」

その花びらを見て涙する男一人。

花びらと同じ髪色の少女はその涙に何も言わない。 シュールだけ  
ど幻想的すぎたそこはまさしく魔法の世界だった。

「言え無かつた1000の言葉を ラララ 君の背中に送るよ 翼  
に変えて  
聞こえてる? 1000の言葉は ラララ 君の背中に寄り添い……  
ラララ～」

静かにその曲は終わった。

歓声が上がる。二つ程魔法を使つてしまつたが…まあ禁術35の1  
フラー・シャワーと禁術63の2リビングガーデンなら実害は無い  
し問題無いだろ?。さあ今日は品評会だ。

**歌声、響く（後書き）**

試すものは傲慢さ。人の欲の深さが別れと決意を呼ぶ。

次回　ツインシンフォニー　リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
ゴーレム  
悪の土人形

次回をお楽しみに

## 悪の土人形（ゴーレム）（前書き）

うううだぜ！今回間を開けすぎたかもしれないな…。亀更新でごめんなさい。

## 悪の土人形（ゴーレム）

「ただ今より今年度の使い魔お披露目を執り行います！！」

貴族達の歎声が誰もいない廊下に響く。反響は壁を伝い小さくなりながら塔へ。

そこにダレカがいた。フードで顔を隠し地獄に下るようゆっくり、ゆっくりと降りていった。

使い魔…それは主の目、耳、鼻となり主に従うただの奴隸。

ならば俺の隣にいるこの青年は何だ？ 既に主から犬扱いされ鞭で打たれても主に人間として接するこいつは何だ？ …俺？ 俺は力で主の信頼を勝ち取つただけ。

化け物…悪魔…魔物…人外…畜生…破滅の守護者…世界殺し…  
俺に与えられたのは力…最初は弱かつた。こんな称号は無かつた。いつの間にかついた多くの称号（殺しの証）。

才人は強い。まだ幼い。だけど強い。使い魔としてではない。

「いいこと、決して恥をかくような事はしないでね。」

ルイズはそう言っていた。サイトは思いつきり反論する。

「なんだよーあんなに考えさせとこー。」

売り言葉に、 買い言葉…。 嘆息するよ…。

「いいのよーあんたたちの事姫様にばれりやつたんだからーー。」

今は一つの思いを持っているが彼は彼女だけを見ている。唯一  
ルイズ  
彼だけが…。

「続きまして、 ミス、 ルイズ、 デラ、 ヴァリエール。」

思考回路にルイズとオ人の喧嘩はシャットアウトしていたが、  
ゴルベルの言葉だけはしつかり入ってきた。 全く空氣読めよ…。  
そう言いたい気分だ。

121

まあ…見てやるよ… の、 絶対に  
敵…そんなの

に大切な者を奪わた時の顔と、 どうするかを…

「行くわよ。」

「OK、 Master。」

「へーい。」

壇上に立つ俺達。 今はいい。 はやし声が聞こえる度にそいつ  
を睨みつけていたが。

「わたくしの使い魔、ヒラガ、サイトとガルーム・ザ・レジエンドです。種族は…平民です！」

彼女は目を必死に閉じ恥辱に震えた。  
見渡す限りの馬鹿笑い。

(笑) (笑) (笑) (笑) (笑) (笑)  
(笑) (笑) (笑) (笑) (笑) (笑)

「（ムカつく……！）」

「うつせえ！黙つてみてろ！」

剣の封<sup>ルイズ</sup>が解かれた。俺と同じように前を睨む。何だ…こいつ  
だって主のために怒るんじやん。…主を馬鹿にされる…自分を馬  
鹿にされたと同じ……か。そつと彼の前に手を出し制止した。

「待ちな。俺達の主を馬鹿にした事はこの場で謝罪してもらひうからよ。剣を振る対象も無いのに…抜くなよ。」

よくよく見れば最初から笑つてない奴がぽつぽつといた。一番最前列にいる四人はただじつとこっちを見ていた。

さあ…オレ魔流の感謝と行こうか……！　俺は田を開じた。

「（…煉獄にいる惨殺者よ。　もつとも弱い竜を…。）」

瞼の向こう。火の海から顔を上げ、溺れる罪人を食している。悲鳴が聞こえた。一匹…こっちをみた。こいつでいいな。

「（少し遠いが…禁術、11の3、オールマグネット…逃がしはしない。　禁術：100の2、ゲート、オープン…。）」

異次元の扉は開かれ見た竜はこっちを見る。黒い闇に徐々に近づく。けど嫌がるその竜は体を震わし岩に爪を立てマグマの中にいる岩石に尾を這おわせ、必死になつて拒絶する。

だがその努力もむなしく竜は頭からその闇に突っ込んでいった。

「（禁術、100の3…！　クローズゲート…！…）」

そして何事もなかつたかのように煉獄から黒い闇は消えた。竜はこの世界へ…俺の人形として…。目を開き大げさに原っぱを指差した。

「使い魔は主の力を測るのにも用いられるらしい…ならば俺の隠匿していた力をお見せしよう。すでに一人に見られてしまったが…。

ちらつと生徒を… 青髪の少女を一瞥し、 指した所からは闇があふれだし草原を焦がす。

闇の門は開きそこから火柱が昇つた。 その中に質量をもつナニカが現れる。 そしてそれは炎を払うと同時に空を舞つた。 黒い仮面のようなものをつけ山羊のような角を生やした体の太さは人間3人分、 今は蛇のようで手とか足とかはない。 それが甲高く吠えた。

キヤアアアアアツ！…！…！…！

「あれは灼熱穴居竜、ヴァ バジア…！」

ゲームの知識をここで展開するんじゃない！ それに違う！

「違う。 煉獄火炎竜メガラウス。 煉獄の炎の中で生き続ける邪竜だ。

奴はここに来る時に既に死んでいる。 だが今は俺の人形。 メガラウスは大気を泳ぎ生徒達をじろじろと睨む。 その瞳は濁りただ虚ろな眼は王女に向き首を伸ばした。

「姫様をお守りしろ！」

「化け物め！ 来るなら来い！…！」

護衛の騎士達がいるのにも関わらず竜は首を伸ばす。

「違う！尻尾だ！！」

誰かが叫ぶ。檻のよつた形になつた尾がアンリエッタを包む。大地」と彼女をえぐり取る。

「「姫様～～～！」」

竜は再び召喚された所へ移動し騎士達は俺を取り囲む。

「貴様！姫様を解放しろ！！！」

「それはできない。奴は俺の支配下にはもついない。取り返しあかつたから自力で取り返しな。」

壇上に上がるオールド・オスマン。

「今朝言つていたのはこのことか？」

「その通り…始めようか。貴族の戦いとやらをね…。」

跳躍し降り立つのはメガラウスの頭。高らかに宣言する。

「この竜は罪人を食らい尽くす煉獄の邪竜！ 囚われ人は一国の姫。ならば貴様らの出番だろ？ 未来を作る子供たちよ。この竜は俺からのプレゼントだ。破滅の竜…討てるものなら討つてみろ！ ！ その胸に志あるものだけ…前に出な！！ まあ、才人は強制な。」

「いつ…？」

「そうよー。姫様を助けてきなさいー」というより、アンタはアンタでなににやつてゐるのよーーー！」

ノリツシ「ミミがいいね、ルイズ。だが、今はお前だけにかまつている暇はない。

「なに、貴族の驕りが力に匹敵せぬことを証明したいだけさ、俺はな。まあ安心しろこいつが死ねば、アンリエッタ姫は確實に開放する。それまで傷一つドレスの汚れ一つ付けないから安心しろ。」

頭から飛び降り左手で地面を指し真横に滑らせる。ピンク色のラインが現れた。

「そこからが決闘場の範囲だ。そこで震えながら観戦するもよし。自分の持てる最大の勇気をもって挑むもよし。……ほう。お前だけは傍観していると思つたのだがね。」

どよめきが走る。なぜならあれだけの醜態をさらしたはずの男が田の前にいたからだ。

「昨日の今日で済まないがね。」

「おもしろい…。いいだろ？ギーキュ。ほら、才人も降りてこー。」

「…まあ後ろのやつお前を食おつとしてるんだが…。」

才人の進言に俺は振り返った。確かにぎきりぎきりした歯があつた。

「まあ、ここは範囲内だから仕方ないか。」

できることは攻撃を避けること。たった一步だけバックステップで距離をとり右足を軸に回転して出す回し蹴り。直撃した竜は大きく体制を崩しその顔は大地に触れた。大地は揺れ原っぱはわずかに焦げる。

「さてと…入ってきたい奴は好きにするといい。」

それだけ言って俺は彼らに背を向けた。









「どうぞ、アンリエッタ姫。」

さしだしたのは創造した水の羽衣。これで熱さは今もほととぎ  
感じてないはずだが、これで完璧だ。  
なにしろ我が仲間の一人がこれをまとい溶岩の中を突進み得るべき  
ものを得て帰ってきた…といふいわくつきの逸品だ。死んだ炎竜  
の炎など、空氣の「」とく熱さを無に帰すだらう。

「何故こんなことを?」

睨んでいるようだが、可愛いもんだな。怖くもなんともない。

「理由はさつと書いた通り…そしてきっかけは……」

思ったから

そう……きっかけは……俺がこの地を去るついで

「…？」

「本来、俺には目的があった。

それはある敵の存在をこの世界から追放し世界の住民であるお前たちに危機を伝えることが俺の使命だった。だがこの世界に俺が違うべき敵はいなかつた。ならば他の世界に行き警戒を伝える責務が俺にある。

だがな…アンリエッタ、俺はこの世界でルイズを守ると、使い魔の契約をしたんだ。だったら最後に俺がやつらにしてやることは最初の実戦をさせてやること。戦いの愚かさを知つてほしかったんだ。

才人が竜に突貫し、急に現れた手によつてあしらわれる。ギ  
ーシュが青銅のゴーレム人形ワルキューを召喚し突撃させるも才人と同じくあしらわれた。

「何かありましたら…これを。」

手渡したのは小さな鳥。

「んん~急に起こして何~?」

「これは?」

「我が体内に潜む魔物の一部…名をクラッシャーバード。破壊を導く死の鳥だが、いわゆる体は大人、頭は子供っていうあほの鳥ですから安心してください。」

「ちょっと…!それヒドイ…!」

ピョコピョコ跳ねるが何も問題ない。

「知ったことか。」

彼らにも背を向け再び壇上へと帰還する。ずいぶんとお粗末な戦い方だ。才人の剣はすべて空振り。ギーシュのアースハンドもワールキューの突貫も炎の中に消えゆくばかり。

メガラウスはただ忌々しげに、めんどくさそうに手を振る。それがずっと続いていた。

だが彼らの強さだけは証明されていた。しひれを切らし突進していくつたやつらはすべて全滅。俺と戦った連中なんかがあちこちで倒れていた。

「デル・ワインデ。」

青髪の少女が呪文を唱える。杖に魔力が集い、風が渦を巻く。

「ワール・カーノ…ファイヤー・ボール…！」

刃は白い形をとつて飛び出し、キュルケが放つた炎の玉は何発

も飛びかう。が、体に当たってかき消える。竜は手を伸ばし全員をはたこつとする。

「モンテンセイショーン……」

水流をたたきつけたも、再び蒸発した。水はさすがに嫌だつたらしい手をひっこめた。これを機にモンモランシーは水鉄砲を乱射する。得意げになつているが顔色は悪くなつっていく。この世界での魔法使用は、精神力をかなり消費するらしい……。それで竜が死に至ることはなさそうだ。

「ダメね、全然効かないじゃない！」

攻撃をやめれば、反撃の応酬が彼らを襲つ。

「弱点を撃つしかないわ。」

そんな中で飛び交う声は不安と恐怖に沈みかけていた。キュルケもモンモランシーの発言に対し強気な言葉を発するが……実質は彼女も怖くて怖くてしょうがない。ほほつむこっている。

「そんなのどこにあるんだよ……」

才人がそう叫ぶ。確かに今のこいつらじや、難解攻略の不落の城。そう感じるかもな。

「田。」

まつ……あの子戦闘慣れしているな。そうでなければ貴族が目をねりうなどあり得ない。

「…ギーシュ、手を貸してくれ。」

「嫌だね。 ワルキユーレ！行け！！」

ギーシュはワルキユーレを放ち全員が双眼を狙つた。騎士人形が槍を構え突進する。メガラウスは口を開き噛みつきに行く。あつさりとすべて食われた。そして大きく口を開け息を吸うと巨大な熱戦を吐き出した。全員ただ逃げるしかなかつた。その結果焼き尽くされた大地は黒く焦げる。あの一撃、直撃したら死ぬな。

「ああああああー！？」

「勝てるわけないじゃない」こんな化け物！」

「戦略的撤退。」

ついにギーシュが尻もちをついてキュルケはいまだダメージを受け付けない邪竜に弱音を吐いた。タバサはそつと逃げ出そうとし結界にぶつかってそれを破壊しようとする。そんな中桃色の神が竜の端で揺れた。

「何やつてんだ！？」

ルイズの目の前にはアンリエッタがいた。

「姫様！今お助けします！！」

「ルイズ！？」

なにも唱えずにただ杖を振った。 いつの間にか届いた手だつたが  
彼女が檻の尾を破壊しようとして起こした爆発は竜に悲鳴を上げさせた。

キヤアアアアアアアツ！……！

結界外まで届いた声に残っていた生徒たちは耳をふさぐ。 見ればレン達が負傷した生徒を介抱していた。 他の先生や護衛の騎士たちもそつちに回っていて戦闘をよく見ていなかつた。だから一人の死が近づいていることに俺と数名以外気付いていなかつた。 竜の青い目がギロリと光り先ほどよりも長く息を吸つていた。

「あああ…」

竜の放つ殺氣に誰も動けなかつた。

「ルイズ……………」

一人を除いて。

走つた。

竜の口が閉じる。

走る。

彼女を抱きしめ跳ぶ。

開く。煉獄の竜の今の本氣の炎が辺りを包んだ。

「ダーリン！？」

「無事！？ルイズ！？」

まだ共闘しようという考えに至らないのか…あいつらは。いや  
まずルイズの魔法を生かすべきか。それとも…やつらを鼓舞する  
のが先か。逃げ出せない以上戦うしかない。俺は圧縮したピア  
ノをその場に置き、ある音楽を奏てる。メガラウスがこっちを向  
いた。よし…この音楽に歌はない。ただ味方を鼓舞し敵に送る  
死のメロディだった。そう、『不死身の敵に挑む』無謀ながらに  
それをやって抜けた者たちの応援歌。

「これって…。」「

「才人は聞きおぼえがあるかもしれないな。これはある王が息子に送った勇気の歌。不死の化け物すらも倒す勇気を与える歌だ。だが、たつた一人の勇者が魔王一人と戦つて勝ったためしはないがな。」

「これだけヒントだしたんだ。ちゃんとその死竜を殺してくれよ。じゃねえと俺の首をあぶねえしな。首が危ないといえば…この後の発言で、オールド・オスマンにどれほどの雷を落とされるかな…。」

「ルイズ！ 貴方の魔法はすでに私が見せたあの魔法だ！！ 思い出せ！ その呪文を！ それは破壊をもたらし誰かを救う…！」

思い出せ！その呪文を！それは破壊をもたらし誰かを救う…！

彼との付き合いは短い。 だけど… 彼がサイトの次に私を見てくれた。 彼がいろいろと支えてくれた。 私の中で思い出すのは二つの太陽。 爆発とともにほんのわずかな時間に現れた太陽。 それが答え… でもなんて言っていたんだっけ？

「ルイズ！前…！」

魔法が使えず周りから蔑まれていた貴女…どれほど苦しかったかはかりかねます

「才人皆のところに連れて行って！姫様！！必ず助けてます！もう少しをお待ちください…！」

サイトはもうなりふりかまわずただ私を連れて走った。その後ろを爪をとがらせ地面にクレータを作る悪魔が迫る。

「デル公…どうにかなんねえのかよ…！」

『一』じや韻竜に相当するがこいつはもう死んでいる。体内のエネルギーで動かしているだけならもう一回倒せば本当に倒れるはずだ。

「力が集まっている場所を破壊すればいいの？」

力チカチと鳴らしてあの剣は笑った。

『ああ…そうだぜ、嬢ちゃん。』

だが貴女はその中で必死になつた 優しい心を持つた だから  
教えます 貴女は魔法使いだ

「（そつよー）の先に確か……！」

彼がピアノをたたくたびに気分が高揚する…そんな感じの歌が当たりに響く。 無理とか言つてたゼルプスト…キュルケも。 戦いに勝つには逃げるしかないと考えどうやつてこの結界から出るか考えていたタバサも。 へっぴり腰になつてたギーシュも。 その隣でただがむしやらに水をぶつけていたモンモランシーも。

私を抱えて…抱えて！？どうしてこんなことに気付かなかつたのかしら！？何で私の使い魔が私を……お、お、お姫様だっこしてるので！？！？！？！？

「離しなさい！…サイト！…！」

「おっ、おっ…！」

皆のところに着いたからか、 私を下ろしサイトは迫つていった巨大な手に立ち向かい、 切り下ろした。 サイトのルーンはあの時と同じように輝いていた。

エ・プ・リ・ン

「サイトー僕のアースハンドに乗れー！」

「じゃあ、私とモンモランシーはあの竜をひきつけてましょー。」

「共闘、じゃないと倒せない。」

「それしか手はないもんね。」

誰か共闘のために互いを見合せても、  
このままでは…。今はあいつの言葉を思い出しがち…。

クスプロージョ！

私だつて、姫様を助けたい！ 皆の力になりたい！！  
口のルイズじやないんだから――――――――――――

エクスプロージョンー！

ほう…ルイズの目が変わった。どうやら、たどりついたようだな…。不完全な自分の魔法に。メガラウスも6人に目を向け、再び吠える。そして全エネルギーをその口内にため込む。

「キュルケ！」

モンモランシーの掛け声とともに正確に首元を狙つた火と水の放射が始まる。

「タバサ！！」

彼女ができるだけの氷の嵐を腕の付け根に叩き込む。同時に凍つていく腕。あれは火が通つてないからな。よくタバサも気がついたな。メガラウスは一人の魔法に押され、腕を封じられ動きをなくしていた。

「…エクス、プロージョン！…！」

そしてルイズの爆発。空中で突如発生した爆発は、炎竜の頭で発生した。バキリと低い音を立てて、ルイズの隣に黒い角が落ちた。化け物はただ痛みから叫び声を上げる。

アアアアアアアツツツ

そして一人の戦士が空を舞う。

一人はギーシュのアースハンドにより空を飛んだ才人。

もう一人はワルキューレだ。

デルフリングガーを下向きにして右目を突き刺し、ワルキューレもその槍を巧み操り左目を抉つた。

ギュウウウウツツ！…！…！

天に向かつて炎を吐き出し…全ての炎を吐き出すと体の炎が消え、枯れ木のように萎んで…萎んで…破裂した。

「（よくやった…上出来だ。）」

俺は結界を解き、姫君を包んでいたバリアを滅した。

「これで分かつたはずだ。 戰いに重要なのは力だ。 それは魔力だけではない。 絆… すらも力となりえると。 特にギーシュ。 お前にも可能性がある。 これから…自分で自分の魔法を強くすることも考える。 今回の成功でうねぼれるな。 いいな?」

ギーシュはただ頷いた。

「モンモランシー、ギーシュを頼む。 そいつ、どう考へても誰かが支えてやらなきゃダメだ。 最初はそうだな… 浮氣癖をなくす方法を考えるのが一手だろ?」

そういうと彼女は真面目な顔で頷いた。 この前の決闘だってこのいつの浮氣によるのが直接の原因なのだからな。 それだけは俺でも言えるやつの欠点だ。

「キユルケ… 皆を任せせる。 おまえみたいな姉さんキャラが引っ張つてくのがちょうどいい気がするんだ。 家柄のことと「気にしないわ。」…なら頼んでも構わないだろ?」

「良いくけど… 急にじうしたのよ。 まるでどつかにいくつうな… 遺言じやない。」

…………… 当てぬなよ…。 今度はタバサのほうを向く。

「…な?」

「今夜お前とはゆつくり話したいな、タバサ。」

耳元に近づき言つ。

「悩みがあるなら……どんな願いでも……叶えてやるよ。」

明らかに彼女は動搖した。

「お前にわざわざ知つていることを再度教えてしまったからな。時間の無駄をお詫びしたいだけさ。レン・ハブリエドに詳細は伝えておくから、安心して悩みを解消するといい。」

バキッ！――

額に埋まっていた宝石を素手で触ると、残っていた竜の体がが消滅した。

「アンリ・ヒッタ姫！」

それを彼女に放つた。俺がしたのはそれだけ。何も言わずクラッショバードが帰ってきた。

「主、才人。」

そして彼らの前でひざまづく。

「今夜……話をしたい。俺が帰るまで寝ないで待つていてほしい。」

「……あとでひやんと説明してもらいつから。」

主に鞭でかな……。

「ああ。」

先生方が近づいてくる…同時に響く地響き。違う…これは何かが崩れる音…そう壁が何かが…。気づいたら走っていた。気づいたら飛び出していた。

「外が静かになつた。」

覚えているだろうか。ただ一人、学園の奥に消えていった人物がいたことを。彼、いや彼女はその巨大な扉を前にして解除しようとしていたが…失敗したのだ。

「もう時間がない。」

そこで彼女は飛び降りる。そとに出た彼女は地面に触れ魔力を込めた。大地が振動し30mはあろうか巨大な土人形を呼び出したのだつた。

「…！あれは…。」

そこで彼女はあるものを見つけた。

## 悪の土人形（ゴーレム）（後書き）

得たものは何か 奪つたものは何か 去るべきものにそれを知る価値はない。 最後に『えるはかの守護者に 今白銀の刃が解き放たれる

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
使い魔として…

次回をお楽しみに。

## 使い魔として…（前書き）

「ううん、地の分が書けない！ダメダメだね。感想とこうした文句  
くれる方募集します…。ほんと読んでくれる方に感謝です。

使い魔として…

「 ハリ…？」

小さいが確かに壁にはヒビがあった。

「…行け！ゴーレム…！」

巨人は手を引き重心を移動して、前方の塔にその拳を叩き込んだ。 女は笑う。

各下バカの者が格上の物を壊したとき、格上を信じて何もしなかつた貴族はどんな顔をするだろう。アホ面さらしたその顔を見たらどうなに気分がいいだろ？

世界が揺れた。

「もう一度だ！行け…！」

再び叩き込まれる土の拳。

揺れる世界。そこに乱入者が現れた。

「…盜賊か。」

黒光りする鞘を取り出す。そして走り出した。

「おおおおおつーー！」

狙うは足！振り下ろした。土の人形はあまりに脆く鉄の鞘に土が付着する。片方の足を失いバランスを崩し…再生したか…。以外と厄介だな。暗くなるのは敵の拳が下していく証。真後ろに跳ぶ。着地して目指すのは…こいつを操る術師！！腕を走る。乗ったのは左腕。上下左右が敵のテリトリー。全てを警戒しろ。信じるのは俺だけ。後は何も信じるなーーー！」

「見つけた。」

「当然私も気付いてるけど?」

土の矢が俺を狙う。 泥の破片が鉄になる。 鉄の雨が降り注ぐ。

「マグネ・プロテクト。」

唱えたのは攻撃を一点集中させ、目の前で止める。防げるのは力なきものならコンマ一秒。力あるものなら永遠に。俺はどうちだろう。おそらく後者であり、前者なのだろう。

「カウンター・マグネ。」

止まっていた時が動き出す。全てが術者に帰った。人間ではありえない跳躍をそいつはを見せた。全てが土人形に当たる。主を守つた土人形はその全てを土に返し再生する。それ故に主を守れなかつた。着地地点に降り立つと同時に、俺はその目の前に駆け付けた。

「お前の負けだ。盗賊。」

冷たく低く吐き捨てる。土人形を引き裂いた鞘が彼女の頸動脈すれすれを捉えていた。

「どうかね?」

足場が消えた。彼女が土人形を体の半分を土に還したのだ!!

「冗談を!!」

残った体に鞘を差し込む。そこも砂になる。

「マジかよ…。」

「冗談じゃねえ。俺は今まで多くの人間を殺してきた。多くの生き物を、意志を、全てを壊した悪魔だろ？ なら…力を隠すことには過ち。

こんな…人形相手に負けるなんて間違ってる。一度見せたんだ。二度見せたって変わりはない！！ レンに見せたときと同じよう、俺は悪魔の翼を広げ空に飛翔した。

「何ー？」

「これが俺の本来の姿だ。奪つたものを返却していただこう。ここで去られるとさすがに最強の悪魔の名が折れるのでね。盗賊の本質は一つに一つだが、目を見ないと分からないな…。」

主を守るためにゴーレムが拳を振るう。それを手で受け止めた。

「貴様は消える…人形。」

俺の手が赤く燃える。

「禁術59の3。スネーク・プロミネンス。」

ついに蛇が出た。蛇は人形に食らいつく。何匹も、何十匹も、何百匹も、何千匹も、何万匹も、何億匹も…。

「貴様の人形、確かに破壊した。」

俺の真後ろでは燃え盛る土人形。<sup>ゴーレム</sup>だが一度と動くことはない。まさに体だけ残して中をすべて破壊したのだ。

「私のゴーレムの内部魔力だけ焼き飛<sup>ハグ</sup>したのか！？」

「人殺しは慣れているが、やはり血を見るのはつらくな。」

死刑宣告を出す日の前の盗賊は立ち去るひつしえない。

「悪いが…<sup>チエック</sup>最終通告…。」

鞘が黒く光った。

「ガルーム！！」

聞こえたのは主の声。

「主…？」

緑色の何かが駆け抜けた。

「しまった！！」

彼女は燃える土人形ゴーレムに何か土をぶつけた。そこから生まれたのは鳥。

鳥は羽ばたく。

逃がすか…！

「狙うべきは太陽の一手。禁術2の2、マイクマテリアル。」

敵との距離は約30m。左手に無から創造されたのは流白銀の弓ミスリル。沈む太陽のかなたに逃げだす鳥に狙いを定めその弦を引く。金切り音、断末魔を上げた弦。限界まで引かれた弦に矢は無い。子供がやるような無から有を思う矢。

「禁術76の1魔力誇張エネミーチャージ、禁術59の1、バーニングソウル…全て合わせよ…！！」

大気の魔素を感じ、 合わせ、 組み合わせ、 強くして、 『  
そうぞう』する。 弦を引いたそこにピッチリと伸びた白い矢が生  
まれる。

「初歩ながら、 この一撃太陽からの天罰と思え！フレイムアロー  
！！！」

白い矢が燃えたぎつた。放たれた直後右翼に劇中。それでも飛ぶ。  
すぐに弦を引く、矢が生まれ、燃える。今度は左翼を狙う。  
当たった。でも墜ちない。

「墜ちろ……！」

三矢を放つた。尾が燃えた。 よつやく…墜ちた。

「…逃がした…？」

「残っていたのは土くれだけだったそうよ。」

「土くれのフーケか…笑わせてくれる。 最強の悪魔に喧嘩売ったこと後悔させてやる。」

あの後俺は学院長に説教とは言えないが、 怒られて、 笑って、 お礼を言われた。 生徒の目が変わったといつ。 ただ一人、 ギトーと言つ男は偏屈な男だつた。 あれだけの力を見せられても俺に挑み負けた。

（回想）

「ふざけないでくださいー学院長ー貴族が使い魔の発言を真に受けるとー？」

俺と学院長が説教という談笑をしているとその男は扉を開き入ってきた。

「ギター先生。彼は客観的に貴族の存在を判断しているだけじゃぞ？」

「貴族としての誇りをお持ちでないのですか！？貴方は！？」

「こつ…わかったふりして何もわかつちやいねえ！？」

「誇りと驕りは違う。それすらも分からぬのか？」

ギターは顔を怒りで歪め、俺をにらみつける。

「よからぬ外に出るーー！」

決闘か。また。

「始めようか? 使い魔? 私の一つ名は『疾風』 疾風のギター。」

杖一本で俺に勝つ氣かこいつ? 槍一つで70人をつぶした経験がある。後ろを気にしなければ確かにあの時槍だけで勝っていたはず……いや過去をほじくるのはよくない。  
さて今日はどんなふうに料理するか…。

「ゴビキタス・デル・ワインデ。」

シュイン、シュインと音を立ててギターが増えた……なるほど、分裂の類か。

「一応言つておいた。これは偏在。スクウェアクラスの魔法だ。」

「ではおまえを倒せば俺は学院内最強か?」

「できれば、な!!」

吹きすさぶ、風の流れが異常になつた。大気で渦を巻き、流れる。流れた先にいたら当たる。ならば避ければいい。こっちに来た。だから左に。右に。さて……どうするか。俺の鞘じゃ殺しかねない。

「お前、殺しちゃつてもいいかな?」

「何？」

「出来ぬ事を言つな！」

ほつ…おもしろいな。性格は同じでもそれぞれに独立の意識か…。  
俺を囲んでいるのは見えるのが4体。見えないで距離をとるのが2人。  
いいだろ？ 風がこっちに来る！ かわしてまず一人！

「ファイヤー！ナッコル！…」

炎の拳がひとりを焼き殺す。風が吹いて消える。  
黒い鞘を持つ。剣の柄を握りしめる。真後ろから迫る風をよける。  
これで最強？ 馬鹿にしそぎだろ…。

「何だそれは？剣があるのに鞘をつけたままか？」

そう尋ねる彼は馬鹿にしたかのように俺を見る。 本当の馬鹿はお前だよ！

「ええ。 あなたぐらいこれで十分。」

再び挑発する。嵐のように荒れ狂う大気。

「二人ほど、 もらっていい。」

田を閉じ本体ではなく偏在を確かに捉える。走る。吹きすさぶ風は鞘の一振りに散る。偏在を鉄で貫き、 真横の偏在の首を断ち切る。血は出ることなく消える。

「「」の程度か？見えない本体君？」

そういうと、何体もの偏在が俺を取り囲む。ビリやり偏在をすべて投入したらしい。逃げるのも…飽きたな。

「「「「「「「デル・ウイング。」「」「」「」「」「」

まさに風。だが、互いに相殺しかける寸前だと気づいてないのか？なら…少し本物を見せてやろうか。

「禁術74の4…全て、吹き飛ばせ。アルティメット…トルネード！」

大気が俺を包む。全てが俺の風にのまれる。竜巻と化した全ては手を広げると同時に、反転した。

俺が最初からいなかつたと思えばいい。右のギターが放った魔法は真正面前にいたギターに劇中に消滅。そのギターも自分が消した偏在の攻撃を受け消滅。

「さあ、「」からが本番だ。禁術、55の5、リバイバル・ライフ。」

俺はギターを癒したのだ。目的は一つ。力の差は歴然だがあれほどの偏在を呼び出したギター…相当疲れているはず。なら回復させた後に絶望を見せつけるそれだけだ。

「どうじゅつもりだ？デル・ウイ」「遅い。」

気づけばやつは宙に浮いていた。いや、流石に飽きてきたのでね。ストレス発散のためのサンドバッグになつてもらおう。

「貴方の精神力は満ちている。」

ガツ！…！

「だが、おいらのあるお前に決して俺に勝てない。」

ガツ！…！　バキ！…！

「最強は間違いなくお前なんかじゃない。ギター…消滅する覚悟はできたか？」

バキ！バキ！…！

「てめえの驕りは死んだ奴らに食わせてやる。禁術、72の5、リビングデット…ヘブン。」

足元から何百もの骨の騎士が現れる。デュラハーンが、血ま

みれのゾンビが、三叉の槍を持つ太った雲に乗る男が……ギターを包む。

「そいつを八つ裂きにしろ。殺さない程度に。続け……亡者ども……！」

俺の指差すほうにはギターがいた。最後の命とともに亡者たちは武器を振り上げた。先ほどの5回の攻撃で神経と四肢は穿いておいた。もう、逃げられない。

ギャアアアアアアアツ！…………！

（回想終わり）

一滴の血が俺の頬をかすめる。メガラウス顔負けの悲鳴を上げたギターとの決闘を見ていたほとんどは気絶。あるいは相当気持ち悪そうな顔をしてトイレに駆け込み、満席になつたといつ。そしてまた称号が付いてしまつた。

地獄の使い魔と。

そして月は昇り、長い杖を持つタバサの目の前に悪魔の姿のまま降りたつた。

「こんばんわ。」

「……。」

「黙っていても悩みは解決しないし願いも届かないぞ。」

「どうして…」

「悩みを知っていた、か？」

俺は鞘を取り出す。出したかったのはそこに納められた白銀の剣。

「こいつはな、人の魂を感じる力がある。魂とは決して揺れ動かない。」

故に深い悲しみ、遠い遠い大事な思い出…そんな心の奥、魂にまで残る大切な思いをこの剣は親身になって答え俺に伝える。だからお前の大切なものが傷ついた、治す術が分からぬ、だからどうしようもないとあきらめた…そんな思いがお前から伝わった。お節介かもしれないが…話してくれれば対処はしよう。」

彼女はつづむきしばらく黙ってしまった。長かった。本当にこの少女は何もしゃべらない。この朝までしゃべらないのかと思った…。淡々としながらも彼女は告白してくれた。

「母さんを助けて。」

「けがか？病氣か？」

「……。」

いつむいてまた黙り込んだ。

「話してくれなければこれつきりだ。」

「毒で心を失つた。」

心神喪失……やっかいだがうひの医師に頼めばなんとかなるか？

「分かった。俺が去る前にレンに話をつけておく。

お前は…「己の憎しみにとらわれず、己の闇にとらわれずに生きることを勧める。まあ、お節介だから気にしなくて結構だ。俺は少し手助けをしてやるだけだからな。」

この学園は夜になると本当に静かになる。『氣づけばあの少女はどこかに消えていた。吹きゆく風と草の揺れる音ばかり。蝙蝠の翼は主のもとへ……。

「遅くなつた。ルイズ。」

何も言わないほど恐ろしいものはないな…。うん。彼女は間違いないなく怒っていた。桃色の髪の奥瞳が見えない。沈黙だけが長く、長く続いた…。

「なあ、話つて何だ？」

「それよりも……どうしてあんなことしたのよ……。」

才人が話を切り出すと同時にルイズが呟いた。才人はただ、この沈黙が嫌だつただけかもしれない。それにしてもすごいな。毎回のごとく家具が一瞬揺れたぞ…。 どんだけ負のオーラが出てんだよ…。

「理由はある時言つただろ？ おじりでは何もできないと証明するために呼び出したのや。 それと…話したかったのは……この事件の終焉と同時に俺はこの学園を去る。」

幽鬼のように立ち上がり俺に近づく。 そして思いつきり響く甲高い音。 連続して響く。

ただのビンタ。

避けることはできた。 でもそれは完全な裏切りだ。 元々裏切つていた俺。 彼女からのいかなる罵倒も何もかもを受け入れよう。だが避けてはいけない。

最初から分かり切つたことだったのだから裏切り者の末路など…。

「私は…この世界の普遍を乱しづかなか間だけ貴方に仕えた。 その時の言葉や思いに嘘偽りはありません。 ルイズ。」

「あんたは…私の使い魔なの…！ 私の下僕なの…！ だからどこの行つちゃいけないの…！…！」

ルイズは泣いていた。 認めた人が消えていく。 遠くへ行つてしまつ。 裏切りだ。

「いやだよ…。」

「ルイズ。私は貴方の使い魔であり世界の使い魔だ。 ルイズ、あなたを最後まで支えることを再び誓う。」

涙をぬぐつてあげた。

「でも…行っちゃうんでしょ？」

「はい。 ですがその時まで私は…この世界にいる限り貴方の使い魔です。 貴方を信頼し、 あなたに使える。

それが使い魔として私ができることだから。 人間故に雑用も任されるでしょ。 人間故にこの身を投げだしてでも貴方を守らなければいけないでしょ。

それは…才人、お前がたどる道だ。 お前は、使い魔としてルイズを守ってくれ。 彼女を永遠に認める…そんな存在になってくれ。 お前の価値観でルイズを守つてやつてくれ。」

俺はそれ以上しゃべることなく気がつけば意識を閉ざしていた。

だ。

もう寝よ。ここ的生活に慣れるまで大変

それが今あいつにに対する想いだった。俺と同じように使い魔になつた男は最初から消えることが分かっていた。帰る手段があつた。だから、いつもルイズの言つことに黙つて従つてたんだ。

「勝手な奴。」

けど…確かに俺を気遣い、ルイズを気遣つてた。そこに俺との違いなどあつたか？いやなかつた。

地球じゃできないだろ？

女の子の生着替えを手伝うなんて

ふざけたことを何度も言つた。最初はいらだちも全部お見通しだつたのかもしれない。

何がが起ころるたびに危険から遠ざけたつた一人剣をふるい続けた。その姿をはたから見たとき俺は恐怖しか感じなかつた。喧嘩なんて昔も何度もやつた。ギーシュとも喧嘩した。

だけど…あいつは戦つていた。喧嘩ではなかつた。本物の戦いだつた。その時初めて喧嘩が怖くなつた。その時にはもう決闘も終わつていたし剣から手を離したら氣を失つちまつたからその後何があつたかは分からぬ。

早く済ませて来い、主の機嫌を損ねると面倒だ。

キュルケのところに連れて行かれた時も。部屋の前でずっと待

つてくれた。

メガラウスの時には戦いのヒントを『え、他の魔法使いが倒れて  
いぐなか共闘させた。今だつて…ずっと俺たちのことを探してた。

「サイト。」

「何だよ。」

「メイドから、毛布を一枚貰つてきてくれない?」

珍しく命令口調じゃない命令。

「ああ。」

戻つてみると俺の藁のところにガルームがいた。少し呻いている。

「駄目だ…止める…奴らに…近づくな…-!-!-」

「どうしたんだ?」

俺がたずねるとトル公が答えてくれた。

『ガルームが急にうめいてよ。でずっとこの調子だ。』

カチカチという独特な声。それをかき消すかのような唸り声。

「嘘…早く…お…逃げ…」

顔をしかめ続け拳からは血が垂れ藁を濡らした。 脂汗が額から

垂れ寒いのか体がガクガクふるえている。

ルイズはきれいなハンカチでその額をぬぐった。 ちょっとだけ意外だった。

「はあ……また……」

それからまた静かになる。 ルイズはハンカチを洗濯かごの中に  
入れる。

「何なんだろうね、こいつ。」

強大な力を持つこの男。 優しいけどどこか恐ろしさを感じさせる。  
寝息を小さく立てて眠りにつく姿は先ほどの様子など微塵にも  
感じさせない。

その額に残つた脂汗が無ければ。 僕は彼に毛布をかけ、自分も  
毛布にくるまり目を閉じた。

「おやすみ。 サイト。」

寝る前に今までに聞こえなかつた声が聞こえたのは多分幻聴。 だから俺も言つ。

「おやすみ、ルイズ。」

後日、コルベーザ達に呼び出され俺達は学園長室に向かった。前に主、キュルケ、タバサ。隣には才人もいた。

「何でキュルケもいるのよ？」

「いいじゃない。面白がつだから。」

そんな言葉に呆気を取られたルイズだが、学園長が、ふうと息をつき前を見る。

「町で聞き込みを行つたところ、森の奥の廃屋に怪しい人影が出入りするという情報を入手しました。」

「？おかしくないか？町で聞き込みをしただけでそんな詳しい情報が普通転がっているか？」

そもそもこいつはあの時いなかつた。なのにこんなにも早く（正しいとするなら）その情報を入手出来る？

事件があったのは昨日。ここから町まで約3時間。そして状況が収集しアンリエッタが帰つたのは夕方。城下街につくのは…

：間違いなく夜だ。アンリエッタの兵士達が酒を飲んでいて口走つたとしても深夜だ。そこで聞いて情報を集めたとしても夜では誰かが森の中に入る…なんて情報を持つていてるだろうか？

「流石仕事が早いな。ミス・ロングビル。」

学園長も女に弱いな……。むしゃくしゃしてもしょうがない。  
これ以上考えるのはよそつ。彼女は軽い会釈をして話を続ける。  
きな臭い……この女……。

「その証言を元に一応私が描いてみたのですが。」

馬鹿な！？ その人物がいたとして今は昼前……つまり町を7時頃  
でないと間に合う訳が無い！ 夜中中搜すなんて考えられないし……  
フーケの特色をしつかりと捉えた絵を……完成させられる物か……？  
そんな事をルイズは考えていないだろつ。ただ……。

「これはフーケです！間違いありません！」

タバサも頷く。先生達（昨日ボコしたギターは除く。）は何か  
を恐れるように声を上げていた。しかし。

「直ぐに王室へ連絡しましょう。王室衛士隊に頼んで兵を擧げても  
らわねば。」

コルベールが教科書通りの正論を述べる。——「だけは何か……  
異質？」

「んな、ぐずぐずしておればフーケに逃げられる。我々の手で  
『破壊の杖』を奪還し、盗賊の手で汚された学院の名譽を取り戻  
すのじや。我と思うものは杖を掲げよー！」

誰もいない。 学園長が行くとは思えないが、誰も手を挙げよう

とはしない。喝をいれても誰も呻くだけで何もしなかつた。

そう『貴族の努め』…それを感じたのだろう。一人が手を挙げた。

「私が参りますわ！」

主だ。何もできないと分かっていても、彼女なら手を挙げる  
と俺は確信を持っていた。

「私も参りますわ。」

キュルケも手を挙げた。

「キュルケ、どうして？」

単純な疑問。キュルケは直接この事件に関わっている訳ではな  
い。なのに手を貸すと言つてきた。

「ふん、ルイズだけに任せてられないじゃない。」

キュルケも少しばるイズと仲良くなつてゐるのかな…？ヴァリ  
エルと呼ばずに彼女の名を呼んだ。隣の少女も杖を掲げる。

「タバサ、貴方はいいの」「二人が心配。」

キュルケの言葉を遮りただ言つ。心なしか小さく微笑んでいる  
ようにもみえた。

「ほほ…では三人に行つてもらうとしよう。皆も知つてのとおり  
この二人はフリーの目撃者であり、あの試練を乗り越えた者達で

もある。 異存はないな？」

メガラウスを倒したものたち…何人もの生徒が倒れたあの出来事を抜き打ちテスト扱いか…ほんと面白い爺さんだ。

「魔法学院は諸君らの努力と貴族の義務に期待する。」

三人が同じ向きに杖を向け無言で誓う。

「オールドオスマン、 人払いをしていただきたい。 少々頼みがある。」

「ガルーム…。」

ルイズが心配そうに俺に言つ。 大丈夫だ…。

「（）安心を主。 後から必ず追います。」

ルイズの前にひざまずき顔を上げる。 そう…これが、 この世界における最後の任務。

奪われた物…破壊の杖を、 俺の誇りを…そして貴族、 違う！ 彼女の誇りを奪い返す！！ そのために…。

「用意してほしいものは鎧用の支え木を一つ。」

そう言つて、右肩と左肩を叩く。彼は魔法で注文をききいた。直後電子音のような、彼が聞きなれない音が部屋に聞こえた。

始めた。

「？」

全身に鈍重な鎧が現れる。そう、これこそ…俺の拘束。

「それは？」

「これこそ俺の拘束。先に外すのはとてもなく重い鎧。」

一つの力ケラだけでも筋肉を引き裂き骨を断つほど重く、飛ばせるならこれほど脅威な石粒手は無いだらう。

それを一つずつ支え木にかけていく。

超重身体拘束鎧。漆黒の鎧は近づく者を圧倒する。原因はゴツすぎる見かけ。

棘の生えた肩、腕、膝、足。これだけの重装備にも関わらず動きだけは阻害しない。

「おお…。」

次は超魔素拘束鎧。これは見かけは軽鎧。腕と足には防具は無く上半身と下半身、それだけを守る鎧。素人目にはそう見えよう。

だがこれが真の力を發揮するのは対魔法戦。胸の朱い宝石は自

らの魔法の威力を下げる必要な魔力を増やす代わりに魔法による一切のダメージを無効化する。

残念ながらあの時の決闘では使用せずに俺も拘束としてしか見てないが。

「体が軽くなつた。さて行くとするか。」

あのきな臭い女と主達を一緒にしておく訳にはいかない。俺は学園長室から出て外へ、門に出来るまでイクシオンを呼んだ。

「来い！イクシオン！！」

黒いゲートより飛び出す一角獣。助走の間で飛び乗る。

「主達を追え。」

いななきと共に後ろ脚だけで立ち上がつて見せた。そして走り出す。雷が落ちた。

「いいか。」

イクシオンは馬車の馬の所に置いてきた。 調度、皆が廃屋に入らうとした所だった。

「主!」

「ガルーム。」

「盗賊は?」

首を横に振り答えた。 その時真後ろからキュルケと才人の声が聞こえた。

「えええつ!...!...?」

「どうしたの?」

主が声をかけた。 足元が震えた。 まさか。

「ルイズ!!」

彼女を抱き抱え飛ぶ。 足元からゴーレムが現れ廃屋の屋根を飛ばす。

「主、無事ですか?」

「うん……。」

彼女を下ろし鞄を持つ。 廃屋から来た風と炎を同時に浴びるも振り払った。

「キュルケ！ タバサ！ ルイズを頼む！ こいつは俺がやる！  
才人は皆を！！」

体が軽い！ この前の二の舞にはならない！！  
横一閃でゴーレムの両足が飛ぶ。 胸に刻んだ二回の斬撃。 肩から両腕を切り落とす。

本体だけが中央に落ちた。 そして首に乗り両手で鞘を持ち地面に、顔に勢いよく差し込んだ。

「…これで、終わりか？」

だが殺氣を感じ跳んだ。 タバサがシルフィードを呼び順にルイズがいない。 見回すと一人爆発を起こしていた。  
だが彼女は気づかない。 もはや人型ではない。 龍の尾が彼女に迫っていた。 気がついたのは俺だけ。 鞘を投げ付けていた。黒と黄土色の凶器が迫る。 大気を裂く二つの力を前に彼女は恐怖で固まっていた。

土煙が上がる。「ゴーレムは再び立ち上がる。俺はタバサに言った。

「先に上空へ！」

「ダーリンは！？」

飛び立つキュルケが俺に聞いた。才人を心配する表情は本当に真剣だった。

「才人と俺は左右からルイズを救出後、脱出する。合図したら降りて来てくれ。」

才人を見る。彼が頷く。俺が右回り。彼が左回り。ルイズはゴーレムの真横。俺達ともっとも離れた位置にいた。途中で鞘を拾う。ゴーレムがルイズを向いた。

「逃げる、かないっこねえだろ！？」

「いやよ……私は貴族よ！？」

「ゴーレムが拳を振り上げ始める。

「魔法が使える者を貴族と呼ぶんじゃない！ 敵に後ろを見せない者を貴族というのよ！ ゼロのルイズじゃないんだから！……」

それは無理ばかり言う少女の心の悲鳴。 優しい少女は決して誰かを責める事なく、自分を責めつづけた。 故に自分の力を示して認められなかつた。 誰かに認められたかつた。  
けど… それで死ぬのは間違つてる！！！

「エクスプロージョン！！！」

腕に爆発が起るが腕を吹き飛ばす程の力など無く一瞬動きを止めただけ。 僕が到達するよりも拳を下ろす速さは早かつた。

「ああっ…」

飛びこんだのは才人。 二人を抱きとめ一人を抱いたまま後ろに跳ぶ。

「邪魔しないで！！」

俺を振り払い、 彼は手の甲で彼女の頬をはたいた。 はたかれたところを押さえ、 何が起きたか分からぬかのようにルイズは才人を見た。

「貴族だから何だつてんだ！！！！死んだら終わりじゃねえか！  
馬鹿！！！」

「右に同じだ。」

ルイズは俯き震え叫ぶ。

「だつていつも皆から馬鹿にされて…あんたたちだけにしか認められないくて……悔しくて……逃げたらまた馬鹿にされるじゃない!!!  
！誰にも認められないなんて嫌……！」

「おい、泣くなよ。」

才人を下がらせタバサを呼ぶ。シルフィードが降りてきた。  
キュルケが叱咤しながら彼女を乗せた。

「貴方達も。」

それを才人が断る。

「いいから行け！」

俯きつづける彼女に言つ。

「ルイズ、見ていてくれ！ 貴方の使い魔は貴方の強さを今示します！！ 行くぞ、才人！！」

才人がデルフリンガーを引き抜く。同時に左手のルーンが光り輝く。

今回が俺の最初で最後であろう。黒光りする鞘から柄を掴んで  
ゆっくり引き抜く。  
白銀の刃が輝き辺りを白く照らす。戦いの中で真にその魂の剣が煌  
く。

『まう、こりゃおでれーた。』

デルフリングガーが感心した声を出した。

「行くぞ才人…土人形、抹消される覚悟は出来たか？」

「土つくれが…なめんなよ！！」

剣士は一人、走り出し切り捨てる。

一人は冷徹に、一人は、雄叫びを上げ腕と足を破壊する。四肢を穿つ。

だがこれではさつきと同じ。再び再生する。これを倒すにはこのいつの体内の中にある魔力を全て無くすしかない。剣技でそれが出来るのは……。

「どうすりやいい…？」

いろいろ問題がある過ぎて、俺はそつづぶやいた。

「ガルーム！何か手はねえのか！？」

才人が聞いてくる。

「無い訳ではないが…下手な魔法はこの森の消滅に繋がる！」

悩んでいたその時空から響く声。

「二人から離れなさい！…」

凛とした声。ルイズが破壊の杖を持っていた。

「才人はルイズの元へ！！」

「ああ！！ルイズ！！！！！」

ゴーレムの胸元へ剣を叩き込む。巨人を五秒停止させたが拳で邪魔物を叩き潰そうとする。

ルイズを見るとあの『破壊の杖』を必死になつて振っていた。使い方が間違つてる…。

「えい！えい！なんで、何も起きないの！？」

才人が到着した。胸部を蹴り体勢を立て直し宙に舞う。ゴーレムはひるんだ。俺の見間違いでなければ『破壊の杖』は才人が使えるはずだ！！

「これは魔法の杖なんかじゃなえー！こつやつて使うんだ！！」

ルーンが一段と輝き才人が『破壊の杖』を正しく構える。

「才人！撃て！！」

「伏せろ！ルイズ！！」

カチッ

吐き出された弾丸。 黒いナニカはゴーレムに突つ込み黒煙と爆炎を上げた。

風が全てを運んだ時、 土くれにゴーレムは戻っていた。 一旦安心してゴーレムに背を向けルイズの元へ足を向けた。 シルフィードもルイズの側に。 キュルケがその豊満な胸をちゃっかり押し付けつつ才人を抱きしめる。

才人もうれしそうに鼻の下を伸ばしていた。 やれやれだ。

ゾク！！

体を貫く、心臓を握り絞められるような悪寒。この感覚何度も味わってきた。

まさか……いたといふのか？周りの気配を探る。イクシオンは……逃げたか。あのきな臭い女は隠れている。他のやつらは……ふるえている。駄目だ。才人でも今は役に立たねえ……！

俺は左手をシルフィードも含めた全員に向ける。あの女？守る必要なし。

大気の魔素を探れ、創造するのは影の盾。太陽が満ちる今なら者に遮られた影は強く、濃くなるはず……。

「禁術！ 72の1！！ シャドーガード！！」

全員を影の結界が包む。具体的に言つと真っ黒な球体に包まれた。

「何よこれー？」

「全員そこにいるーしばらくすれば眼が慣れるーー！」

足元は液状と化した闇。ゴーレムが倒れたところでぐるぐると回る。

グルグルグルグルグルグルグルグルグル…

そして浮かび上がる直径1mほどの球体。

「ケケケツ」

「いねえと思つて安心してたんだがな……ダークネス……。」

グオオオオオオオオオオオツ――――――――――――――――

響き渡る土人形の雄叫び。

黄土色の体はドスの利いた紫に、その両手につけられるのは漆黒のガンドレッド。

先ほどよりも何倍も速くその拳を振り上げ振り下ろす。木々は折れ、地面にはさつきはできなかつたクレーターが何個もできる。

「ダークネス相手じや、本氣になるしかないよな。」

グワアアアア――――――――――――――――――――――

大袈裟に切り裂く一撃。足が崩れ落ちる。魔力で切り裂いた

一撃……再生は不可能だ。

だが大地が浮き上がり代わりの土が奴の足となる。何度も降つてくる俊敏なハンマー。距離をとり魔力を込め十字に裂く！！

「グランドクロス――」

聖なる十字架ではないが魔力の刃が飛び胸に十字の穴をあける。

「フイーッシコ。」

剣を持ったまま一本の木へ向かう。怒りを抑えゆづくり歩いた。

「出でこよ、ミス・ロングビル。」

「「めんなさい、見回りに…」「いや…土くれのフーケ。」

言葉をせえぎつ言つた。

「な、何のことかしら?」

「「まかしても無駄だ。」

「…ばれてたつて」とかい?」

眼鏡を足元に捨て踏みつけた。その声は確かにあの時の声と同じだった。その瞳を見て…思った。こいつは眞の悪人じやねえ。何かを訴えてくる…。

「いや…主たれまだ氣づいてないはずだ。盜族には一種類存在する。お前は…」

その髪に触れさつと横に動かした。その頬に触れる。

「誰かのために…物を盗み続けていたのだな?誰かのために、罪を

背負つて生きてこる。さうしかお前の眼を見て感じられない。」

「……私は、そんなに綺麗な人間じやないよ……。」

田をそらしても事実が消えるわけではないのだが……。

「まあいい。さつせと足を洗つことを提案するよ。俺が貴様に教えられるのはお前の3つの道だ。

1つ、このまま俺の手によつて捕まるか。

2つ、フーケは『破壊の杖』を奪われどこかへ逃亡しお前はこれからあの爺さんのところに帰るか。

3つ……ここから逃亡して一度と盗みを行わずに過ごすか。」

彼女はしつりと元ならみながら聞く。

「3つ目はどう意味だい？」

「残念だがあの闇の中にいる間、彼らは外の様子を確認できない。声も聞こえない。だからお前の正体は俺しか知らない。お前がここにいた証さえ残せば、彼女らも納得するさ。」

「いいのかい？ 私が盗族から足を洗つたかどうかは確認できないんだよ？」

「俺はあるガキの影響を受けちまつてな……拳骨一発で勘弁しているん、だ！」

軽く、こつんと彼女の頭に拳を落とす。

「つづけ……」

「それと… 黒い影には気をつけろ。さつきの『ガーレム』は…」

「ああ、破壊の杖の使い方を見てから魔力を送りずに放つておいた。

」

やはり… 無関係だつたか。

「これ持つて早く逃げな。」

渡したのは大量の金貨。確かに真金貨だつたな。それを異次元から転送してもらい、袋に詰めて渡す。

「いいのかい？」

「文句あるなら返せ。」

「嫌だよ。もらえたもののはもうついていく。」

その直後大地に走る激震。

「… … 名前は？」

「ガルーム・ゼ・レジエンドだ。さあ、行け！！」

彼女は木に何かの魔法を与え、外套を脱ぎ棄てると森の奥へと走つて行つた。結界はまだ発動中、ヒビ一つ入つていない。だが揺らぎ始めている。もうそろそろ、周りが見えるだろう。

「さて… 閣の彼方に飛ばしてやるか。」

「ゴーレムの両手には闇がありそれが膨れ上がり弾けた。と、同時にゴーレムの右肩から見える…一本の木…誰かがいたような気がした…覚えのある闇の気配を確かに一瞬感じた?」

「まあ、それよりもどうにかするのが先か。」

「ゴーレムの大きさは25mぐらい。弾けた闇が形となり現れたのは10mほどの旧石器時代に作られたような石の斧剣だった。しかも一刀流で。」

「ゴーレムの目がまがまがしく赤く光る。獣の獲物を見るような視線。一気に片を付ける。振り下ろす斬撃には盾を!」

「バリア、展開!!!」

重い…だが昔…勇者王から受けた地獄(ヘル・アンド・ヘブン)と樂園の狭間の力を呼びそれを拳に合わせ作られた鈍器よりは…はるかに軽い…!!

押しのける…、ゴーレムが弾かれたように3歩下がる。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオ!-----!

本来ならあり得ない。あれほど質量が大空に跳躍する。落ちはば大地震では済まされないだろう。最悪、この森は消え大地が大きく隆起するだろう。

「だが……」

右手を天に差し出す。太陽を影に落ちてくる暗黒の狂氣。  
…それがいま何トンであるうとも……炎と雷をまとった破壊の王  
の蹴りには決して届かない……！

「はああああつ……！」

すりおち、巨人は地に伏せる。自らの刃で自らを傷つけながら。  
今、結界がとかれた。貴方ルイズのために…今、全てを碎く。  
振り上げた白銀の剣に黒に近い、紫の魔力が集まっていく…。

「主…これが俺の力だ…。」

そして輝く。暗黒の魔力が展開し俺は胸に跳ぶ。ゴーレムも立ち上がろうとするがその巨体を支えるだけの足は自らの剣で貫いている……！

「ダークネエエス…ヘエエエル…クラッシユ…！…！」

闇をまとつた剣で切り下ろした。切り裂いたゴーレムの体内から闇が漏れ出し、俺が飛び離れるとともに漆黒の光…闇がまっすぐ空へと伸びた。

ガアアアアアツ…！！！！アアアアアア…！！！！…！

ゴーレムの遠吠えと誰かの断末魔の叫び。彼らも結界から出てき

た。

「すゞい…。」

「フーケは？」

キュルケは俺の技の威力に驚き、タバサが俺にフーケの行方を聞いた。俺は首を横に振り彼女らをさつきまで彼女がいた木陰に連れていく。そこには彼女が残したメモと外套が残されていた。

私が、土くれのフーケは破壊の杖を諦めた。代わりに素晴らしい宝物を確かに頂戴した。

「（彼女が書きそつな言葉だ。）」

「これ、フーケの外套よね？」

「捕まえられたかもしれないのに……！」

主に心の中で静かに謝罪した。今は一様あれの正体を確認しないと…。

「才人、破壊の杖はロケットランチャーか？」

「ロ、ケットランター？」

誰かが間違えた発言をしたようだが気にしない。

「ああ……俺の世界の武器だ。」

「セヒ、一戻るで、あの女は先に戻ったかもしねない。」

誰にも気づかなかつたがあいつが叩き割つた眼鏡を持って俺は馬車を操り学園へと帰還した。

見つけたのは才人の世界の武器…地球の武器…そしてダークネス…俺の…仇…

「やれやれ一瞬見つかつたと思ったんだが……ガルーム・ザ・レジエンド…この世界で滅びてくれると嬉しぃんだがね…まあ…」

ソレは木の上で空を見上げて下唇に口を曲げた。

「先に…ギルム・レ・ヘブンか。 使えない部下を持つと上司は辛いね～～。」

シウツと音を立てた後には誰もいない。 つづくらと残るピンク色の墨みだけがそこに残つた。

## 使い魔として…（後書き）

盗賊事件を終え、ダークネスの進行を確認するためにこの世界にもうしばらく残る。夜に入る緊急連絡はもう一つの物語を終わらせる力ギと為す。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
再会

次回をお楽しみに。

再会（前書き）

カルピスは正義です！絶対おいしいんです！…異論は認めません！

すんません、はしゃぎました。いつも、読んでくれて、本当に感謝です。ギルムの物語との擦れ違いのような交差点。ギルム編を読んでくれた方はあの時の再来になりますが、温かい田で見守つてください。

## 再会

「破壊の杖は再び宝物庫に收まり、 フーケには逃げられてしまつたが盜族の手から奪われたものを奪還し無事帰還した。 このことには王宮も大きく評価しておる。 君たち三人にいづれ王室より何らかの褒賞があらう。」

帰還した俺たちはまず、 学院長に報告。 いつの間にか王宮にも話は伝わつており、 主たちは報酬を受けることになつた。 その中でロングビルの行方を聞く者はいない。

「あの、 3人つてことは一人には……。」

ルイズはわざわざ、 尋ねてくれた。 実力を知る上か残念そうに彼は言った。

「残念じゃが、 彼らは貴族で無いのでな……。」

「そうですか。」

悲しそうに言わないでくれ、 ルイズ。 そんなもの、 僕には必要ないんだ。

「私にはそんなもの必要ありません。」

俺はすぐにそうついた。 才人も続けて言つ。

「俺もです。 学院長、 それより話したいことが。」

頷く彼を見て彼女たちは退出する。今日はパーティらしいから立ち去る前に一言だけつぶやく。

「楽しめるときに、十二分に楽しんでおけ。後悔する前に。」

聞こえたのかどうかも分からない。俺は学院長に彼女の眼鏡を渡した。彼は小さくうなずいた。俺は再び部屋の端にある鎧に近づいた。その鎧に触れて咳く。

「セツ、チーンスタンバイ。」

一つの鎧は分解されるべき位置に飛び一瞬にして合体する。そして消える。「この重さ…しつかりと機能してる…でもやっぱ重い…ラストだと思つてたんだけどな。

「ひひひ…。重。」

「大丈夫かね？」

コルベールが心配そうに声を掛けってきた。手をそっと前に出して返答する。立ち上がり深呼吸。

「問題ない。」

才人も話を中断してこっちを見ていた。軽く微笑み隣に立つ。

「どここまで話した？」

「いや、あの破壊の杖が俺の世界の武器だつてことと、俺がこの世界の住人でないこと。聞こえなかつたか？」

まつたく聞いてない…耳が悪くなつたか？ そう不安に思つたが今考へることではない。俺も報告することがある。

「ガルームも聞いてほしい。」

学院長はそう皮切り話しだした。破壊の杖は、ある男によつてもたらされた。

見たこともない姿、詳しく述べ出せないが固い縁帽をかぶつていたことから迷彩服姿の軍人と予測。30年ほど前、現実の流れで存在していた戦争…その軍人…まあ、戦争なんて今でもある事。それ以上の推測はできなかつたが…。

彼に助けられたらしい。ワイバーンとこの世界で呼んでいる魔物を吹つ飛ばしたらしい。まあ、当然か。

「くそ！せっかく帰る手掛かりが見つかったと思つたのに…！」

歯軋りし机を叩く才人。この異世界から帰る方法……。次は俺か。

「学院長、先日話していた魔物がこの世界に現れました。よつて、もうしばらくここに滞在します。」

頷くが、少し唸つている。俺が危惧する闇から生まれる魔物を越えた魔物。この対応が本来なら当たり前なんだ。気休めにしかならないだろうが…鞘から剣を引き抜いた。

「（）安心を。私がいる限りこの学園にも…生徒にもダークネスに

は指一本触れさせません。」

俺にはそれしかできない。この時皆がどんな顔をしていたのかは、覚えていない。ただ…あのとき感じた憎悪の気配…奴の正体を思い出すことに頭がいっぱいだった。

中央塔ではきらびらかな光が外に漏れていた。俺はああいつと  
これは好きじゃない。昔を思い出してしまつから。ドンチャン  
騒ぎ。

最後に全員で騒いだ時はお酒と豪華な食事と音楽と笑いに包まれたあの会場…日に浮かぶのはみんなの笑顔…だがそれを俺は裏切った…

…

あの後起きた事件…俺はあの時…人であることをやめた。それからは戦いの連鎖。徹底的に闇を破壊し、真実を知つた俺は知つていた世界の意思をすべて殺し：ダークネスとの最終決戦。

あれほど世界を巻き込んだ戦いは無かつた。多くの世界にいる仲間たちが疑似的に作り出した餌でおびき寄せた…その間に俺は多くの命の犠牲をうえで奴らを…そして背後に潜んでいたイレギュラーを殺して、殺して、殺して、殺して、殺しつくした。

俺の心は最後の使命…俺の命滅びるその時まで、誰かを苦しめるものを倒す…不死である俺が死ぬことはあり得ない。全てを歪めた罰は永遠に償えない…そう思つていた。そんな俺を救ってくれる人に気付くまでは…。

償わなければならない。その強迫観念に俺は全てを失い、一度剣を失ったとき自棄になつた。酒を飲むことも、何もすることもなくただ時間の流れを…永遠を感じていた。誰かにできるかな？この身は全てを不要とする。食事も、空氣も、排せつすることも、生殖活動も、睡眠も、何もかもがいらない。なぜなら俺は全てのDNAを合わせたことで俺自身がキマイラ化し世界の修正力によつて完成した。ある意味人類が望んで形となつた不老不死。その代わり、一度眠っている間に幽体離脱しビデオの早送りのような人類の1兆年を見せられ、俺はすべての存在意義を失つたが。

結果から言えばもう一度、人に戻ることができた。じゃなかつたら俺はここにいないでどことも知れない洞窟の中で永久保存されていたはずだ。

「ガルームさん？」

「シエスタか。」

そのことを思い出していたから、低い声でそう答えた。

「どうしたんですか？祝賀会はまだ…。」

「俺にはああこうじうのは似合わないでね。逃げてきた。」

質問に答え星を見る。地球では…山奥でなければこの星を海を見る事はできないだろう。このうん万の星をかけても平和はまだ遠いのか。

「なあ、シエスタは今暇か？」

「まあ。後は寝るだけですが。」

「少し付き合つてくれ。才人の時のアプローチにもなるだろ。」

急に顔を真っ赤に、…本気で好きなようだな。彼女はルイズの次に才人と接触を持つたと、聞いている。

俺のように手遅れになる前に…幸せな人が増えたらいいと思う。

「どうしてそういう思つんですか？」

「…いろんな奴を見てきた。いろんな人々を知った。そん中にはこの世界にいる人々に似ている人もいた。だからなのかな、なんとなく分かるんだよ。」

笑えたかどうかは知らないが笑つて見せた。

「…どうして泣いているんですか？」

えつ？頬に触れてみるが涙は流れていない。

「何言つてんだよ。涙、流れてないよ。」

「…氣のせいでしょつか、泣いているよつて見えたんです。」

「うか…。笑顔はダメだな。昔言われたままだ。『お前の笑みは全て泣き顔』と。

「これをお前にやるよ。才人を作つてあげるといい。」

渡してやつたのはあるメーラーのメモ。立ち止まって尋ねる。

「読めるよな？」

「はい。でもこれつて？」

「黙つて才人に出してやれ。死ぬほど喜ぶはずだ。」

そのままお休みの挨拶だけして立ち去る。話したかったのはもつとそんなことじゅなかつたのに・・・。

先に戻っていた俺はずつと、待っていた。

この世界で出会った主

「帰ってきたか。」

ともに我儘を聞いてきた仲間を。目を開じても、開いても、蠅燭一つないこの部屋はあまりにも暗い。

「アンタ、行っちゃうじゃなかつたの？」

ルイズがそう尋ねてきた。答えはもつ決まっている。

「俺の敵がこの世界に現れた。背後をつぶさぬ限り、帰れないや。」

ダークネスは俺の敵だ。何があらうともすべてを殺す……！　その果てに何があらうとも……。俺はただ拳を握りしめた。その時才人が俺に言ひ。

「その握りこぶしはやめる。血がまた出でてくるぞ。」

言われてはつとなつた。彼は俺を気にしてくれた。かつての俺の仲間と同じようにな。

「すまない……。気を遣わせたな。一人とも……もう少し前たちを守ることを許すことを許してくれるか？」

「使い魔なんだから当然でしょ……」

やれやれ、ルイズのデレ期はすぎてしまったな。ドレスを脱ぎすぎて、寝起きを慌てて着こんだ彼女は頭から布団をかぶつて窓のほうを向いてしまつ。幾許もしないうちに静かな寝息が聞こえてきた。

「才人、帰りたいか？」

「まあ……その質問2回目だ。」

「そうか……ルイズも……。俺は彼に近づきその髪の毛を一本引っ張つた。

「痛つ！」

顔をしかめて俺をにらむ。「まあ、奴らに比べりや可愛い程度だ。」「これはいたぐく。お前の故郷を探す手掛かりになる……かも知れないからな。」

「分かるのか！？」

口元に人差し指を持つていった。

「静かにし」

（～）

「おい。」

生温かい目で見るのはやめる……。どこからか流れたメロディー。俺の左腕からだ。腕にはめ込まれた通信システム。

「ロックオフ。」

解除コードを言えばパカッと開いた。

『ガルーム、今すぐ牙城に帰還してくれ。頼みがある。』

そう日本語で書かれたメッセージが出現した。才人はただ、隣で興奮した様子で俺の機械を見ている。まあ、男の子だしハイテクに興味を持つのは当然か。俺は彼に少し離れるように指示した後、転移呪文を唱えた。

「朝までには帰る！…行くぜ、ダークエンジ…。」

暗闇の円が足元に展開し俺を包み食らうつよつに闇が動きそこから消えた。俺がいた証は消え去った。

超巨大戦艦牙城。そこについた俺は牙城の人工頭脳、牙城の意思そのものに指示を受けていた。

ギルムがダークネス…この前レイが言っていた闇の書事件にかかわり、内部にいたダークネスと戦闘を開始。擊破寸前なのだが、後始末…レイが言うならばとどめ…後から出て来るかもしれない下級ダークネスの掃討。それが依頼の内容だ。

『以上より、お前をこの世界の地球に送る。』

「その前に頼みがある。」

『何だ?』

あまり抑揚のない声。俺は才人の髪の毛を置く。

「この髪についている一つの魔素、俺にも付着している。送るまで魔素からこの一つの故郷を特定してくれないか?」

魔素は星によつてすべて異なる。故に同じ魔法でも、若干の威力が異なつたり、魔法そのものが存在しない場合もある。つまりAという魔法があつたとして、同じ名前のBという魔法は必ずしも全く同じというわけではないのだ。さらに似た世界でもAがある世界ではCが存在するが、Bの魔法の世界ではCが存在しない。これは全て魔素が原因となる。

解説はここまでにして…結果を聞くとするか。

『ガルーム、結果から言つとお前が向かう世界と彼の世界は同じだつた。』

「そうか、なら行方不明になつてゐるといつことか。」

『そろそろ地球に到達する。ガルーム。移動準備を。移転したらすぐ戦いだ。』

「了解した！」

「……あれか。」

黒いゲートを突つ切つた先にいたのは飛行船。そこにいたのはほぼ魔力が枯渇した現代の魔法使い達。そこにはボロボロになり機械の少女に膝枕をしてもらつ少年騎士もいた。

「…相當な戦いがあつたようだな。」

そして視線を動かせば黒い鎧に身を包む暗黒の狂気。昨日の…まだ今日かな？　どつちでもいいか。ダークネス…今まで何度も戦ってきた巨大騎士型、ナイト・ハートレス…！

再び飛行船に視線を戻す。飛空船はそのエネルギーのほとんどを失い、そこで浮遊するのが精一杯。

狂気には多くの武器がある、この場合奴がとる戦法は…腕を伸ばすか、左に持つ銃に弾丸を放たせるか、それとも…。

だが距離がありすぎる。この距離では盾の投擲はあるか魔法の発動距離すらも超えている。その時ピンクのレーザーと光の矢が何十本も道を切り裂く。爆煙が呼吸をした。大気が分かれ無傷のダークネスがその姿を現す。

レイめ。あそこでなにのんびり横になつてんだよ……！

奴が動いた。左手にエネルギーが収束し三発の暗黒弾が飛び出す。初速度は時速40km辺りか、加速している…玉の大きさは1・5mと考えていいだろう。距離的にいえばタイムリミットは後…3秒と言つたところか。

「…………そんなこと言つてる場合か…………？」

「ここまで響く彼らの叫び声。加速した！まずい、予想より早い！予定をゼロコンマ5秒短くする。一ちらも…加速！これじゃあ唱えられる魔法はおそらくひとつ。詠唱に一秒、発動にゼロコンマ3秒。残り時間1・3秒。

「魔素を感じろ…放つべきは反撃の盾。」

もう田の前だ…距離はあと一歩踏み込み…発動！！

「禁術！！　一一の二、カウンターマグネー！」

三つの玉のエネルギーだけは高いな。破壊者の砲撃…前よりも強くなってる。だがこの程度で負ける俺じゃない…！…さらに速度を打ち返した。瞬時に跳ね返り鎧がよろめいた。冷たい、風が吹く。

「おいおい、主人公はラストでピンチを救うのが相場で決まってるけどあいつは違うだろ？が…」

確かに聞こえた嫌味…あの野郎後で牙城中のカルピスとりあげて

やるー！ サボつてたくせにー！ それよりも、まずはあいつに聞  
く必要性がある。

「おい、ギルムお前にとつてそいつらは何だ？」

「Jの程度でしゃべれなくなるお前じゃないだろ？あつあつとかすれた声だけが聞こえた。まあ、Jの際にJにつをこじめてやるか。

「もう一度聞く。そいつらがお前にどうして何だ？」

「と、友達だああ！！！」

目を限界まで開いたあいつはそう叫んだ。

いいだろ？ 全力を持ってお前の友を救おう。 やっぱあいつは  
いじめがいがある。 さて……地獄を開こうか。 光速で接近しますそ  
の鎧に一太刀与える。 ひびが一瞬で入った？ この鎧、相当もろい…  
まるで泥・土のよつな。

まさか…昨日のゴーレムの再生能力を…？いや、だとしたら再生するはず…ひびが無くなるはず…だがそれがない。力の本質を変化させたか？魔法攻撃が聞かなかつたのはこの鎧の効果とみて間違いない。だが…こんなにもろい鎧があの凶悪な2種の攻撃を退けた…？いや、今考察をしている暇は無い。光速でこの鎧を破壊する…！なんども、全身に剣の斬撃を与え、与え、壊す…！！

最後の一閃が鎧をバラバラに打ち碎く。さあ、とどめだ！

「ダークネス、ヘル、クラッショウー！」

胸部にある心臓。それを貫いた。体を震わせ、あの「ゴーレム」のように闇を天に吐きだした。

「おーおー。」

「おーおー。」

「止めるな、」の一人、野郎をぶつ飛ばす。」

「よお。」「飛空艇に待つレイ！」まづ拳の返答をしてやった。

「ゴバキガー！……」

変な悲鳴を上げ彼は飛空戦の壁に激突する。

「おーおー。」

「壊すな。」これは人のものだ。」

「グダムとハセヌが止めにかかるが振り払つ。

「止めるな、」の一人、野郎をぶつ飛ばす。」

瓦礫の中で目を回すレイ。それでも言葉がしつかり発音できているのだから不思議だ。

「待て、ほんとに死ぬ……！」

「じゃあ、死ね。」

「黙田だ。」

両手両足にしがみつぐ一人。「冗談じゃねえ！！」「いっだけは

……！

「離せ…………！」

「じゃあ、先に失礼。」

おっ、動けねえ。よっしゃ～じゃあ、帰る……なんて言葉が聞こえた気がした。ゲートを開き逃げだすレイ。逃がすか！！三発ぶん殴らなくちゃ気がすまん！！！

ザバー…………

「落ち着けっての！」

いつの間にかハセヌが水をたっぷり入れたバケツを持ってきていた。

「ずぶ濡れかい…へクシユ。」

殴る前に服乾かさねえと。必然的…でもないが牙城の浴室であつたまるか。

「この世界の魔法使い達と呼ぶべきかな…？」

彼らは俺を見た。伝えたい言葉は一つだけだ。

「その騎士を守ってやってくれ。あと、俺のことときさつきに逃げた奴が連れて行つたって言つといってくれ。頼むぞ。」

一方的な押し付けでいい。今度会つた時こそ俺は…彼らに向き合つ。今は、あの騎士がお前たちを守るはずだから…。開いた闇の道をただ歩いていく。そのあとを一人の騎士も続いた。

「中世……。」

グダムは壁に寄りかかり、 ただ興味なさやつにしつぶやく。

「彼が行きついたこの世界のもう一つの現代魔法世界。」

彼から聞いた内容をハセヌは復唱した。

「奴が使えるツンデレの主か。なかなか面白い人材じゃなねえか。」

「

ズズズズズ

「だから、 何で冬にカルピス、 飲んでいるんだお前は……！」

グダムが声を荒げ、 訳が分からないとレイに詰め寄る。

「ええい！ カルピスは正義だ！！ 異論は認めねええ！！！」

レイもコップを置いて大げさに叫ぶ。

「訳分からない」と言つてんじやねえ……」

ハセヌもグダムの味方をし、ああでもない、こうでもないと  
言い争う。3人の喧嘩を巨船は沈黙して無視し、  
その喧騒が巨  
船内に響くだけ。

再会（後書き）

獅子は息子を谷底落とす 可愛い子には旅をさせよ 彼女は旅を知らない。故に生きる者の苦しみを知る。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
国を知ること

次回をお楽しみに。

## 国を知る」と（前書き）

更新が遅くなつて本当にごめんなさい。

こんかい、ハルケギニア、強いては人間そのものに対する痛切なアンチ（？）が含まれています。

故に気に入らないと思つたらここで引き返すことをお勧めします。正直書いてここまで書く必要あるか？とか思つたのですが気が付いたらこんなこと書いてありました…。

オリジナルキャラクター出現！！

正確には一次元のキャラでありながら設定がほとんどないので勝手につけた。

アクロス・ウォーター（レジョンズより）

伝説の水の魔王。その癒しの力は神すらも超えるといわれている。  
普段着＝白衣の男で魔法抜きにしても凄腕の名医。  
青色の髪で右頬に黒子があるが某博士顔みたいな痩せこけてたりはない、少しきメン？

## 国を知る」と

「ただいま……。」

朝帰りになつた。ルイズの部屋にはまだ光は差し込まず一人はすやすや眠つていた。

「ちい姉さま……。」

寝そうはいいはずのルイズだが少し寝返りをうつたのかほんの少し掛け布団がづれていた。まだまだ世界を知らない少女。俺も……この学院のことしか知らない。町にも行つたが彼女が知つてゐる範囲までだつた。

「母さん……父さん……。」

彼の望みは帰還。彼女の望みは永久において自分を真に認めてくれるもの的存在。過ちを過ちだと指摘し正しいことをしたときにはほめてくれる。まあ、勝手な予想だがな。一度は帰してやりたいが……。何か忘れてるな……。

なんか寒いぞ……？部屋の温度が下がつて……。ひらりと部屋の外からの視線を感じて目を向けた。

俺はとんでもないウソつきです。ほんとこすっかり彼女のことを見失っていた。

「頼むから部屋を凍らせないでくれ、タバサ。」

ワイングラスに乗つて黙つて杖で俺をさす少女。 ちょっと怖いんですけど…。 まあ約束破りじゃしょうがねえか。

「分かった、奴には悪いが今名医を呼んでやる。」

…どんな傷も病も全てを癒してきたあの王ならば…必ず彼女を救ってくれるはず…。 アクロス。 僕に力を貸してくれ！

「禁術100の5ティメンジヨンゲート…アクロス・ウォーター！ 来てくれ！」

黒い穴が目の前に開かれ、白衣を着た男が中から出でてくる。

「アポなしで、呼び出すな馬鹿野郎…。」

眠っていたのか髪の毛が何本もはねている。 つい笑いこらえきれず苦笑してしまった。

「…緊急患者はどうだ？」

アクロスは髪をたくしあげておれに訪ねた。

「心神喪失者一名。 もう何年もたつが現在も生きている。」

「ふむ…脳内に異常…といつていいか。 すぐに薬を用意する。 10分後またゲートを開けてくれ。 依頼主は？」

後ろを指さす。アクロスは両手をポケットに突っ込み彼女に近づく。今この場にいるのは眠る一人と俺たちだけ。アクロスはその少女を一回見るとシルフィードの頭を撫で始めた。

なぜなら奴も竜。水の竜王。種族は違えど竜を見て本能的に近づきたかつたのかもしない。これも勝手な推測だけどな。

「王女よ。」

！？ 王女？ 何の話だ…？

「気高き竜を僕にする力を持つ王女…そなたが依頼主か？」

「王女じゃない。だけど…。」

彼女はこくりとうなずいた。…あの、ついていけないんですけど、なんで王家の一族って気づいたんですか？ ってタバサは王族？ 頭んなかパンクしそうです。ガチで〜。

「心の声は本当に心の中であつたな、ガルーム。」

「そう。一人が起きる。」

「ひつや、失敬。でどうする。」

「薬は今すぐ用意する。すぐに戻る。」

ともすればアクロスは消える。じつと睨むタバサ。

「少し遅れですかつたな。」

「ぐんとまた頷く。……この感じ……昔あつたやつに似ている…。あの少女は元気だらうか…？」田を閉じれば、赤い髪の少女がほんの少しのわがままを同じ所に住む少年に言ひ。その少年は嫌そうな顔を一瞬するが、「しょうがないな」と、とたんに笑顔を見せて周りに同意を求める。彼女の願いは基本的にどこかに出かけることだ。アルビノの少年はミユージックプレイヤーからイヤホンをはずして頷き、あの少女も赤い少女に服の選別を手伝つてもらつて出かけていく。そんなほのぼのとした光景が浮かぶ。

「どうしたの？」

牙城のようこの抑揚のない機械的なところ…それも彼女に酷似していた。

「いや…なんでもない。」

朝日が差し込みだした。竜の影かそれとも彼女のせいかおぼろげな…儚い姿を俺に見せる。見えたのは硝子の心。自分を封じた水晶。どうこうことだ?

「そりそろか。」

時間はあつといつ間に経過する。黒いゲートを開きアクロスを呼び出す。そして彼は彼女に瓶に詰められた青い液体を渡した。

「いいが、この薬を飲み物に混ぜるんだ。そして飲ませたら、これを湖でもどこでもいい。水がある場所へ入れろ。最悪、風呂でも構わん。いいな?」

彼は青いガラス玉を彼女に託す……。

いいのか？あれは水属性の秘宝、水の宝珠……。

それを最後にゲートから一度と出でるのは無かつた。 タバサはただ瓶を抱きしめてお礼を一つ。

「ありがとう。」

俺に向かつて言われてもね……。

「気にするな。 したかつたからやつただけだ。」

ウイングリーハンは去り朝日が部屋を覗く。 今日も訓練はなしでいいか。

見上げた空は暁。 黄昏の時とはまた違つ、美しい空の絵。 あつと……いいことがきょしありますよつこ……。

「王城なんて久しぶりだな。」

「こんなとこ来た」とあんのか?」

「ああ。質素な城も豪華な城も…どれも美しかった。この城も…外  
面的にはな。」

「外面的…」  
「…魂が腐ったにおい…特に豪華な部屋に近づ  
けば近づくほどひどく臭う…」

だが俺たちが向かう部屋からはそのにおいはしない。少し豪華  
な扉をくぐりその先に…。

「姫様!」

姫がそこにいた。近づき跪く。俺たちもそれに続く。

「おめでとう、ルイズ。貴方はもう立派な貴族ですよ。」

「そんなこと、ありません! 私はまだ爆発しか…」

「その力で私を助けてくれました。」

「まあ、主の爆発がなければメガラウスの角は破壊できなかつた。俺はあの時全員の全てを見ていたが、誰もあの角を破壊できなかつた。」

「貴方がたもフーケからよく宝物を取り返してくれましたね。本当にありがとうございます。」

姫は頭を下げ少年は照れ、少女が少し非難の目を向ける。

「先に進言したいことが…。」

「何でしじうか?」

「実は…」

ここでは才人だけがしつてている事実。異世界から来る魔物。その脅威を細部まで説明した。

「魔法でどうにかならないのですか?」

「無理ですね。例え、焼き尽くしても蘇る奴や、はなから攻撃を一部分以外まったく受け付けない奴だっていますから…。」

この世界の人々には共通して「魔法」=最強という方程式ができるいる。この方程式の根底にあるものは何なのか…知る必要がある。この世界にとらわれないものとして…。

俺の話は終わり次は姫からの頼み……。町での諜報活動。調度いいな、俺も街の散策をしたかつたところだ。この世界を知るのは自らの足で歩くのがよさそうだ。  
苦笑を隠しながら今後の展開を予測して笑う。安めの宿をとり、パンをかじりながら街を徘徊する…確かに変態か、不審者のどちらかだな。

「まず、 服を買い換えましょう。 才人は 現代の服だからいつか。」

互いの服を見てやはり目立つのは主の制服。 次に俺の黒ずくめの服。 最後に才人のパーカーだ。

「金は？」

「姫様から預かった400エキューがあるわ。」

今何て言った？ 主は…？ 金貨400枚を軽く言いすぎてなかつたか？

「才人、 買い物慣れしているか？」

このままルイズに金を持たせれば確実に金を全て失うことになりかねない。 やれやれ、 貴族のそばにはきつちりとした金の管理役は必要だな、 うん。 うろたえている才人を見て強引だが一つの方法をとるとした。

「主、私に少し考えがあります。20エキューを貸していただけませんか？」

20エキューがどのくらいの価値かは知らない。だが昔から金貨、銀貨、銅貨…この順で価値の高さが決まっていたはず。ならばこの金貨…20枚もあれば問題ないだろ？…

「分かつたわ。」

すぐに彼女は返答をしてくれた。

信頼を勝ち取るためにどんなことをしても真実と共に生きること…そのために俺はあの学院で貴族主義の貴族を徹底的に攻撃した。彼らにとつて俺は敵だろう。だが小数を滅ぼすことはたやすいことだ。魔法の使い方に疑問を持つ者と平民と主とその知り合いを見方に取り込めば怖いものは無い。

「才人、ルイズのために地味だが品のある服を選んできてくれ。俺には少し町を散策してくる。あとなんでもいいから花の刺繡をしてある奴がいいと個人的に思う。じゃあな。」

言いたいことは全て言つてその場から立ち去った。



町は大通りや人々が多く闊歩する小道などは余り「ゴミも散乱していなかつた。だが町外れに行けば行くほど腐敗臭と汚物の臭いが混合して人々の衣類はボロに成り果てていた。

「何だよ……これ……」

嗅覚を封じ町を歩く。地獄以上だった。こんな所は存在して

はならない。ふざけるな……これが何時の時代にも存在する物なのか？

「ニク……ハラヘッタ……」

ボロを纏つた男が目の前に一人。ガリガリに痩せぐぢやぐぢやに伸びた体毛。目の奥に潜む殺意。

「お前、何者だ？」

「ニク！－！」

近くに積まれたレンガを握り走つてくる。獣だ。ただの動物だ。その瞳は殺す事しか知らず、本能だけで生きていた。狭い路地で無ければ無用な争いを避けるため逃げていった所だが……仕方ないか。鞘を振る。暗い路地の闇に潜んだ黒光りの凶器が本領を発揮する。中世でも地球でもこんな感じなのだろうか……知性を持つ人間の本性は……。

バキーン！－！

レンガを破壊する。一度蹴りこみ50cmは下がらせた。

俺はただこの命を絶つ事を決めた。これはもうヒトじゃない。  
人の姿をした生命体でしかない。

こいつが俺を殺そうとするのは生きる糧にするため。間違っていない。  
誰がライオンに食われるウサギを可哀相と思うだろう?  
それと同じ。

なら俺はこいつを殺そうとする理由はどんなものを並べても不當な物でしかない。

人間が生き物の理から外れていると履き違えているからか? だから俺も人間を殺すのか?

「どちらも愚か。」

ただ呟く。飛んできた拳をかわし、ガリガリに痩せた腹に膝蹴りを叩き込んだ。

グシャツ

膝が濡れた。 服も濡れた。 お腹も濡れた。 えぐり、 内臓を  
貫かれた体はドカンと音を立て倒れその瞳は焦点を失う。

だが驚くべき事は続いた。 子供だ。 曲がったフォークをもつ  
てあの男を引っ張つて行く。 。

一つ先で右に曲がって扉の音が聞こえた。

すばしつこい子供は

バタン！

それを5秒ほどでやつてのけた。  
嫌な予感が胸をよぎる。

頭の何処かで警笛を促す。

そして扉を開けた。

息を飲んだ。

イクナ　イクナ　イクナ

「へへへッ

子供のフォークが目玉をくり抜き子供は美味しいぞうにそれを咀嚼する。

グチュ、グチュ

その横で彼の父親だろうか、モジヤモジヤの手にかぶりつきその

指をかみ碎く。

吐き気を覚えた。ここまで酷い惨状は久しぶりだった。

別の男は腹から出てくる血を吸つた。そして…近くで犯されている女に口移しで血を与えていた。この女の両手両足は存在せず…見回せばそういう女が何人もいた。子供を孕める年齢…出産可能になる初潮を迎えるころの年齢からもつとも年をとつて40代…。そんな状態で子供を産み落としていた。女の末路は全てこうだつた。

慌て外に出て他の家に押し入る。女だ、女の山だ。腹を膨らませ誰の子供か分からない子供をいまにも産み落とそうとした。皆正氣は既に失い、ヨダレを垂れ流す。

飛び出す。今の光景が頭にこびりついてしまった。

殴り掛かる男を本気で蹴り飛ばす。何とも吹き飛ばす。俺はただこの地獄から離れた。この最悪の地獄から逃げ出した。

途中どこにかが町の端であることを森の存在を確認して知った。更にケモノ道が少し舗装されているように見えたのはきっと気のせいだ……

## 国を知る」と（後書き）

予測は当たつた。 無一文になつた俺たち。 今俺たちはさらなる現実を知る。 支えるものと支えられる者の違い。 労働者と雇い主。 奪うものと奪われるもの。 勝利者と敗北者。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
先駆ける死神

次回をお楽しみに。

## 先駆ける死神（前書き）

独自解釈というか……設定がよくわかつてないっていうか……色々おかしいと思いますので何かあれば感想で情報をください。

後次回は予定を変更をしてjironさんの指摘を受け書いた、主人の過去をもう少し詳しく書いていこうと思います。

## 先駆ける死神

あの地獄から出た直後俺はバブルスクリーム、バブルクリアよりも強力な洗浄魔法をかけた。 ずぶ濡れになつたのは町の汚点を滅ぼせなかつたから。 俺はある時ここを燃やし尽くすと言う判断が出来なかつた。

「二イチヤン、そこで何してんだ？」

屈強そうな男が一人。 俺に問い合わせた。

「ああ… ただ自分に呆れていた……。」

奴らの用はそんな事じゃない。 カツアゲだろうと予測がついていた。

「なあこゝ、俺らの縄張りなんだよ。 勝手に入つて来てただで帰れると思つてんのか？」

今… 鞘を振る気力は無かつた。 何時もの俺ではありえない行為をしだした。

「これで勘弁してくれ。」

金貨を一枚転がす。 調度もう一人の足元で止まる。

「「き、き、き、き、金貨！…？？」

「それが俺の全財産。 代わりと言つてもなんだが、この奥の事につ

いて教えてくれ。」

理性に対して理性を。本当にあこいつはいつも遙かにこの「」のつきの方がマシだと思った。

「ここは元々誰もいなかつたんだが、いつの間にかここに住み着いてな。臭くて臭くて誰も近寄らねえよ。ここも微妙に糞くせえしつだ女をただで犯れる場所なんだよ。ってわけでこじら縄張り」

「けどよ、俺らが入れるのはそこまで。その奥だとガチで殺される。」

そこまで話を聞いた後俺は彼らと別れた。後ろから襲撃する気配は無く、田はまだ汚点の町を照らしつづけていた。

「これはこいつですか？」

「合わせて30スクーだよ。」

「スウー？」

パン屋で俺は悩んでいた。お腹が減っていた訳ではない。ただ物価のルートを知りたかった。それに早く金貨から銀貨、銅貨に変換したかつたのだ。

「奥さん、俺これを一枚しか持つてないんですが。」

「き、き、き、き、金貨！？？」

そんなにこいつを持つていたら変か？ 不審に思い尋ねた。

そんなに金貨は珍しいのですか？

すると彼女は俺の中に招き入れこう切り出した。

「あんた、貴族かい？」

「いや、違う。」

彼女は語る。この町で金貨を使用する者は酒場や食事処を除けば貴族だけ。平民は貴族に逆らえない。だから金貨を使用した俺に驚いたのだと。更に彼女は俺に通貨の概念を教えてくれた。それによると銅貨ドーハが基本。銀貨はスウー。銅貨10枚分。金貨は一種類あり100と書いてあるのはエキュー。今俺が持っている金貨で一枚1000枚の銅貨に相当するらしい。また何も書いていない新しい金貨は75枚の銀貨に相当するとか……。

彼女は更にエキュー一枚を50枚の銀貨と10枚の銅貨。そして  
買ったパンを渡してくれた。

「ありがとうございます。」

「いいのよ。私セレーナ。あなたは?」

「ガルーム。」

「んじゃまた来てね。ガルーム。」

どこにでもいそうな少し太ったおばさん。だがまだ俺は知らない。  
この世界はまだ意思が存在すること……。  
また、腕の中にぎりしめた、ほかほかのパンをあの一人に届けた  
い。本気でそう思った。

二人を探し町中を駆けずり回つた。そして一人走る少年を見つけた。  
と言つかちゃんとルイズを見はつとけつての! 伝えてないけど。

「オ人!」

「ガルーム。つて何だよその、パン!」

質問が出てきたので回答する。

「俺が買つてきた。」

才人は片眉だけ少し上げ低く言い放つ。

「宿探してたんじゃねえのかよ？」

最初だけ少しおどけてみせた。重要なのは後半。彼女がお金にして無頓着な事を知る必要がある。出来れば働かせたいが……無理かな？

「してたさ。だがルイズの事だ。どうせ貴族の感覚で行動してゐに違いない。」

「それに……」

と続けてパンにかぶりつく。

「昼時を過ぎてるからな。まだ17エキュー残ってる。」

まだ温かいパンを彼に差し出す。

彼は噴水がある広場で腰を下ろし、はむつと口に頬張る。

「どうだ？」

「つまい。マルトーさんには申し訳ないけど、やつぱりうちの方が好きかな。」

調味料その他諸々はあるんだがパン五つのために瓶詰めの調味料を買つ気にはどうしてもなれなかつた。だが何もつけてないで食べるパンもまた中々の味だつた。

「ところで才人、ルイズはどうした。」

口を閉ざし、彼は口ごもる。結果は知つていた。何があつたか詳しい経緯に興味は無い。彼女がここにいない理由……俺は少しだけ安堵した。

「俺のせいだ。また余計な事を言つたから……」

最初の後悔。それでいい。いづれはこうなると分かつてゐた。

「それでいい。」

吹きゆく風は水を巻き上げ水は再び沈む。

「ありのままに接する。自分を正しく分析しあの未熟者と互いに導きあうんだ。」

真に知るべきは己が決して独りで無いこと。そして自分は一人であること。自分にとつての矛盾を理解すること。

「自分で今何をすべきかを考えろ。どうして、何故と自分で自問自答するんだ。いづれ答えは見えてくる。」

俺はそういつた後才人の頭を撫でた。彼は一瞬驚いた様子を見せたが何もせざされるがまま……。その顔だけは何かを必死に考えていた。そうみえた。

下手な言葉より手の方が思ひは伝わるのだと、それがいいとただ願つた。

結局ルイズを見つけたのは無一文になつて帰つてきた後だった。

「カジノで全部スッた！？」

「仕方ない。夜は町を出て野宿だな。」

「そんなん！ 私嫌よ……」

ルイズ、お前は駄目だ……！ お前の無責任な行動がこの結果を招いたと知れ！！！

怒りでぐちゃぐちゃになつた頭に水を当て冷やす。 その時誰かが声をかけた。

「綺麗な顔立ちだわ～見たところお困りのようだけど、どうしたの

かしら？」

薄手のシャツとパンツを身につけた人間がそこに立っていた。なんだ、このオカマは……

「ボン、ジユール。見てのとおり私は怪しいものではありません。」

「いや、見るからにと言われても……」

くるくる回転しタップを踏むように移動し近づいてきた。すまないが俺には生理的にあわないのだが……。近づいたのが才人でよかつた……。

「私の名はスカラロン。この奥で宿を営んでる～の。」

「宿！？」

その言葉に飛びつく。だが才人、お前の世界でこういっやり口を経験した事は無いのか？

「そう。ただし条件が一つだけ。」

ルイズを指差すスカラロン。ああこりや……間違いないなさそうだな

……。

『魅惑の妖精亭』 碎けていえばお触り有りのキャバクラみたいなものか。（正直、キャバクラについて詳しく知るわけではないが

……）

「スカロン店長。」

「あの子達の話を聞か無かつたの～～！？」

彼…はスカロンと店の中で呼ばれるのを嫌う。故に呼ぶ時の名前  
は…

「失礼、ミ・マドワーゼル。」

「ん～。で、何？」

「料理の腕には僅かながらに自信があります。 私に厨房の器具を  
貸していただけますか？」

「うーん…OK！ いいわ。あたしの舌を唸らせたらお客様にだし  
なさい。」

「はい！」

結論から言つと合格。 素早さ、調味料の合せ… 全てにおいて  
ミスが無く大量に作り出した料理は安く提供されていった。  
意外に好評だった。 出来ることは手を抜かず、ただ走る。

「ふう…」

女の子が働いている姿は俺にある影を浮かべさせた。 その存在を浮かばせた。

そのせいだらうか、動きが遅くなり店の管理を任せられている少女に指摘された。

「ガルーム、手が止まってるわよー！」

「すいません。」

「どした？」

「いや……少し考え事だ。」

俺の顔を見てジェシカが言った。 何かを感じ取ったのだろう。

「女の子の事?」

「ええ~! ガルームが! ?

「ひ~。俺の事なんだと思つてるんだ?」

そんな時厨房まで聞こえる悲鳴があがつた。

「お客様！ それ以上は困ります……」

「何だ！？ ここは触つてもいいんだろ！…？」

怒鳴り声を聞き少し顔を出すと今日会ったごろつきの片方が娘の胸を少し触るのではなくまさぐつていた。

「お客様、当店ではもっと揺れ「引っ込んでろ！」

スカロンが鳩尾への一撃を避けたが……

「ゴツッチン！！」

変な効果音と共に頭の上に星を出した。

「ガツハハハハ！…！」

下品な笑い声と同時に一人の旅人が入店して來た。

「ふつ。」

なんだ…これ？ 今店の雰囲気が確かに変わった。

旅人はゆっくり中へ空いている席はあのごろつきの隣のみ。 纏つたロープからブーツを見せると……男が転んだ。

わざと足を見せ一気に放った回し蹴り。 すごい速さなので何が起

こつたか分からぬ。女の子はすぐ逃げ出した。他の女の子が一人、その娘の対応に当たる……。

「あら、失礼……そこのは白いワインペースのお嬢ちゃん……ワインを……食べ物を……たっぷり持つてきな。」

口が閉じる度に異なる口調でルイズに注文する。慌てるルイズにボトルワインとグラスを渡す。

「落ち着いて……肩を下ろして、頑張っていい。ルイズ。」

「…………うん。」

まず中央にワインをトンと置く。続いてグラスを渡す。

「ありがとう。座つて。」

顔を隠した女の前に座る。彼女はフードの中で声をださずに笑う。彼女はローブの中から一つの袋を出した。

「ゲームをしましようか。」

「ゲーム? どんな?」

「私はこれから貴方にチップを払うわ。10枚の銀貨。」

「チップ?」

彼女との会話を聞きながら野菜を炒める。調味料と共に搔き交ぜた。

「そして私も銀貨10枚をかける。 貴方が私とのゲームで勝ち続ければ貴方のチップは20枚になるわ。」

ゲームの中身を言わずに女はルイズをゲームに勧誘する。  
俺は炒めた野菜を皿によそり、細く切った卵焼きと厚切りロースを周りに撒く。 最後にトマトの汁を上にかけた。

「いいわ。」

今は半ば守銭奴と化したルイズはそのゲームに乗ってしまった。

「ルールは簡単よ……カードを決められたペアに揃えればいいんだからね。 ……まず私がやってみせるわ。」

「そう……ポーカー……ある意味有名な博打。 素早くカードを切り上から五枚カードを引いた。

「そして自分の好きなカードを山と違つ所に置いて、また五枚になるように引く……物は試し、さあっ…やってみよー！」

俺は箸も皿固まつた中、彼女の右に野菜炒めを置く。 彼女は……俺を見てウインクを一つ。 慌て厨房に戻った。

「出来ればカルボナーラが食べたいなーーー！」

「ジエシカ、カルボナーラって解るか?」

「あたしは知らない料理だけど……」

なっ！？ この時代にカルボナーラは存在しない。ということはこの  
いつは俺や才人と同じ、現代を知る者……！  
しかも……カルボナーラは……。

「ふふふ、さあ小さなお姫様、私との舞遊を始めましょうっ！」

「くつ……あの女……！」

「ガルーム、作れるのか？」

「……ベーコンとチーズ、卵があるし……パスタはある。 20分  
あれば……。」

このあと俺は一人のゲーム中継を聞きながら料理を作りつけた。  
途中でごろつきも自腹で交えた。

そして最終戦……

現在ルイズ、銀貨4枚、女金貨一枚、ごろつき銀貨7枚。 それ  
にごろつきは金貨をちらつかせる。 一番まずいのはルイズだ。掛  
け金的に釣り合いが取れていない。 女が、ルイズを庇いながらゲ  
ームを続けていた。  
ルイズは本当に金運がないのがもな……。

「ゲフフ、全掛けW」

「 もうダメかな……」

「 お嬢ちゃん、私にチップを貸してもいいえる? 」

再びウインクをルイズにしていた。……と思ひ。そつとチップを女に渡した。

「 勝負よ……ゲスが、覚悟なさい……地獄墮ちる覚悟は出来た? ……恐怖の世界に落としてあげる……あんたの全て貫いてあ・げ・る……精神まで凍てつかせるわ……女の子を虜めた罷よ……その罷……私が……私達が断罪してあげる! ! ! 」

勢いよく引いた五枚を見ずに、扇のよつに広げ見せ付けた。直後上がる驚きの声。

「 ちよつと待て、そいつは……」

「 私の勝ちよ、ロイヤルストレートフラッシュ。」

スペードの 10 J Q K A、ポーカーの中で最強のカードを一回で引き当てた。顔を青くして金をかき集めようとする。直後女どじつけが消えた。

ドカ バキ グシャ

不穏な音が店に聞こえる。 調度カルボナーラの盛り付けが終わった。 故に外に出るとそこには ○レズの格好をした成れの果てが……。 あまりの滑稽さに口元に手を添え苦笑した。

「女の子に不埒な真似してただすむとは思わないことねーーー！」

喝采、特に店の子からその女は受けていた。 そして今後は空いていた席に戻り俺のカルボナーラを一口…

「……相変わらずの味ね。 ガルーム。」

カルボナーラは俺にとつてある人達だけにしか出さない…思い出の料理。 もし他の奴らなら俺は常に炭化させたパスタを出すため…誰も作らせない。 作りたくない。 彼女達以外には……故に俺のカルボナーラを注文する……彼女達が一つになつた姿だと気づけた。 彼女の名は……

「……全く、いきなり来たからびっくりしたよ、佐貴子。」

白木 佐貴子。

「驚かないのね。 ちょっとショック。」

言葉と顔は一致していない。 俺も……この世界で再開出来た事だけをうれしいと思う。

「どうやって来たとかは聞かない。 来てくれてサンキューな、皆

……

才人達は俺達の会話に首を傾げ俺達だけは笑みを浮かべた。

色々と嘘を取り混ぜた見苦しい言い訳の後彼女は一旦帰つていった。

そして夜、つまりは現在に至る。あのあと普通の、下心丸だし、欲望丸だしの男共の接待に毎回の如くブチ切れてしまい、少しだけ早めに寝室になる屋根裏部屋に案内してもらった。まあ…金の無い俺達に良くここまでしてくれたと俺は感謝しているが。

「何で公爵家の娘が……あ、あ、あんな…あんな…」

ルイズはあれからずっと文句をぶつぶつ言っていた。自分の責任だと分かっているのか？

「はいはい。」

才人は彼女を宥めた後すぐに自分の毛布に包まった。

「あなたはいいわよ、女のトピックでしゃべり合ってね。」

少やく恨み言を吐き捨てる。部屋の温度が何度も低下したうな肌寒さを覚えた。 くだらねえ……！

「ルイズ、今何をすべきかを考える。 目的のために何をするか、手段がどんなに嫌でもやらなければ姫への裏切りだと思え。」

睨みつけた顔はすでに布団の中。 全くまだ子供だな……。

夜中、輝く星々。 太陽に替わりて世界を照らす双月。

風の渴いた音が聞こえた。 静かな寝息だけが聞こえた。  
徐々に静まり返り聞こえてきたのは木の悲鳴。 板が軋む音。  
大きくなりつつあるそれは死神を連想させる。  
近づく音に目だけを開き一人を見る。

「起きているか、二人とも。」

「…ああ。」

「んーー。」

意識があればそれでいい。 まずは才人を起こす。 頬を叩き無理矢  
理覚醒させた。

「何だよ……」

「いいから、ルイズの布団に入れ。 早く。」

次にルイズを起こす。

「何よ、バカ！」

「緊急事態だ、殺し屋と思われる。 すぐに才人をベッドの中に入  
れろ。早く！」

「ええ！？」

自分の処理能力を越えた発言に完全に彼女は硬直した。その間に才人は自分の毛布を持つてベッドで小さく横になる。

「声を出すなよ。」

近づくのは確かに闇の気配。例えるなら……血に濡れた斬首台。獄炎の刃。果ての無い深い闇。荒野に響く鎮静歌。深き湖の水压。浅瀬に沈む船。森に潜んだ牙。生き物を誘い喰らう花。吹雪が常に吹き荒れる山。大空から飛来する銳爪。

「……ふう。」

黒光りの鞘からゆっくり純白の剣を引き抜く。鞘を足元に置き敵の行動を待つ。

そして扉が少し押された直後に左手で下がりながら扉を開き、右腕は真っ直ぐ首元に伸びた。

俺も腕が鈍ったな。

俺の背中には黒光りの鞘より黒くまがましい鎌があった。

「この鎌の力は良く知っている。

死神の大鎌。怨靈を引き裂く魂狩りの大鎌。これを振り回せ  
るのはこの世を統治する神に仕える天使達のみ。ならばその正体  
は……。

「襲撃者の正体なんて最初から予測できてるっての。わざわざめ  
んどくさい方法をとるな、佐貴子。」

「面白くな~い。」

「こつちは大迷惑だつての！ ガチだつたらまずいかりどりすんだ  
よ！ 僕しかこいつら守れな『うるさい。』

手で自分を指しこいつらを指そつとしたところでそう言わた。

正論だから口を閉じた。扉は閉められ、彼女はフードを外した。

月明かりで明かされた顔は俺だけが知っている大切な人。

## 先駆ける死神（後書き）

再び出会えた大切な人。 彼女らの言葉が俺の過去への扉を開く…。  
本当の悪魔の物語。 それを知るものが俺をどう見るのが…。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
悪夢の翼

次回をお楽しみに。

「まあ紹介する。彼は平賀才人。彼女がルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。」

「才人君とルイズちゃんね。よろしく……」の子達が今のガルームの主なの？」

途中から不快感をあらわに一人を睨みつけだす。

「そ、そりよ！」

「まあ俺はガルームと同じ使い魔だけど。」

彼らは自らの境遇を語り睨んできた彼女に頷いて返答した。

「…そり。貴方達、質問があれば受け付けるけど?」

…俺の聞き違いか?

「おい…どうこうつもりだ?」

「まだ自己紹介しないからついでに話しあおうと思つて。」

「…もういい、分離しろ。そっちの方が話がしやすい。」

「どうこう」と?」

「…こいつは俺と同じく人間じゃない。しかも一人じゃない。」

それと同時に彼女の姿が朧げに霞み月明かりは彼女の影を増やしていく。髪型もバラバラに背の高さも変わり体が別れていく。そして一人が唖然とするなか十人の女がそこにいた。

彼女らは自分のプロフィールを語る…

ソード

黒髪で褐色の肌をした女性。蝙蝠の翼を持ち死神の大鎌を使役する、死者の番人。

平時はおどろおどろとした気配は無く、優しい笑みを今も浮かべている。おどろおどろと言うが死神の雰囲気と言うのはそんなものらしい……。わつきの奇襲の時から感じていたとか。

「まあ」こんな所かしら。質問は?」

「えつと……一ヒ……」

才人…………!! そんなに破廉恥にも巨大な脂肪の塊を凝視するな……!

ギリギリ…

「ガルーム…歯が折れるよ。」

ソードの指摘でようやく自分が歯をかみ砕く勢いで歯ぎしりしていた事を知った。何でこんなに腹がたつんだ……？

「で、なんだ才人……？」

冷え切つた声が寒い部屋こだました。

「…何でもありません。」

「じゃあ次。メガラ、よろしく。」

メガラ

赤髪に白色の肌、才人にとっては…そうだな外人…うん、この表現がしつくりくるのかもしない。

夢見の精靈、キュバス族の一体で以前はクイーンと呼ばれるほどその力、幻術は強く誰にも引けをとらない。

「ううう。」

ルイズはそのプロモーションの良さに啞然とし声を上げている。  
魅惑の魔法がかかつて訳ではないはずなのに調つた体は魅了の娘  
で、淫らな大人の女の気配を出していた。

「そう言えばガルームってどんな人なの？ 正直よく分からぬ言

動してゐるし……」「

ルイズの発言に全員がジロツとこちらを見る。ああ、またか。何やつてんだか。と非難の言葉だけが頭をかすめた。

「……」

黙り込むしかない。下手な言葉を呴けば……叩き潰されるのは確かだ。

「ルイズちゃん、後で聞くからこいつが来てからの出来事、全部思い出しどいて。じゃあ次はアヤ、よろしく。」

「はーい。」

「ちい姉様?」

「あれ? 声が似てる?」

ちい姉様と言うのが誰だかは知らない。ただ彼女はその人とアヤの気配が似てると言つた。

アヤ

同じく夢見の精霊の一体だが、聖属性を強く受け継ぐ天使の羽を持つ悪魔。

能力は平均して低く体術、幻術も苦手。ただし相手を眠らせる事に関して言えば特化しており異世界の睡眠魔法を合わせた『ダウン・エア』と呼ばれる強制睡眠魔法を得意技として扱う。

聖属性魔法も使用可能でこの世界には奇異な存在である。

「眠らせる事と料理は得意なの。 よろしくね。」

笑顔がよく映える女性。 彼女を一言で表すならそんな感じだ。

「次はあたしだ。」

力ナ

人型ワイバーンで炎の剣操る残忍な女戦士。 音楽や音において彼女を越える者はいない。 故に暗殺者にとつて彼女は天敵である。 どんなに存在を隠そうとしても彼女の耳から決して逃れることはできないから。

十人の中ではトップクラスの戦闘力を誇る。 若干ヤンデレがかつておりどんな悪事も目的のためには全うするリアリスト。

「本当の彼女はただの女なんだけどな…」

「ふん。」

自分のプロフィールを何時もより悪く語るのでつい、補足をしてしまう。 彼女はそっぽを向いた。 数秒たつて彼女は言つ。

「ガルームがあんたらを認めたならあたしはあんた達を助ける。 質問は？」

首を振る一人。 面倒臭さげに言つ彼女。 質問らしい質問を彼女

は寄せ付けていない。さつき俺が才人を睨んで以来彼もろくでも無いことを質問していない。

「リリコ後よろしく。」

言葉少なく相当背が高い女性に変わる。深緑色の髪を払い彼女は言った。

リリコ

毒蛇女。<sup>ラニア</sup>それが彼女の知られないようにしてきた真の姿。

上半身の変化は僅かに鋭くなる牙。下半身は樹海と同じ色。

冷たくすべすべした蛇の皮。

身に大地の加護を持ち、僅かな土を使役し物体の素材と形を変化させる力を持つ。

「だからこんなのは作つてみたんだけど。」

完成したのはルイズの人形。

「やっぱり可愛いわよ。」

「……」

自分より遥かに大きい巨人のような圧迫感を覚えるのにそつと這つた彼女の手が優しくて、複雑な色を瞳は映していた。

「さてと、後五人ね。」

「まあ個性が強い連中だから直ぐに覚えるわ。ユキナ、頼む。」

真っ白なカーディガンを羽織った女は頷き氷の椅子に腰を下ろす。凝視すれば見えるかもしない、短めのスカートを履いていた。

「…ユキナ、少し卑猥じゃないか？」

「ううん、気分！ 今日はミースカをしてたい気分なの。」

## ユキナ

雪女。そこからユキナと安直な名前だが、本来は雪の中でも育つ雪菜の名を取ってきたと言つ。

雪の精靈のため得意とする魔法はもちろん氷の魔法。 大気中の水分を一瞬で氷結させ多くの氷の道具を生成する。

奥義にダイヤモンドダスト。 雪山の暁。 朝日が氷を反射し鋭く尖った刃が生まれる。 その刃を一斉召喚し総発射、敵を凍結させる。

「冷たいつすか？」

「ううーん… 温度は25度くらいかな。 私、雪女だけど寒いの嫌いだから。」

苦笑した。 誰もが考える常識は人間には…通用しないのかもしれない。

「ひんやりしてますね。 夏だったら最高なんだけどなー。」

「海か… ユキナ、もういいか？」

「いいよ。海の話も出たし次はやつぱテティかな。」

「これまたひらひらなミニスカをはいた。貝殻でできたピアスをつけた女性。

「ですよね～。」

テティ

人魚の一族に属する者。回復と吸收の魔法を得意とする。

水泳が得意。当たり前。潜水が得意。当たり前。魚釣りは苦手です。

「素手で捕まえるなら出来るんだけどな～。」

「そりゃ当たり前だ。」

楽しい事は大好き。特に勝負事は大好き。勝つたらもうひとつ嬉しいけど負けても楽しめたんだからそれでいいらしい。

ただし不正や騙す奴は大嫌い。そんな奴らは水鉄砲で星に（そのくらい吹き飛ぶ。）する。具体例を言えば今日のじゅつきと彼女が一瞬で消えたのは彼女の力を使用したためらしい。

「じゃあ次は…。」

「私でいい?」

アンナ

翼人種、ハーピーの一體。本来の姿に戻ると翼と腕が一体化し、足が鉤爪に変化する。翼から打ち出す風の最大威力は町一つを吹き飛ばすほど強力。ただしそのようなエネルギーを出す場合相当な集中力要するため、普段は発動することができない。

10人の中で情報の伝達係をしており、いつの間にか多くの情報を入手してしまった幸運を持つ。

「ふーん。」

「あのな、こいつがいるおかげでいろいろと役に立つんだぞ。」

「なんか、地味。」

「ルイズ、ちゃん？ ちょっと本氣出していいかな？」

彼女が手を大きく広げ、あおきする。それだけで彼女に猛烈な風が押し寄せた。

「地味なのは認める。だけど私だってできることがあるの。それがだけは忘れないで。貴方を倒すことぐらい造作もないことよ。叱るのは結構だが……。

「ルイズ、アンナ。互いにそのくらいにしぃ。」

「だけど……。」

「全員に言つておく。俺たちはなすべきことがあるからここにいるんだ。スミレ、ディーネ自ら紹介をしてくれ。」

「うん。」

「分かったわ。」

スミレ

魔草アルラウネ 花の下半身と女性の上半身を持つ植物族に所属する魔物。彼女の場合薙草がモチーフにされている。伝承で伝わるような姿は無く全身に薙と花で身を包んだ人型。毒と植物の鞭で連激を繰り出す。

植物の力を扱い他を癒すことも大地の力を浸食して奪い去ることもできる。もちろん逆に大地を癒し花畠を作り出すことも可能。

「まあ、こんな感じね。」

指パツチン一つでカーネーションの花束を出し、彼女に渡した。

「本物だ。こんなもの見たことない。」

「似たようなのはガルームがやつてたのよな。」

「ふーん。色々貴方もやつてるのね。」

ディーネが小突いてきたのでキッと睨み返した。

「さて、ラストは私が。」

### ディーネ

水の精霊ウインディーネ。水の全てを操る4大精霊の一族の人。一応言つておくが水の全てを操るというのは形容ではない。生き物の体内の水すべてをコントロールし、気に入らなければその場抹殺するほどを持つ。

「怖くない？ その人たち。」

「人はいいんだけどな。 ただ、怒らせるなよ。 こいつらの本気出したら、俺は止められない。 俺はこいつらには勝てないんだ。 ある装備のせいで俺の全ての力が封じられる。」

ディーネは続きを話すのか咳払いして俺の力を封じるアイテムを出した。

「これよ。 私たち全員が持つてる。」

それはただのハート形のネックレス。 ただ戦闘中それをかざせば世界の創世の神の力が解き放たれる…。

「特に趣味なんてないしな~何かあったつけ?」

「うへへん… そうだ、ディーネは医師の資格を持ってなかつた?」

「それ以外……あー。」

彼女の趣味というわけではないが、彼女は色々と薬を作るのが得意で、ほとんどその場で適した薬を作ることができる。そんな特技がある。

「モンモランシーと同じ特技か。」

「誰？」

「ルイズが通っている学院の生徒の一人だ。さてお開きに！」

立ち上がり、とした直後に薦が足を縛つて転ばせて、そのまま水が出てきて急に凍るつてどういう冗談だよ？ もちろん彼らのしたことだ。

「まだ寝ないでよ。 ルイズちゃん達からあんたが今までしてきたことをぱちり聞いてあげる。」

目が座りますよ、アンナさん。いや……ほぼ全員だ。

「まあ、自業自得？」

アヤ俺が一体何をしたってんだ……。

彼らは俺のしてきたことをほとんど間違いなくすべてを彼らに話した。俺が生徒を傷つけたこと、危険なシヨーをしたこと、盗族とたたかったこと、そして彼らを励ましたこと…。

「…………またか……。」「…………」

なんだこのシンクロ率の高さな?

「分かつた。」

何が分かつたんだ? カナ…。

「ガルームの過去…話してあげる。」

「止める! メガラ! …!」

「誰か、猿轡もつけて。」

「何! ?」

口が固まつた…水が固まつて…喋れない。しかも田の前にあのペンダント置いていきやがつた。 魔法が使えない…。

「いい。 一人とも。これは誰も信じることができなかつたある男の物語よ。」



そのもの、大空より落ちてきた。記憶を失い、何をすべきか分からず、ただの人形となつて彼は生きた。彼自身の意識が生まれたのは今から10年前。彼は人と他種族との共存を否定し、人間そのものを無にしようと考えていた七大竜王と戦いそれまでの自分を失つた。

意識そのものが生まれ変わり、彼がしたことは彼らの信用を得ることだった。自分ができることを。ただ黙々と働き続けた。人間にしては超が三つ着くくらい重大できつい仕事。魂胆は見え見えだつたのにその姿はそんな気持ち一つなく、ただ誰かのためになりたいと、その後ろ姿はそれだけを訴え続けた。

彼にまつわるエピソードは三つ。一つ、彼の出生と身体の変化の話。

彼は人間にしては強靭すぎるほどの力を得た。調べればそれは原初の魔法、『禁術』封印されていた書物を読んだ覚えもない。がその書物を彼は自分の脳の中に収めてしまつていたのだ。その力に気付いたのは会得してからさらに先：魔界で起きたある事件がきっかけだった。

それこそ、キュバス族の出会い。女だけの城の主は世界統一のための会議に出席を拒んだ。魔界統一：争いばかりの世界をようやく平穏へと導くためにはありとあらゆる種族につながりを持たせなければならなかつた。だが争いの間に起きるのは生きるための

権利を踏みにじる行為ばかり。特に女たちは。

「ねえ、それって…。」

「戦争で一番不足するのは戦士と食糧なの。戦い慣れしない女は…皆…。」

メガラが唇をかみしめる。この中でその惨劇を見たのは彼女だけ。親や友がめちゃくちゃに蹂躪されていく。瓦礫の下、彼女は見つからぬように小さくなつて震え続けた。

「話を戻すわ。」

故の拒絕。彼は怒りに震えた。一度とそのような戦争を回避するための会合なのに、どうして分かりあおうとしないと訴えついにキレた。彼は言った。「ならば破壊する。この城も、お前らも全て。平和のための異分子だ。」そう言いきつた。分かれあおうとしない、ならば切り捨てる。いずれ多くの生き物が死ぬ前に片方を切り捨てようと彼は剣をふるつた。全て彼の独断。だから止めようとしたものも怒りに狂っていた彼には届かない。そこで初めて彼の怒りが禁術の闇の力を引き出し闇の残光を放つ技を会得してしまった。彼は魔力の暴走のため力尽き、その場にいたものが死ぬことは無かつた。

だがこの後彼が異世界へ旅立ち多くの廻つているうちに彼の出生の秘密が明らかになつた。

彼の正体…ある一つの世界が疫病によってすべての生き物の繁殖能力が劇的に低下。もちろん人間もその病魔から逃れることはできず、人間が絶滅するかもしない。多くの生き物が普通に生きているのにこれ以上の子孫が残せず絶滅していった。そこで

人々は最後の賭けとしてクローンを作ることにした。病魔が発生する前の時代の遺伝子を使い多くの科学者がこの実験に参加したりとあらゆる技術を持つてこのプロジェクトに取り組んだ。並行して病魔に対する薬も研究された。

そのプロジェクトの果て、研究が始まつて50年、人間の人口が六十億人からわずか一億人を切つたところで初めて成功体が生まれた。しかしそれは信じられないことだつた。その受精卵は決して発生するはずがなかつたのだ。理由は一つ。その受精卵に使われていたのは今まで存在していたありとあらゆるDNAを無理矢理配合させて作った卵だつたからだ。だがその受精卵はプロジェクトに大きく貢献し人類はようやく十億人を超える勢いで回復し始めた。

「ガルーム、もしかして…。」

「もしかしてでもないだろ。お前の予測通り。俺はその受精卵からできた…いわば混合生命体なんだよ。」

「じゃあ、自分が悪魔・化け物つて言つたのはこのため?」

このやり取りを彼は何度聞いただらうか?あきらめて仰向けて転がる彼の瞳は閉じていた。

## 二つ目…彼の裏切りの話

彼は多くの世界をめぐりそれぞの世界の最強の騎士団を作ろうとしていた。そのチームに種族は関係なく、そのチームに一切の敗北は許されない。だが世界は多すぎた。それぞれの世界を防衛しているだけではすべての世界を守れない。ならばどうするか、

その答えは一つだけだった。自分自身存在を許されないダークネスと同じと考え始めていたから、そのチームを飛び出し単身内部に潜入した。表向には彼らを裏切ったのだ。どれだけ失望させたかその答えは彼自身よく知っている。そのうえで彼はそのような決断をした。

「嘘だろ、じゃあお前が俺に『どんな日本』って聞いたのは、お前がアニメの世界を？」

「やうじことだ。」

「ガルーム、いいよね？」

「ああ。構わない。」

その言葉は小やくの部屋に聞こえた。

### 三つ目 ガルームの罪。

彼が行つた大罪は三つ。

一つダークネスには殺した者たちを乗つ取る力がある。今では生きていても乗つ取る力を持つているがそれは蛇足だ。多くの世界が闇に沈んだ。地獄に変わった。このままではさうに多くの世界が滅んでしまう。そこで…全力を持ってそれら107の世界を滅ぼした。一振りに飛んだ闇の力。まるで地球を肉団子のように食い尽くし、後には何も残らなかつた。この時戦いではない、自分の意思で、自分の行ったことが原因で無関係の者たちを巻き込んで殺してしまつた。

一つ目。彼はこの戦いを裏側を知つた。未だ口を開かないか

らどんなことがあったのかは彼女たちは知らなかつた。 結果だけを知つている。 多くの世界に厄災を振りまいた。 ある世界では突如隕石が落下し主要の街を焼いた。 他の世界では天変地異が起り多くの生き物が巻き込まれた。 全部死んだ。 山が割れ海が崩れ川が消えた。 この時約六十六兆人が死んだ。 生き物もどのくらい滅んだか分からぬ。

最後これがガルームのもつともな罪である。 自らを暗黒執行者と呼び一つの世界で全ての重罪人を、全ての支配者を、全てのテロリストを、全ての反逆者を、人間の大半を亡き者にしたこと。 一つ目の違いは一つだけ。 ダークネスに支配されているかいないか。そして究極の騎士団の誓いとして人々を守る…その誓いを自ら破つた。 神は彼を許さなかつた。 だがそれでも彼は立ち上がり裁きを受けても決して死ぬことができない体は最終的に自らの剣で己を貫き立ち上がつた。

「マジ?」

「じゃあ、ガルームつてもう死んでるの?」

「何度も死んで生きかえつてる。 言つただろ俺は人間じゃない。全て仕組まれ、創造主も俺を殺さず俺を治すことに専念させるほどだ。」

その罪の果て、彼は自分の心を壊してしまつた。 「ううん、一つ目の罪の時からずっと心を傷つけてそして壊れてしまつた。 自分の許さず…人間も生き物も無関係に自らが滅ぶその時まで暴走し続ける悪魔として…だから私たちが彼を直さなくちゃいけなかつた。

最初に戻ってきた時…彼は独り部屋にこもつてしまつた。 元々何にもなくても…宇宙だろうが…深海でも生きられたから。

「もつこいだな。」のへりで。全員寝る。明日からまた仕事だ。」

誰もが心配していることすら忘れていたのにな.....。心休まる...そんなこともない。彼女らはやさしく締めくくった。

## 悪夢の翼（後書き）

悪魔の正体。それは運命に翻弄され続けた男。その強大な力と引き換えのように失った強い心。支えるものが現れるとき物語はさらに加速する。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
ほんの少しのきっかけ

次回をお楽しみに。

## ほんの少しのきっかけ（前書き）

一週間程度更新できずになってしまった…。そして書きあがつたのはほんの少しだけ。rzn

文章力のなさは分かっていたがストーリー構成までだんだん無茶苦茶になって来たぜ…。

## ほんの少しのきっかけ

「客多いわね。」

「ああ。」

アヤと俺で料理を大量に作り出す。今はリリコが午前中に大量に制作してくれたイス4脚付きのテーブルを三つ、追加しただけで全体の客が1・4倍増加。彼女たちは店の子のフォ

ローのみ。

本日早朝、曇りなき青空が広がる今日この頃。部屋ではダウン・エアでぐっすり眠る3人。皆はまた佐貴子の姿に戻ってしまった。目を閉じたのに眠れなかつた。ゆっくりと起

きて下に降りるとスカロンがまるで待つっていたかのようにウインクをしてきた。正直気持ち悪いです。彼には少し話がある。

「少しよろしいですか？」

起きてから少し迷つたが真実を彼に伝えることにした。ルイズの正体。才人と関係。後部屋に佐貴子がいることを。彼女の真実のことすら。

「王宮の間諜ね……」

「そういうことです。」「迷惑を、おかけするとはおもいますが…。

「

「いいのよ！ うちはそういう貴族のほうが好きよ。それに嫌な貴族と良い貴族ぐらいの区別はつくしね。」

手をフルフル振つておほほほと笑う彼。それと…人づけた一言は俺を驚かせ飲もうとしていた水をふいてしまつほどだった。

「ところで、あんた何股かけてるの？」

「けほっ！ けほっ！」

醜態をさらし後からやつてきたアンナにからかわれ二人に笑われ続けた。

「いらっしゃいませ！」

「今までの1・5倍は客が入るわね。」

そんなことをジェシカは口にする。まあ今まで20分で30人が45人になれば一時間で45人増加する。魅惑の妖精亭は夜中まで開いていることもある。ということは営業時間は現在の時間で言う午後5時から夜11時ごろまでが営業時間。単純計算で行けば $45 \times 6$ で270人。人大体安くて銀貨80枚、気前のいい客

なら金貨2枚。 利益は相当見込める…。

「こりゃしゃいます…」

営業の子が固まつた。 少し凶切りをつけ入口を見れば、豪華なマントを身に付けた猿のような男がいた。 しわは濃く、おそらく見かけ年齢が実際年齢より数年は上になっているだろう。 正直あまり顔がいいとはいえない。

「これはこれは、テグレシテマ様よつこそおこでくださいました。」

スカラロンが出迎える。 その表情はいつもより硬い気がした。

「今日は密だ。あと…また酒を持ってきてやつたぞ。」

紫…ワインか。 まあ仕事とはいえあそじまで不細工な男の酒を同席しなければならないのは女にとっては苦しみだろ。 まあ…仕方ないか。

「ねえ…」

ディーネ？ 彼女が面倒を見ている子は今あいつと同席か。 今同席しているメンバーは4人…その担当しているやつらは心配そうに端から見ていた。

「なんか…嫌な予感がしない？」

「…ああ。 だがお前がそう感じるんだ、警戒していいだろう。」

俺は…愚かだった。 どうして俺の感覚で全てを考えてしまったの

か、まともに話を聞いたことしなかつたことを……後悔した。

## ほんの少しのきっかけ（後書き）

俺は言った。 守るべき人は守れと。 だが俺は手を伸ばすことをやめた。 たとえ何が起きても戦場でしか俺はだれかを救えない。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
愚か者

次回をお楽しみに。

愚か者

「何？ 担当している子が辞めた？」

「ええ。 書置きだけ残してね。」

リコロが俺にやう言ひてきたのは午前中。ディーネ、アンナ、リリコ、カナ。

「あの子が辞めるなんてありえない……。」

カナはそう断言する。根拠は無かつた、でもそうとしか思えなかつたのだった。皆活潑ないい子だ。俺でもそう思うんだ。同姓の彼女たちなら余計に感じるだろうな。正直羨ましいよ。お前たちが、な。

「さて俺は食材を見て来る。お前ら街をぶらつこへよ。」

「ええ～ガルームが一緒ならまだしもな～」

テーブルに座つて足をばたつかせるアンナ。

「仕事がある。俺はここで戦わなければならぬ。貴族がこの店によく来るならば、俺は奴らを監視しそれを姫に伝える責務がな。」

振り返った後再び声がかかることは無かつた。

「三・マドワーゼル、昨日のワインはどうだ？」

「それなら、部屋の奥の貯蔵庫よ。」

間違いなく昨日の貴族が何か裏があるのは間違いない。これだがワイン臭の他に混じるかすかな匂い。これは何だ？これを飲んだからおかしくなったのか？調べなきゃ俺の手でこの街を歩いて。

「買い出し行つてきます！」

止まるわけにはいかない。俺が守るんだ。全てを…絶対に…

「あいつ、頑張るわね。」

「ジョン・シカさん、それは違うわ。」

ソードは彼女に言つ。彼はただ、強迫観念に突き動かされているだけだと。その言葉に彼女らは手を止める。あの男がそのような思いで動いているとは到底思えないのだ。

「多分あいつ、営業時間まで戻つてこないわね。」

「じゃあ、手伝つて。」

手を叩きみんなを引っ張つていぐ。

「そのポジション私だつたのにな。」

ジンシカはやれやれと自分にため息をついて、彼女たちを手伝いだした。その胸にわずかに残る苦しみを抱いたまま。

「いなか……。」

町中を練り歩き、パン屋とかいろいろ聞いて回つたのだが、どこにも有力な情報は無かつた。くそ……！ どうしてどこにもない？ あの子たちは……？

「なあ、デクレシテマのところに行くか？」

若い兵士は一人が話しかけている。デクレシテマ…昨日の野郎か。何故王宮の兵士がデクレシテマのところに行く必要性がある？

「失礼。」

「ん？」

「私はデクレシテマ様に手紙を預かりこの地へまいりました。ですがデクレシテマ様の職業も住居も知らない。申し訳ありませんが教えていただけませんか？」

よく、相変わらず無茶な嘘をつける……。胸の中にたつた一つの手

紙を今作りだした。

「…おまえどこの出身だ？」

「隣国の西、山奥の村の鍛冶屋。」

中途半端だがこれしか手がない。

「鍛冶屋の息子…？…デクレシテマ様は水のスクウェアメイジ。町の全権利を掌握しているお方だ。警備隊式の総隊長でもあられる。」

平民監査？ 平民を監視して、平民を守るための人って言つたとこらか。おそらく町の防衛の部隊のリーダー…あまり位は高くはないが防衛のかなめの人物であるのだろう。だから補助に長けている水メイジ…。

「で、手紙を見せる。」

「残念だが本人しか渡す予定は無い。それに炎り文字だ。読ませるか。」

「…場所はこの町をぬけて東側の森にある。」

「分かった。」

立ち去る兵士は舌打ちして去っていく。やはり分からぬ。

奴らが『テクレシテマ』のところにいたよ。何故だ？ 報告な  
担当者が行くだろう。あの二人は仕事帰りだった。なのに何故  
？

理由を推理してみようか。あの男たちはおそらくただの平民。  
しかも兵士としてはランクは下つ端……だと思うのだが。ならば私  
的なようか？ それとも上司の命令？ 前者ならばあそこに言つて  
得がある。ということになる。後者はまあ普通だがわざわざ二  
人で行く必要があるのか？ ……やはり前者か。ならこの世界  
の人間にはゲームは無い。遊戯と言えば体を使つた遊びはあるか  
もしれないが……大人にそんなこと……行きたければカジノもこの町に  
はある。後考えられるのは……。

「ガルームー！」

後ろから抱きつかれた。全く、どうして俺はこんなに近くにいる  
のに気付かなかつたんだ？

「なんだ、アンナ。」

「……『テクレシテマ』のところにいたよ。」

「そうか。さすがは俺の情報管理…最高だよ。ありがとう。  
これでけりをつけられる。あの酒に心神喪失の毒が混じっている  
はず。」

振り返ることなく、彼女は俺の胸に手を回す。その手を上から重ねた。

「ありがとう…。」

「ううん。どういたしまして。」

優しい光がそっと消えていく。ふと気が付くと周囲から白い田で見られていた。

「アンナ、こっちだ！」

彼女の手を引いて走る。「のまま変な田で見られ続けるのはしあくだ！ 右、また右、左…右、左、真っ直ぐ。

「ティーネには俺が伝えておく。変なことはするなよ。」

彼女は頷いてどこかへ去つて行った。大丈夫かな。念は押しておいたが……。

「あれ、ガルーム、彼女たちは？」

「いないんですか？」

「ええ。」

スカラロンが言うには彼女たちは仕込みだけやつた後全員で例の酒を見に言つたとか……ってまさか俺が知る前に奴らはもつ……

「どうしたんだ？」

才人が声をかけてくれたが……。

「才人、あいつらいつ消えた？」

「10分前くらいいかな？ 時計ないから分かんないけど。」

まさか……まさか……

「ほら！ 仕事しなさいよね！－！」

あこづら……。 仕事したらすぐ】……－－

「ああ－－」

自棄になつてその言葉を吐き捨てた。 待つてろ！ 俺が行くまで頼むから下手なことはするなよ！－－！

その日の料理は客にも娘にも少し首をかしげられてしまつた。

「くそ……どこだ？ 仕方ない……我が求めし物を映せ！ デビル・アイ！！」

瞳の奥に移る屋敷。そこまでの行き方は……よし！ 索敵魔法、デビル・アイ。悪魔の瞳で世界を見回す……。木々を蹴り、その一つの屋敷へ飛びまわる。

ドカーン！――！

土煙が上がりそこから黒い女が一人飛び出す。月光に照らされ女は黒い鎌を構え突進しました土煙が上がった。水柱が1kmはあるのにしつかりと見える。

「そこまでだ――――！」

開かれている門の上から扉を突き破り侵入した。体を横にしてシリルダーラックル。回転しながら衝撃を和らげ停止し上を見上げた。

「貴様、こいつらの仲間か？」

「まあそんなものだが、俺は質問しに来た。デクレシテマ！　お前が洗脳し誘拐してきた少女たちはどこのだ！！」

「ふん。」

彼はそれだけ言つと杖をこちらに向け氷結した氷の刃を早々に放つた。こんなの…。腕を一振りして払う。

「なつ？」

奴は驚愕の表情を浮かべたがそんなの想定内だ。だが聞いておきたいことはある。

「お前何故こんなことをした？」

「ふん… 幸せを『えるため』。 女にひとつなのな。」

まさか…。俺は奴らを見た。すでに本来の姿をさらしていたのだが… 見えていないのだろうか？ それとも…。  
眼中つて奴か？

「ガルーム！ こいつの女の幸せって…！」

予想はできているがこんな奴がまだ人の世にいたとは…いやあの腐敗の街を作ったのはこいつか？

「平民風情が貴族の子供をはらめるのだぞ。 性欲のはけ口にもなるしな。」

「貴様ああああっ…………！」

「…………！」

メガラがキレました。 ジャキンと爪がこすりあう音がした直後赤い髪の彼女は氷の弾丸をその爪で引き裂きながらその爪を引きたてた。氷が頬をかする。 それでもメガラはその男の心臓に鋭く伸びたサキュバスの爪をうちこんだ。

「…無駄だよ。 私には通用しないんだお。 それにしてもいい女だ。」

男の体はドロドロのアメーバのようなスライムのように変化した。スライムの体がメガラの腕をつかんで離さない。

「離しなさいよ…」

今度は俺が飛んだ。

「男に興味は無いよ。」

「あつたら困る。 波動波！」

これなら…波動を受けた奴はメガラの腕を離し吹っ飛んだ。 彼女をつかんで飛び皆のところに着地した。

「…貴様の心根にある、思いなど分かりはしない。 だが一つ言えることはある。 幸せというのは、誰もが当たり前のルールにのつたり誰ひとり己の自由を侵害されず、自分の命が滅ぶその時まで自分的人生を満喫できる…。 それが幸せってもんじやないのか？」

瓦礫の底から出てきても傷一つなかつた。 スライムのような軟体状の体なら当然か…。 ソードとテティ、ユキナと俺でメガラをつかんで離さない。

「これはとんでもない愚か者に出会つたな。」

「ああ、俺は気付けなかつた。 こいつらはもう真実にたどり着いていたといつのにな。 守るものさえも守れない、確かに愚か者だ。」

「

妙にかみ合わない言葉。 杖を大袈裟に振り彼は言葉を出した。

「貴族は魔法が使える。 すなわち我々貴族は神なのだ。 平民をどうしそうと我らの勝手じゃないのか？」

俺たちは固まつた。何を思いあがつてているのだ？人間風情がここまで思いあがつてているとは正直思わなかつた。

「ふ。」

カナ：？ 笑う理由などない気がするが…。

「あんた、神様なんかじゃない。」

すぐにはこの言葉に食いついた。声を荒げ、杖をカナに向けて氷の弾丸が彼女に降り注ぐ。

「何だと…？？？」

「だつて…。」

弾丸は彼女を期づつけることは無かつた。氷は熱に溶けてしまつたからだ。彼女は全身から高熱波を発し近づく氷を消し去つた。

「神様だつたら、私を殺せるもん。覚悟しな。お前はここで殺す。」

「私も同意見。」

「こんな奴いたつてしまつがないもん。」

「やうね…ほんと害虫よね。」

「世界にこんな『//』はこらないつてことよ。」

「うふ。 やつちやおつー。」

キレてしまっているメガラを押さえつけている俺とソードとティトイとコキナ以外は怒りの言葉を紡いだ。

「お前ら…殺すなよ。 あとはやめ助けてこい。」

再び散る。 後は俺たちだけだ。

「メガラ、容赦しなくていい。 こいつだけは絶対に許すな。」

「分かつてゐわ。」

「いいの?」

「ああ。 その代わり、ソード魂はお前が刈れ。」

ソードが心配そうに尋ねて来る。 本来は「法度だ。 姫様に頼まれたのはあくまで困らせる人を探すこと。 俺たちは人を殺そうとしている。」こつを口ロセセト。 俺の闇が訴える。 唇をかみしめ頭の叫びを押さえれる。

「いや… その前に裁ぐ。」

「ああ… 頭がぐらぐらしていく… 何なんだ？ くそ… 敵… そつだ。 敵の前なんだ…！ 待て敵か？ 本当に…。」

「テテイ。

頼みがある。

」

「?

「ぶつかってくれ。」

## 愚か者（後書き）

救われないものがいた。 何をしても救われない者たちがいた。  
苦しみに満ちた世界の中、一つの希望を俺は抱きしめた。 そして  
俺は……。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
人を知つて……  
次回をお楽しみに。

## 人を知つて…。（前書き）

更新期間を短くすると思いつきり文章内容が減りますね…情けない  
作者でごめんなさい。

ああ…地の文が書けない…。

人を知つて……。

「は？」

「頭冷やしたい。 水を。」

あきれたような声が聞こえた。

「……解。」

大量の水が滝のように降り注ぐ。 これでいい。 殺氣がむしゃくしゃしていた頭の中が澄んでいく……。

ふう…………デクレシテマ……。

「人は決して神になれない。 神になるには、人間をやめなればならない。 その果てにあるのは永遠の苦しみ。 永久に生き続けることの苦惱。 決して「口を幸せにできない現実。」

真実を伝えてもなお彼の魂から感じる傲慢さが無くなる」とはなかつた。

「それは貴様が平民だからだろう? われわれとは違うのだよ。」

違つ……本当の最強の男たちは知つている。 お前はただの……。

「愚か者だよ。」

「何?」

「聞こえなかつたか？ 愚か者と言つたんだ。 本当の英雄は最悪お前みたいなものじやない！ テティ！ エナジードレイン！！ メガラ、アタック！ ソード、ファイニッシュ！」

すでに頭の中にあつた計画を実行した。

「 「 「 「了解！…」」

一気に散る。 メガラが左に飛びづきづと跳びかかる合図を待つている。

「ふん！ くそアマともが…！」

さらに顔色が厳しくなつた。 …ぶちぎれて後俺にハツ当たりが来ないといいんだが……。 テティが降り注ぐ氷の雨にエメラルドの水をぶつけた。

「エナジードレイン！…」

「何だ…！？」

頭を押さえうめき声を出すデクレシテマ。 一人が同時に飛びかかつた。 奴の魔力は今完全に失われた。

「もつ… あんたは地獄の門の前にいるのよ…。」

「悪夢の中で死ね！…」

呪いと怒りの声が上がり俺の目の前で、罰を描くように交差した。 わずか一瞬されど一瞬。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！－！－！」

血が辺りに飛び散り海となす。  
ガラスと装飾品がすべて碎けた。  
崩れ降りると同時に当たりの窓

「お前、… お疲れさん。」

反応は無く肩がふるえていい。 相当いたえたのだわ。 なんて  
声をかければいい。 自分以外ならぱつて思いつぐのに自分のこと  
になると途端に何もできなくなる…くそ…。

「ねえ、ガルーム。

「なんだ？」

「私達…正しいのよね？ デクレシトマを殺す代わりにたくさんの女の子を救えたんだから…。」

違う。ここに正義は無い。 あるのは…欲望だけだ。 僕たちは苦しむ人々を救いたかつた。 生きているだけで毒をばらまく男を殺したいと思った。 だからやった。 そこに…正義は無い。

「……正しいか、正しくないかはこの先の未来しか知らないさ。」

そこに絶望の報告が来た。

「ガルーム。うわあああん！！！」

アンナが飛びついて胸に顔をうずめて、わんわん泣き出した。羽根で地下をさす。アンナを4人にまかせ、最下層へと向かった。蠅燭だけがかけられた壁、その中で壁が半分押されていた。

たいまつが5m感覚で置かれていた。相当暗いな。魂を…何だこの数、相當いるが人間にしては近すぎる。まるで抱き合つてゐるか無造作に置かれているかのように…

「誰か、いるか？」

息をのむ音と立ち上がる音。そしてガラスが割れる音…。

「ガルーム…？」

「なんだよあれ。」

「救えなかつた…私達の担当の子もあと一日遅かつたら、ああなつてた…。」

……なんで一度も地獄を見なきゃいけないんだ？ こいつらはどうしてこんな苦しみを味合わなくちゃいけないんだ？ 手が震える。なんで四肢が消えてるんだよ。そんな状態で

なんで生きてるんだよ…。あの地獄と一緒にだ…あそこもこんな感じだった。ここは清潔感が保たれてるけど…まるで人間を道具じやないか。慰め者にする…こんな、やり方で…。

「まるで…人間、自慰用具ね。」

カナがその事実を吐き捨てる。

カナでさえその残酷な真実に涙し、救える子だけ救い、残りを炎の海へ投げ捨てた。 彼女らの魂がもつとよき所へ転生できるように願いながら…。

「ただいま…。」

「ううん…出かけてたの？」

「ああ…。」

眠っている佐貴子が重い……。そつと彼女たちが自分で作ったベッドに横にした。また溢れていた涙をぬぐつた。こいつには……泣いてほしくなんか……。

「泣いてるの？」

「ルイズ、教えてくれ。貴族とは何だ？」

なんで俺の視界がぼやけるんだ？ なんでこつも胸が苦しいんだ？ そしてどうして頬に水つけを感じるんだ？

「なんで泣いてるの？」

「……分からぬ。悪魔であるはずの俺が、胸が……痛い。主、頼む答えてくれ……！」

「貴族とは平民を守り誇りを守る人間のことと言つのよ。」

気がついたら俺は彼女を抱きしめていた。あの男があつたから余計だったのだろう……。

「ちよつと……」

「ルイズ……お前の使い魔で本当によかつた。お前のような貴族に会えて……。」

それ以上は何も言わない。何があつたかも聞くこともなく、互いに離れ眠りに就いた。

## 人を知つて…。（後書き）

貴族の闇の姿が明らかになる中、俺たちはただ平民の生活を知るしかできない。 その果てに何があるのだらう…。

次回ツインシンフォニー リアルマジック地方の旅／ガルーム編  
傷を癒して

次回をお楽しみに。

**傷を癒して（前書き）**

再び彼らが決意する…そんなお話を。

## 傷を癒して

「…申し訳ありませんが今日の準備は他の娘にお願いします。」

今日は俺はいつもの黒いシャツとズボンを。 対して佐貴子は白を基調にしたワンピースを。

彼女が自腹で何の変哲も無い服を買うとは予想しなかつたが。俺達は今日は一日中休憩することを決めた。 戦場の死体は慣れきつたが日常の地獄は嫌な感じだった。

「デートじゃないけど…一人きりだね。」

「二人じゃないだろうが…。」

右腕に抱き着いた佐貴子。 その顔は暗い。 俺達は町を出て森の中へと入つていった。 風の音、水の音、土の匂い、獣の足音。全てがあった。

「ガルーム、ここってこんな差別が当たり前なの?」

風が強く吹きつける。 葉っぱがざわざわ揺れる…。

「…分からぬ。」

「そう…ねえ…」

密着した柔らかい体に触れる。 俺よりも小さな体。 整った顔立

ち。 本当にここは綺麗だ。 本當はあんな店で働かせたくないけど…ああいう所でこそ、彼女らは輝く。 彼女は言いかけた言葉を続けた。

「帰つちやねつよ。」

心地良い風が優しく吹く…。 ああなんていい提案だらう。 確かにこんな世界、怒り狂つて俺が全てを殺す前に他の世界に行けばどんなに楽だらう? 色々な横暴が許されるこんな世界から出ればどんなに楽か実感出来るはずだ。

「確かに俺がいなくとも…世界は動くよな……。」

魚が一匹跳びはねた。 再び水に沈んでいく。

「私は…私達はもう嫌。 ルイズちゃんやジェシカちゃん、レーネちゃん達は好きだよ…真面目ない子だもん…けど…何でこんな差別が許されるのよ!—!—!—!」

前述した通り彼女らの一人は戦争の中の混沌の中で女性だけが差別され、慰み者にされ時には肉として喰われた。 今回は食われる事はなくとも神に成り上がった愚か者によつて心身が凌辱された少女は数え切れないだろう。 いくら死体を見慣れ戦場になれきつた俺達でも怒りを隠せない。 俺は言つた。

「…なあおまえら、俺達が帰つたら誰があの未熟な馬鹿者達を鍛えるんだ? あんなクソみたいな野郎にしないために俺達が支えなきやいけないんじやないか?」

…頼むからそんな驚いた顔をしないでくれ。 自分でも今の発言が

己の口から飛び出したとは思えないんだから。だが俺が口にした事は実行したかった。そのため何をしでかすかは分からなかつたが。

「……ちよつとぢよつ貴方の心も治つていいくのかな？」

「俺はずつと壊れたままの気がするが……」

「さあな。」

それから何にもしなかつた。ただその場に座つて自然の動きを見つめた。雲が動く、水が流れる。風がそそぐ。ずっと眠る姫。俺は……

「誓う。俺は世界・ルイズや才人か、お前らのどちらかを選ぶなら……必ずお前らを選ぶ。俺の最後の居場所を……」

抱き寄せた体はポカポカと温かい。さつきより余計に風が冷たく感じた。

傷を癒して（後書き）

デクレシテマの次に現れる貴族。 横暴の横暴…永遠に続くのだろうか？

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとつめの使い魔 横暴の潜む黒光りの鞘

次回をお楽しみに

## 怒り潜む黒光りの鞄（前書き）

ここから、チュレンヌの話をきっかけに物語が展開する……予定です。

なにしろ、私がこここの物語を考えたのは最初の原稿を作った数ヶ月後なので。

何かあれば受け付けますしここから少しリサイズに対してもサイトに  
対しても主人公は……。

## 怒り潜む黒光りの鞄

ビスチエ姿の彼女らが俺に料理の注文をする。

「肉サラダ追加で二つ…」

「五番テーブル、指名オービースちゃん！ 外にキャロルちゃん…」

「分かりました！」

「テティ、クラリスちゃんと運び手伝って…」

掛け声と女性が次々と動き回る。何しろチッププレーース足るもののが始まつたらしくいつもよりも気合いが入っていた。  
スカラロンもこれほど儲かつた事は無いと絶賛するほどだ。

「良し、あたしも頑張つちやおつヒー…」

ジェシカまで皿洗いから外まで広がる席の応答にあたり出した。

「才人、一人で平氣か？」

彼を見ずにそつ尋ねる。

「今、アンナさんが…」

「全員回つてゐる訳じゃないから。 基本的に女の子の接待は交代制  
だし私達、必ず二人残るから。」

「また指名… メロティヤーちゃんとっこ」「…」

こんな日々が続いた。ソードが付いてるせいか、ルイズも感心した顔を見せながら対応に当たる。

親についてひよこのように見えるが… 最初だし仕方ないな。  
…少しずつ成長してくれればいいや。

チップフレースは中間、今夜は中間報告のある口。

「… 賑わいは最低かな… 外のテーブルは一旦撤去し中で酒を楽しむ客がやや顔色が悪い… 。

「何かあつたか？」

「まあ…」

ジョシカでも何があつたか分からんらしい。 やけに一般市民と言つより兵士と思われる者が多くつた。

「… テクレシテマの事、次の責任者が最悪だそつよ。」

今兵士と話をしてきたカナが取りに来るついでに耳元で言つた。  
俺達の行動が裏目に出た。 兵士達の息抜きのために女の子の命を使っていたらしい。

「いくらいまかしても… 女と酒… 現実はおつかないね。」

直後わざわざ言葉を言つ者が来たようだ。

「のっほん！」

「誰だ？」まあ偉ぶった貴族なのは間違いないだろ？が。店の空気が変わった。近くにいたアンナに部屋からあの一つを持ってくるように指示した。

もちろん剣だ。

「剣つて、あんた何考えてるのよ！」

ジョシカが非難する。確かに貴族相手に平民が手を挙げればただでは済まされない。当たり前の予測だ。だが……振り返りスカラントがごまをす正在する相手から異様なニオイを感じた。

王宮で感じたのと同じニオイだ……。

なんだかスカラントも嫌そうだ……。

なんであんなのが……

「誰かの咳き？ 魂の悲鳴か？……やれやれ『暗黒の救世主』の出番かな？」

まず奴の出番のデータがいるな。

「ジョシカ、あいつらはどんな奴らなんだ？」

忌ま忌ましげに可憐な顔を怒りで歪み、咳いた言葉は、はきはきとしながらも呪言のようだ。

それ相応の怒り。 予測は出来ていた。 貴族はムカつく。 だけど抵抗出来ない。 魔法に勝てない。 故に貴族に逆らわないよう

に自分を押さえることしか出来ない。

「IJの辺の徵税官をやつてるチコレンヌ。あいつらに逆らつたら重い税をかけられちやうから商売やってる人は皆逆らえない。」

ふと聞こえたのは人の悲鳴。火を弱め見ると、杖を構えた男達。  
……力の使い方を履き違えてやがる。あのガキがこの事を知つたらマジギレ……だろうな。

「ソーブ。」

「ん?」

入口付近にいたソードに声をかけ酒を渡す。まあ行つてこないと無言で言つた。

「後ルイズは?」

「アーニ。」

……これで本格的に知つてもうじとしよう。もし俺がこの成長しているこの少女を変えられるのなら……。ルイズにも同じように渡し言つた。

「ソードに教わったことを活かせ。自分の気持ちを押さえることを忘れるな。」

「うん…私でも平氣よねー。」

「気合いと心構えは十分。だが……」

「ルイズ。自分の本当の姿を見るがいい。」

首を傾げた。

「覚えてろ。それだけでいいから。」

頷く彼女の頭をそつと撫で背中を押した。焼けた肉が香ばしいにおいを漂わせる。ただ、胸に潜ませたあの剣を握りしめたくなった。肉を見たらそれを切りたくなった。

## 怒り潜む黒光りの鞘（後書き）

今俺は怒りに震えている。あいつの件があつたからか？ それとも本質的に訴えているのだろうか？ このすべての存在を破壊せよと…。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔 怒りに舞う白銀の刃

次回をお楽しみに

## 怒りに舞つ白銀の刃

太鼓腹を通り越した醜く肥満した身体。客を権力と魔法の圧力で無理矢理退かした。

「大丈夫なの？ ルイズじゃあ… 「ぶちギレるな。 ほぼ間違いな  
く。」

だが…だから…そ……！

皿洗いも新しい料理も作らない。俺達はただ飛び出す機会だけを伺う。

彼女らは優しげな笑みを見せながら近づき一人とも同じ言葉を言つた。

「お待たせしました。」

まだ下手だがちゃんとグラスにお酒を注いでいる。  
ソードの方が6人もまとめて相手しているので大変なようだが。  
笑顔を振り撒いていたがルイズの笑顔が一瞬で硬いものに変わった。

「ふん、男が接客とはな。」

何？

「おっ、男？」

同時にソードの嫌がる声が……って何してたんだ、あの野郎どもは  
!!!

「ちよひ、ちよひとー。」

「新入りだけじいいじやねえか。服の上からでもおっぱい柔らか  
い。」

「足も綺麗で肌も柔らかえな。レロレロしていいよね~嫌でも  
やるが~」

「平民が俺達に奉仕できんだ、有り難く思えよ。」

「店長、こいつただでお持ち帰りな~!」

ルイズに対してチヨレンヌは更に文句を言つ。

ふざけんな。

「はっははー、いや~あまりにも平べったいから、男だと思つたわ  
! ペタンコなら構わぬだろ、その布を脱いで踊つてみる。この  
私が直々に見てやるわ。」

「ほひ、姉ちやん卑へじひじこや。そのトカチチ震わせてその  
気こひせりよ。」

「一人で裸踊り!!」

「「「はい、踊れ! 踊れ! 踊れ! 踊れ!」」

手拍子も合わせて囁き立てる。黒光りの鞄は手元にあり「テルフリ  
ンガー」は主の背中に納まっていた。元々店の子以外の女…あいつ  
らも若干だが正体がもれている。メガラは一番深刻で黒い翼と長  
い爪が現れたり消えたりしていた。

「娘を下がらせる。」

「うん。」

「つこでにヤラセろー!」

「まあ女ならいいか。」

……今何も聞こえなかつた。ガチで…ヤル? 欲望が吹き出し続  
ける男達について二人がキレた。

「「ふざけんじやないわよ!..」」

鼻をへし折るほどの蹴りが、チュレンヌに突き刺さる。テーブル  
の中央に逆立ちし回転蹴りが炸裂する。そしてソードはルイズの  
隣まで跳んだ。

女の子の悲鳴とスカロンの「ノー!..」といつ声が店内に響いた。

「「ノコツラ!..」」

「無礼者!..」

「平民の癖によくも!..」

彼らの罵倒も今のソードの前ではあまりにも無力だった。

「人間風情が…舐めんじやないわよ！」

「なんだと…！」

それを見届けた俺は奴らが杖を向ける前に前に出た。スカロン達には悪いが…。

「オッサン、いい加減にしどけや。」

「これ以上の狼藉は、許さない。」

まずは……」Jのテーブルが邪魔か。……俺の足は光速を越える。全てが止まっている。今から戦場になるからな…世界が揺らぐのは時が新たな一秒を刻もうとするから。

テーブルは端に椅子はその上に。再び戻ればそこは戦場…。

「杖を切れ。」

「ああ、分かった。」

黒光りの鞘から、純白の光をまきちらしながら現れる魂の剣。そしてデルフリンガー。走り出した意思を持つ剣は後ろに控える全ての者の杖を切り払う。飛びまわる戦士は怒りに燃えその鎧びついた剣でさえ木の杖をすべてたたき折った。

「Jの、平民が…！」

チュレンヌが炎の魔法をぶつけてきたが…。

「禁術、59の2 デッドプレス。」

吹きゆく息吹。炎が息吹に乗る。炎は炎に焼かれチュレンヌの目の前ではじけた。

「熱い！」

「チュレンヌ様！」

僅かな火が彼の腹を焼く。だがほとんど身体にダメージはないはずだ。狂った様に暴れるチュレンヌの首元にその刃を突き付けた。

「お前の負けだ。……いや勝負ですらない。ルイズ、例の紙を。」

「いいの？」

「使うときだらう？ オ人！」

杖の次に剣を折り続けた才人はひじ打ちで一人の男を壁まで吹き飛ばし後ろの敵には低い体勢に移動してからの足払い。

「なんだ？ このガキ！」

ちつ…まだやる気か……。すまないが…血を散らすよ

「これを見なさい！－！」

姫から預かった王室の身分証明書。それを見た兵士もチュレンヌも一瞬固まり、そして土下座をした。

「王室の許可証……ひい……びつかこれでおつむり下せ……！　お願いで『ゼコムズ……！』

大量の金の袋を一人一つ。一袋にどのくらい金があるのか……だが

……

「ソードさん」

「……ええ。」

ソードは一人一人と袋を取り上げた。店は安堵に包まれた。訳が無い。ソード達は半透明の武器を持っていた。俺は彼女らに首を振つて『するな』と言いその代わり俺はある物をチュレンヌの肩にセットした。ルイズは今までの怒りを込め言い放つ。

「……私は貴方達を認めない。自分のなすべき事も歪めた貴方達を。私はこの事を王宮へ報告する！」

何かを言おうとしたチュレンヌの前に更に剣を近づけた。

「はは……」

「そして……直ぐさま私の前から消えなさい……！」

その後剣を首から引いた瞬間にチュレンヌは連れた兵士とともに走つて消え去つた。

喜びの声があがる。店の娘らが彼女に近づき感謝と褒め言葉を言つていく。

「けど正体ばれちまつたから…」

「あつ…スカロンはすでに知っているが確かに…他の奴らには知つてほしくなかつたな。」

「ふふふ、この店は従業員の事情なんて一切関知しないわ。だからなんにも見てないし聞いてない。ねつ、皆。」

「「はーい！勿論で～す！」」

ソード達もルイズに近づきカナが愛おしげに頭を撫でた。

「あれが貴方の正義なら、私は貴方に従うわ。」

「そうね。ルイズちゃんなら私達も信じていいかな。」

彼女達の褒め言葉も……今は耳に入らない。

「どけ。」

才人を避ける。一いちにも笑顔を彼女は見せた。

## 怒りに舞つ白銀の刃（後書き）

痛み これは俺とあいつらとの決別。 別れは本当の思いを刻むことができるのか？ そして決別は剣と剣での決着となる。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとつりの使い魔 使い魔（才人）VS使い魔ガルム

次回をお楽しみに

## 使い魔（サイト）VS使い魔（ガルーム）

パーン！！！

「えつ？」

誰もが困惑したかのようにこの姿を見た。赤く晴れ上がった頬。端にある蠅燭で照らされた互いの影が揺れた。

「馬鹿が。」

状況を理解したリリコとコキナが俺達を引き離した。ディーネがルイズを軽く治療する。

「あれがお前だ。チュレンヌはお前なんだよ！ ルイズ！！」

「私！「貴様ら、貴族の態度は常にあいつなんだよ！ 言ったはずだ。『本当に自分を見るがいい』と。」

敢えて声を荒げルイズの心を傷つける。

「つ！ ガ、ガ、ガル、ガル、ガルームの馬鹿！ つ、つ、つ、使  
い魔の癖に！」

「ああ、俺は使い魔だ。だが…使い魔だからと一切の反感が無い  
訳じゃない。」

「ガルーム、いい加減に…きやつ。」

赤ん坊のように周りを退かし、えぐられた心はついに泣き声で叫んだ。

「あんたなんて、あんたなんて他の世界に行っちゃえ……！」

潮時だな。

「ああ、そうさせてもらひ。さつぱだ主。貴族の誇りを教えてくれたことを感謝する。」

店を出れば暗い通りが続く。少しこの世界の地球に行こうかな…。

「待てよ。」

才人？ 店から剣を持ちながら出て来た。まさか……やる気か？

「いくらなんでも、あれは無いだろ。」

「ほう？ ルーンの力だけで戦つお前に世界を見切れるとでも言ひ難いのか？」

自分でもこの言葉は検討違いだと確信しているが、才人もルイズもこのままでは潰れる。貴族と言つ名の世界に駆逐されてしまう。

「確かにルイズも我が儘だけどあいつとは違つだらうが！」

「…本質は変わらないさ。才人…まさかこの世界の貴族がお前の日本より良いとか思い始めてるのか？」

それは無いと思うが…

「一人一人違うって書いてえんだよ！ 貴族全てが悪い訳じゃないだろ！」

「…高校のクラスに誰もが出来そうな罪を犯すものがいたとする。その家族や友人は同じ事を決してしないと誰が言い切れる？」

「…！」

困るよな、人間の感情に関する質問がまともな人間に答えられるはずがない。俺でも無理だ。嫌だから。勘違いされて犯人の友達と言われる前に自己否定するのが楽だから。誰もがそう思つてしまつから。だから……既に人の罪を犯しつづける『貴族』に暗黒の救世主からの…を『えてやらなければならない。だから邪魔するなよ……才人！』

「行くなら勝手にしろ。やること多いのは知つてるからさ……けど！」

ルーンが煌めいている。来るか、才人。

「その前にルイズに謝つてから行け！！」

切り掛かる。切つ先は腕をかするがまだ甘いな。才人、殺す。

ぐわっと振るつた剣は彼の真横を突き抜けた。彼は走り、がむしやらに切り裂いてくる。

「……見切れる…。機械的なんだよ。お前の剣は。」

隙が大きすぎる。速く動けるのは評価に値するが……。

鋭い突きには縦に振り下ろし攻撃を避ける。

横の難しき扱いはほんの少し後ろに下がるだけで良い。

切り裂くと剣に当て体は常に背後を取りうとする。策略は良い  
だが一回として敵の目的を、隙を見つけようとはしない。これで  
はただの喧嘩だ。剣を使つただけの……。

……いろんなもんか。

「終わりにしよう。」

風よ……たたつきれ！ 風が才人を包み動きを封じる。『デルフリ  
ンガー』を切り上げ即座に剣を立てた。

グシャ……。

「俺は……謝らない。」

奴が氣づくまで『悪魔』であつづらぬから……。

カンカラウン

『相棒！ 相棒！！』

グシユ。

「さりばだ。 また会おう。」

暑い日が続くのに北風の冷たい風が街道に、腹を押さえ倒れた者に吹きすさんだ。

## 使い魔（サイト）VS使い魔（ガルーム）（後書き）

もはやこの手しかない。全てが俺の手から離れていく。 そうたつた一つの『繋ぎ』がなければ、今俺はすべてが闇だと……彼女へと伝える

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとつ使い魔 姫、闇を知る

次回をお楽しみに

## 姫、闇を知る。（前書き）

ある方に、文法も、接続詞の使い方も全くなつてないと指摘されました！ 頑張つて治そうとしたけど無理でしたw

今後自分で、おかしいなと思つたら編集しますので、今後とも下手な文章ですがお楽しみください。

一週間更新できなかつた言い訳終了！ 本編をどうぞ！ あと…ルイズとアンリエッタをいじめているのは大事だからです。 決してアンチではありません。

## 姫、闇を知る。

赤い月に黒い影が現れる。影は何も残さず姿を消し真っ白な屋根の上からテラスへと舞い降りた。

「アンリエッタ。」

その声を聞き姫は警戒心をあらわに言つ。

「こんな夜更けに訪れる無礼者よ、名乗りなさい一人を「呼んでも無駄だ。決して貴方は私を引っ立てない。」

アンリエッタ…窓の外を見ようと前に出るが何も起こらない。影は彼女を傷つけるつもりは無いのだ。

月光を背にしているためか影が顔を隠した。男はマントをたなびかせる。

そのマントは闇のように真っ黒で服も黒い…ようだ。

「我が主はルイズ。夜分遅くだからこそ、貴方に見てほしい物があります。だから私はここにいる。」

親友ルイズの使い魔は二人。一人は年もさほど変わらないと思われる青年。そしてもう一人アンリエッタを人質にゲームを始めた男。こんな事をするのは男の方だ。

「ガルーム…さん？」

名を呼ぶと彼は直ぐさま用件を伝える。心なしか少し焦っているようだった。

「姫、 真に申し訳ありませんが私と来てほしい。」

「理由がわかりません。 何故？」

まあ、 理由も何処に行くかも話していないから普通は気になる所か。  
「主は… いや貴方にも見せるのは少し早いと思っていたのですが、  
王族の貴方には知る義務があると考えました。『貴族の本性』  
を。」

そう、 デクレシテマやチュレンヌ。 強いていえば学院のギター  
や生徒達…。 彼らの運命は既に決まっている。

「そひ、 もが？」

知らぬ言葉のため困惑する彼女。 ここで俺はイメージした。 鳥。  
大地から飛翔する巨大な鳥。

俺とあのガキはその姿を変化させる事が出来る。 俺の場合の身  
を飛竜、 鮫、 野獣、 蠍、 蜘蛛、 鳥に変えられる。

「クラッショウ、 バード」

今回選択したのは鳥。 体が熱く燃える。 実際に炎を出して燃える。

「ガルームさん！？」

暑い…暑い…！ さあ、 目覚めろ！

灰色の巨大な羽が散る。 今破壊の巨鳥が飛び上がる。  
15？の羽を嘴でくわえた。 理性を示すように頭を下げながらそこに置く。

「お乗り下さい。 空の旅は初めてでしょう？」

ア然とこの姿を見つめた。 変身なんてこの世界じゃ有り得……る  
わけないか。

「…はい。」

鳥はつむじに乗った。 空高く、 空高く舞い上がる。

「貴方が故人、デクレシテマを推薦したのですか？」

ふと氣になつた事を聞いてみた。彼女の顔は見れないがその声は暗い。

「……え、ただ了承はしました。顔立ちは少しアレでしたが王宮内の評判も仕事ぶりもよかつたので。」

……そつか猫を被つっていたのに氣づけなかつたか。

「そのデクレシテマの館があれです。」

館は既に半壊し遠くから見ても、幽靈屋敷にしか見えない有様だつた。

「亜人にでも襲われたのでしょうか？」

亜人ね：確かに亜人に殺されたよ。

「着陸します。」

ゆつくりと旋回し降り立つ。姫を下ろした後俺は扉を開いた。

「うう……

まずいな、あんときは氣づかなかつたがメイドやら衛士まで殺していったのか。

「どうじてこんな酷いことを……。」

ほとんど焼けていたがそれは人の死体だと分かる程度には残っていた。

奥に進むと……『デクレシテマのぐちやぐちやに踏み潰された肉体があつた。

「ストップ。……ここが彼が死んだ場所。 貴方が見るには・少々刺激が強すぎる。」

本当はしたくないんだが。

「禁術59の3。 スネークプロミネンス。」

何十匹もの炎の蛇が死体に取り付く。 肉がじりじり燃え上がり黒焦げの跡だけが残つた。

「さあ、行きましょう。」

地獄へ一步一歩近づいていく。 そして昨日のあの場所にたどり着いた。

「ここは?」

「デクレシテマがあの町の権力に固執した理由は、 この部屋が教えてくれます。」

無理矢理生かされた女の体を失えばここにあるのは、 ガラスで出来た、 実験器具ばかり。 中には何にもなかつたが、 ごみ箱を蹴り飛ばすと散らばる細い腕と足。 彼女は小さな悲鳴をあげ、

俺にしがみついた。

「分かりましたか？」

「…………嘘です。 そんなはずありません……。」

まだ甘つたれるか。 ルイズ並に教育が必要だなこの姫も。

「貴方がルイズに依頼したが故に我々は眞実を知った。」

「…………」

「貴方の知るものの大半は貴方が望んだただの幻！ 貴族など」  
「イデしか持たない愚か者どもだ！！」

その肩を掴み力をほんの少し加える。

「貴方の理想は、 決して存在し「違つわ。」

遮る声……佐貴子？ いつの間に。

「ルイズちゃんは泣いたわ。 そこの女の子だつて泣いてるじゃない。」

アンリエッタは確かに泣いていた。 涙は確かな後悔を映していた。

「相変わらず、 あんた言ひ過ぎ。」

率直な嫌味に俺は乱暴に彼女の肩から手を離した。

俺を愛してしまったが故に奴らはここにいる。これだけは俺にも

「てめえらが恋ね……」

「だからいいのー アンリエッタ姫でしたっけ？ 女の子はいつも  
ぱい悩んで恋してそれで成長するんだから。」

「」みんなさー……

「ここによ。 どつかのお馬鹿さんが、 变な事をしでかすから…  
…」  
「」

誰が馬鹿だ……。 今アンリエッタは佐貴子に作つてもうつた椅子  
に腰掛け涙を拭い俯いていた。

分からぬ。何故だ、何故誰もが恐れるはずの者を恐れない者がいる?

「ねえ、一からやり直せない?」

「どういう事ですか?」

「うーん、私も上手に言えないんだけど貴族は平民を'ノミ'のように扱っている実態を貴方は知つた。平民に対して貴方はどう思つてゐるの?」

アンリエッタは少し考え言つた。

「貴族が守るべき者です。平民を失えば国も貴族も滅びます。」

……なんだ、分かつてゐんじやないか。

「アンリエッタ姫、ならば一つ提案が。」

「はい。」

「町の衛生管理を徹底したらいかがでしょうか?」

彼女は首を傾げた。どうやら意味が分からぬらしい。

「衛生状態は心の清潔さを示すわ。汚い町より綺麗な町、強いといえば綺麗な国のほうが好かれるわ。住民もやる気出るし。貴族達には暇な人達もいるみたいだからね。」

佐貴子が彼女に解説してくれた。俺が更に補足のため、実際にあ

つた一例を示す。

「かつて財政難に陥った国は、お金を回す手段として公共事業、今回でいえば『町を綺麗にする』と言つのを失業者にさせ、国が給料を払つた。結果、物は余っていたがお金がなかつた国は全体的に回復したとか。」

アンリエッタは俺の発言に苦笑を漏らした。

「正直、物もお金も何にも無いんです。ガルームさんの通り、プライドだけなんです。」

「ちょっとガチで余計な事を言い過ぎたかな？」

佐貴子はじつと睨んでくる。

「仕方ない。この件は『貴族』に任せよう。ヴァリエール家に秘密裏で連絡を取ることを勧めます。」

はあ……この国の改革は……魔界統一の時よりもめんどくさうだ。

「何、ため息ついてんのよ。帰るわよ。姫様もう眠りかけてるじゃない！」

アンリエッタ姫はふねを漕ぎ始めていた。さて……帰るか。外に出た俺は再び変身し、彼女らを乗せた。

「あれ？」

「どうしたの？」

飛翔中、見下ろした先にレンガあの獸道を歩いている気がしたが……  
氣の性か？

「いや、なんでもない。ところで姫様、デクレシテマを推薦したのは？」

眠りかけていたが普通に答えてくれた。

「右大臣ボトフです。彼もトリスティンのために近くしていますわ。」

……なんか嫌な予感がする。デクレシテマの時よりも……何か……。

姫、闇を知る。（後書き）

帰還は氣まずい雰囲気の中で。 真実を追い続けた俺はついに…絶望にぶつかることになる。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとつりの使い魔 悲しみの遠吠え

次回をお楽しみに

## 悲しみの遠吠え（前書き）

まぢ… 立てていたフラグを回収します。 恋愛ではないので、注意を。 一週間以上投稿できず、ごめんなさい。

## 悲しみの遠吠え

「……」

佐貴子が俺をルイズが借りている部屋に通す。まさか今日戻るとは…

「いめんなさい。」

部屋に入つてからかけられた最初の言葉だった。

「まだ、起きていたのか？」

ふるふると首を振る。

「なんか、目が覚めちゃって。」

もつ声は小さく、今にも泣きそつた声を出す。すこし…やりすぎたか。

「お前がよくなつてくれればそれでいい。俺に出来ることなんてほんの少しあないんだから。」

「そんなことない！ ガルームが教えてくれたの。 色んな事。貴族と平民の差…分かった気がするの。」

「ふつ…まあ、ゆづくりと理解していけルイズ。俺も少し疲れただ。お前らに対して、きつく当たりすぎたのかもしれないな。」

息をつき壁に寄りかかる… そういうえば才人はどうした?

「才人は?」

「あなたが腹を串刺しにしたんでしょ? 寝てるわよ、そこで。」

「なんだ、いびきが止まっていただけか。すこしだ大きいいびきにため息をつく。殺したつもりで言つたが本当に殺す気はなかつたから本当に死んでたらどうしようと思つたぜ!」

「寝るぞ。」

返答は無く俺も眠りこ……

「どうなつてんだよ…」

ちょうど学院の方角から、火の手が上がった。逃げ出すものはいない。なぜなら今日の前でほんの少し前まで生きていた人間は腐敗したゾンビとなつてうごめいているからだ。逃げまどつのはまだ殺されていないものばかり。

「くそつ…。」

ゾンビの一番厄介な所は急所を貫いたり、首をはねたとしても活動する…と言うこと。  
焼き払うしかないか。

全て燃やせ。太陽を回る炎竜よ。回れ回れ破壊のロード。駆けろ、絶望の太陽！

「禁術、59の4、ヘルコロナ！」

町が火の海に変わる。懐かしい顔もあった。この数日の間に言葉を交わした者もいた。だが今は首が燃え骨だけしか残らない。こんな時に限つて、死んでいった奴の元気な姿が目に浮かんだ。

熱を放つ岩の中を走る。何処かに犯人が……。

「お兄ちゃん、逃げて！」

子供達が俺の真横をすり抜けて王宮の方へ逃げていく。  
炎が新しい…レンガに残る焦げた跡。この先か。

「ヒヤツ、ハアーー！」

「タノシイネ～！！」

「モエロ、モエローー！」

「ダークネスと同化したか。愚か者どもが。」

チュレンヌの配下の男達は子供のような火遊びをしていた。知性は失われ、瞳は赤く染まり、背中からは黒い靄が全身を覆っていた。「…はゾンビにさせる魔法を持つていない。どんな物かは知らないが。

「はい、そこまでだ。今度こそ消える覚悟は出来たか？」

白銀の刃を煌めかせ闇を収束させる。

「リアルブレードセット。」

『了解。リアルブレードセット。』

何も言わず剣を振るう。三人の四肢がちぎれどぶ。怨み まだ残るかのように腕や足がつごめく。  
気持ち悪いんだよ…そういうの…

焼き尽くしてやる……召喚すべきは暗黒の太陽。この世界を闇の炎で焦がして、焦がして、焦がし尽くしてやる。  
周りの生体反応はもうない。

「禁術、59の5……ダークネスサンシャイン！」

夜空に太陽のように輝きを放つ黒い物体が浮かび、落ちた。  
業火が夜天を深紅に染め上げた。当然ゾンビ達は全て炎に包まれ、灰に帰す。

「終わったか。」

土と木で出来ていた家は次々と燃え、俺が去った後には全てが炭化した世界だけ。悪夢のような惨劇は今、火炎だけで残っていた。

「そう簡単には物事運ばないんですよ。」

燃えた町と生き残りが逃げ込んだ王宮側の町。橋を渡ると同時にその者は俺に言った。

「レン。」

いやな予感は昨日からしていた。こいつも関わっているんじゃないのか？ そういう予測だけはできていたんだ。

「師匠

死んでください。」

普段の彼女と全く違うやつの中。声の高さではなく根底から狂っている。言うなれば…前者は清き水のにおい。後者は腐った豚小屋の糞尿のにおい…。

おそらく、レンは洗脳を受けてしまってこる。  
「…生きているのに…！ 俺は…！」

「貴様いつたい何者だ？」

「…テクレシテマを殺したのは見ていた。」

タクトから飛び出す腐敗した水。 おそらくこいつを浴びたら、本当に最期だよな。

「貴様のような平民は死ね。 我ら貴族の邪魔だ。」

好きではないが、 即死攻撃を持つ敵にはこの戦法がいいな。 ヒット・アンド・アウエイ。 一撃離脱戦法。 こいつが効くんだよね。 タクトを切り裂く。 彼女の髪が数本舞つた。

「ちつ！ だが… こいつがある。」

木じゃない… 鉄のロッド。 よく持てるな……。

「スプライトバー・ッシュ…！」

モンモランシーの水流の比じやないぞ… 家すらも撃ち抜いて…

「きやああつ…！」

そこにいた者を襲う水流。 激しい水流は当たった者の肉をねこそぎ奪い去っていく。 ちょっと待て… これって…あの時教えた水流の魔法？

「これはいいな。 あのきまじめな左大臣もやれそうだ。」

左大臣？ まさか…

「お前、右大臣ポートか？」

「平民が私の名を知っているとは、万死に値するぞ？」

直後水流が乱射された。全てを貫き悲鳴があがる。これ以上はやらせない！

狙うは首……いや、腕！

「甘いわ！」

彼女は杖を地面に叩きつけ波を呼ぶ。奴にとつて真後ろが川と言ふことは、フィールドアドバンテージがあるってことかよ！ 水が俺を包み膜のようになつた。

「1Jの程度！――」

すぐに解除するがその間に何発か家を貫く水を見た。剣で水流弾を弾く！ 何回も弾いた。じゃないと犠牲者が増えてしまう――

「無駄だ。」

コントロールがよくなってきた。5発撃つてきて、一発…撃ち返せなかつた。軌道はそらしたもの…。

「どうして…だ。」

何故…こつも人は繰り返す？ 操られたあいつは…いや…右大臣ポートは平民をまるでゴミのように一掃していく…。レン…。一緒にいた期間はほとんどなかつた。だが俺を信じてくれた。俺

はあの学院の者たちを守ると誓つた…！　だがこの結果は何だ！？  
命はこんな容易いものなのか？　俺が巡ってきた一いつつのあの世界  
…人が人として生きようとしてきたあの世界、…くそ…いや思えばテ  
グレシティマの時から感ずべきだった。女と男の差だけじゃない。  
人間の価値観からすべてが異なつていたことを、やはりこの世界  
の貴族は殺すしかないのか？

「くそ…！！」

剣を握る。　いいだろ？　鬼になろ？　悪魔になろ？。

「リアルブレード、セット。」

すまない。　俺のふがいなさを許してくれ。　レン！　一気に駆け  
出し切り捨てる！　激流が俺を包むがこの程度じゃ止まらない！！  
せめて気がつく前に、痛まないよ？　一瞬での世に送つてやる。

「燃える、禁術59の1バーニングソウル！！」

燃え上がる炎剣。　この一撃で淨化しろ…………

「ガルーム！　ストップ…………！」

ルイズ…来てしまつたのか？　すまない、　やはり俺は…誰かを殺  
して守る正義しか…選べそうにない…！

「焼き死くせ！　ヘル・インフェルノ！」

切り払い杖は一瞬で灰と化し、切られ飛んだ首は骨となつて落下し  
た。再び俺は殺人者に戻つた。　燃える炎の中首が消え前方に倒

れた身体から現れる液体がどす黒く、大地に広がつていった。

## 悲しみの遠吠え（後書き）

怒りはついに仲間たちを呼び覚ます。怒りが呼ぶ仲間たちはすべて悪魔。彼らはリーダーの指示にただ従うだけ。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとつ使い魔 出  
陣、悪魔の騎士

次回をお楽しみに

出陣、悪魔の騎士（前書き）

人間に命に意味はあるの？ 人の行動に意味はあるの？ 罪びとは皆死罪でいいの？

そんなことを考えていたらこんなのができてしましました。 もう2週間ですね。 更新はほぼ停滞しますが、それでも読んでくれるのであれば…もう少しだけ頑張ってみます。 なにしろ受験生なもので。

## 出陣、悪魔の騎士

町は燃えた。豪雨が一時間後に急に降り出し全てが収まった。死体は何一つ残らず、誰が死んだのか、誰が何をしたのかは一人を除いて誰も知らない。そう二人を除いて。

「おい、何処行くんだよ。」

炭の町を越え腐敗した町の前に立つ。才人を連れてきた。

「いいか、この先はバイオハザード状態だ。」

そう、初日に知ったあの地獄。レンはある道を歩いていた。空から見れば舗装されているのを知った。そしてレンはポトフに操られた…。

「よく見ておけ。他者に操られた可哀相な者の最期を。」

「…お前、まさか…」

「悪魔……だからな。 禁術、 79の3、 スネークプロミネンス！！！ 79の5！ ダークネスサンシャイン！！」

「一つの炎。 「う」めく蛇は窓を突き破り肉が全て燃え上がる。

「お前、 ふざけるな！！！」

肩をおもいっきり掴むが俺は動かない。 そして黒い太陽が落した。

「「キイエエエ！…！」」

人間とは思えない奇声がここまで聞こえる。

「お前、 人を殺したんだぞ！！！ なんで平然といられんだよ！！！」

「そうだな。 70人は死んだよ。 」

暴れる才人にそう言つ。 その憤りをもつと感じる、 才人。

「これはチュレンヌを配下にしている貴族の仕業だ。 」

あくまでも予想だ。 けど外れとはいひだろ？。 俺を殺せなかつたこと…後悔させてやる。 失われた全ての命に変わつて… ポトフ、 貴様の存在を消去してやる…。

「俺はちょっとした復讐を果たす必要がある。 奴は命を弄びすぎた。 最初に難民に家を与えた後理性を奪い動物にした。 」

黒い太陽の炎の中を突き進む。 俺の魔力を受け炎は消え道が出来

た。俺と才人はその道を突き進む。

「お次に町を配下の者達に支配させたんだ。」

「嘘だろ？」

「確かにこれは俺の予測だ。しかし、昨夜、奴はデクレシテマが殺されたことを知っていた。更にチュレンヌにつけていた発信機はこの奥で活動を停止した。人がここに近づくとは考えにくい。」

何しろ入口付近から排泄物の臭いが漂い、入れば殺される。第一の条件からも貴族がここに近づくわけがない。だが発信はここを示した。

もし、ポトフの屋敷への裏口があそこから通じるのならば全てが納得できる。

デクレシテマに町中の女の体を奪わせそれを兵士に与える。女にもはや意識などは存在しないから……まあ無茶苦茶に出来る。そこで兵士達を集め……

チュレンヌに命じて大量の金を巻き上げ、ポトフに流通。

あげくの果てに住民の一部を魔法実験の現場に変え……そして昨夜レンを洗脳し、彼女に罪を着せた。いや、それ以前にデーターを企んでいたに違いない。だから……あんな実験を繰り返した。

「ちょっと、止まれよ。」

才人は俺にそう言った。町は既に遙か後ろ。數十分は歩いたか

……。

「止めよつぜ。 こんな事、 なんかおかしいと思つんだ。」

「才人…お前が言いたい事も分からなくはない。 実際、 僕もずいぶん悩んだ。」

人を殺す事で救われる命がある。 目の前の100を殺して見えない一万人を救えるなら、 僕は迷わず殺す。 相手が罪人であるならば特にそういうえ。 それが僕が生きて戦いつづけ、 得た答え。

「だが、 全ての世において自ら犯した大罪から逃げ、 時効まで逃げつづけようとする者もいる。 僕はそいつらを許さない。」

はつとした顔を俺に見せた。 けびすぐに言い返す。

「でも、 殺しは絶対いけないだろ！？」

下らないな。 僕にはそんな気持ちは無い。 僕の一一番嫌いな存在は『知能を持つ生き物』なんだから。

「…議論はここまでだ。 張本人に会いに行くぞ。」

『デビルアイ』で屋敷の場所を捕捉。 この上り坂を越えたら……

「だけえ…」

「それだけ、 違法に金を巻き上げたのぞ。」

川が流れる。 外界を切り離すかのような巨大な壁。 そして月明かりがその中にいくつものくぼみがあることを教える。

「攻め込んだら、 大砲か。」

才人がぎょつとして一歩下がる。

「まあ、 今は見つからないさ。 それに俺は正面から突破するだけだ。」

川沿いを歩きついに巨大な門の前に立つ。

「（アポはとつてある…）」

実は今日は少し仲間を呼ぶことにしていた。 強大な力を扱う悪魔達を。

「俺は？」

「どつかの陰に隠れてろ。 覚えとけ、 これが罪人の運命だ。」

さあ……罪人達よ、 抹消される覚悟は出来たか？

「何をしている！？」

才人が門の外から中を見ていると外壁の見回りと思われるおじさんが才人に近づいた。

彼は一瞬うろたえたが、 こう言った。

「知らない人からここに来るよう言われて……」

「女か？」

「いえ、 ただ『地獄を見る』とか……」

「何！？ 分かった！ 君は帰りなさい。 教えてくれてありがとう！」

僅かな笑顔とともに壁の中にある見晴らし台へ。 そして警報の鐘が鳴り響くと同時に大量の剣が空に現れ屋敷に降り注いだのを彼は目撃した。

ブレイド・レイン。 広範囲にわたり鉄の剣を、 禁術の一つ、 メイクマテリアルで創作し雨の魔法、 レインを用いて天から降り注がせる。

今、 窓を割り瓦を貫いて屋敷を串刺しにした。

「さて… これで出でくるか？」

今俺の体は透明… 禁術… 影の禁術の2番目にインビジブル。 視認不可の魔法がある。 この鉄と鉄がぶつかる音… だが犯人はすでに侵入済み。 広すぎる庭の中央で立っているんだ。 まさか… 大砲を自分の庭にぶつ放さないだろ？

予想通り、内部や壁についている扉から兵士と…あらり、 黒い翼付きのわんこもいるのか。 少し遊んでやる。

「キヤイン！」

真横。

「ガユー！？」

真上。

「グワウ！！」

真下。

次々と… 犬の人形だつたものに突き刺さり消滅していく。

「くそ、 どじだ！？」

さて… 貴族連中も来たことだし、 そろそろいいか。 頼むぜ、 みんな。

「一体どこを見ているんだ？ 僕はずつとここに立っていた。」

陣営は俺を包むように移動した。 魔法使い一人の前に兵士が二人。 魔法使いは13人。 兵士は26人。 典型的な陣だ。 その後ろにいるのは……。

「また会ったな、 チュレンヌ。」

「……ええい！……あえ！　あえ！　全力をもつてこいつを殺せ！！」

「叫ぶのは結構だが……今日は一人じゃないんだよ。」

俺の周りに武器が立ち並ぶ。　その数は八つ。

「ミッション内容は誰も殺さずに戦闘能力を全て奪い去れ。」

黒い渦巻く闇が近づく兵士を軽くあしらう。　その闇に兵士達は震えたが押し付けられた杖を感じ、　再び突っ込む。

「わざわざ俺達を呼ぶからどんな強い相手か期待してたのに、　がっかりだな。」

二人の剣を叩き割り蹴り飛ばし、　その男は煩わしそうに肩につけた汚れを掃う仕種をした。

## デューク・ベラクメル

身長は約174？。　若干俺の方が背はデカイ。　傷一つ無い顔は綺麗な顔立ちだが氷のように冷たい目が全てを台なしにしつくる。黒髪で少し顔にかかる。

俺と同じく悪魔の戦士の一人で鋭い剣技で敵を討つ。

余談だが彼には望んで一緒にいる女が8人もいる。　それに加えて親友もいるある意味とんでもない家の家長である。

口は悪いが根は優しく大切な友らを守りたいと願っている。　無駄な争いは避けるが、　一度戦闘になれば闇魔法と光魔法を携え、剣を持ち戦場に出場する。

更に虫使いと呼ばれ『捕獲<sup>キャプチャ</sup>』を行い、捕まえた虫を使役する力を持つ。

主に偵察などで役に立つ。たった一人で多くの危機を切り抜けた歴戦の戦士。

「いいじゃねえか。人間のわりには頑張ってるだしよ。まあろくに出来てねえようだけどさ～ハツハハハ！！！」

隣でデューケの肩を叩きながら大笑いする者がいた。その戦場にはあまりに合わない姿に兵士は驚き固まる。

### アモン・ルテラメール

デューケの親友である。身長は169。つねに他者を笑わせるムードメイカー兼トラブルメイカー。

所謂むつきむきな男で笑顔が太陽のように眩しい。

戦闘時ではマジックキャンセラーと呼んでるハンマーを持ち、魔法を打ち返す特殊能力を持つ。

ただハンマーなので物理でも相当なダメージを与える。つねに友を庇い、共に戦いつづけたデューケの戦友。

「だが報告はもっと深刻だったはずだ。アモン、あまりに笑えないぞ。」

「だが……アモンが笑うよ！」この状況は俺達を呼ぶにしては軽すぎるのは。

### アザゼル・ティアーレ

アモンの対のように寡黙。 ツツ「ミをいれる事が多い。

骨を槍に変化させ発射する技を持ちその槍は生き物を引き裂く。

闇に身を潜め狙い撃つ、暗殺者のような攻撃が彼の構えとなる。

攻撃力だけで言つならば前述のデューグを遙かに上回るスペックを持つ。

### メフィスト・ウェンヴァロ

彼もまたデューグの友の一人だ。 他の三人がショートヘアなのに對し彼だけは肩まで伸びたロングヘアである。

通常の剣を主武器に、 ポケットなどに爆弾や毒などを大量に仕込み大量虐殺攻撃を得意とする。

更に彼のみの技としてデッド Chernと言つ触れた物を腐敗させる鎖を身体から引き抜く事が出来る。

デューグが行動派、 アモンがボケ、 アザゼルはツツ「ミだとするなら、 彼は全員が暴走した時の制止役である。

「皆…」

「まあ、 話はちゃんと覚えている。」

「話聞いて言いたかつたことがある。 この世界の貴族はくそったれって事だ。」

### サタン・レバレスカ

伝説で名高い悪魔王。 戰闘能力は今も昔も高い。

昔天 上界において、 謀略にはまり、 友や仲間達とともに魔界に落ちてしまった。 それ以来己の名前を捨て現在の名前を得ることになった。

デュードよりも強く、瞬時に相手を薙ぎ払う。闇の力を帯びた超重力魔法を得意とする。

バッサリ切った髪。あらわに見せる眼光はその名にふさわしく自信に充ち溢れた赤。1m90cmに近い体は圧倒感を感じさせる。

### ロキ・ストレンス

全ての生き様はゲームであると考えている。サタンの親友だ。今は主にデュードと行動と共にしている。

幸運度がはんぱなく高く、くじ引きやれば8割りがた当たる。そんな彼の武器はギャンブル。魔力の込められたトランプやサイコロ、ルーレットを回しその当たり次第で解放する魔力具合が変化する。なお、炎魔法も得意。

逆立つた髪は炎みたいなオレンジ色。アモン並ではないが引き締まった筋肉はある意味美しい。本気モードに入ると上着をはぎ、上半身を見せつつ炎をまきちらしながら戦う。

「さて……「そろそろ行くぞ。」

### デビラー

黒邪龍ミラボレアスの擬人化した姿。

生身でその本来の力をコントロールする。なお彼は亞種の技も使うため一族から恐れられ火山の奥に置き去りにされた過去がある。人間形態では憎しみから生まれた邪魂刀とを握る。宿した呪いは『相手の首を確実にはねる事』普通の生き物ではその刃を見る事なく宙を舞う。

### ピサロ

死に墮ちてなお大切な物を守りつとした悪魔の皇子。黒の羽毛マントを好む。光と闇のはざまで戦つて経験もあり両者の違いをよく知るものもある。

典型的な闇の剣士とは異なり単純な剣技を得意とし、魔法と合わせるのは苦手である。

「ともかく、頼む。」

悪魔達は一斉に構え、突進した。それは一瞬において終わる。

剣は折れ、兵士の身体は全て壁に埋まつた。  
一つ付け加えておこう。デューク達の剣と兵士達の剣。太さや長さこそ、異なれど見かけはほぼ同じ。  
決定的に違うのは材質だ。

「何故、私の作った最高傑作が…」

ああ……そうこうとか。

「そりや、まともに戦えないくせに剣を作るからだ。戦つもの達を考えずに創製した剣が強いはず無いだろ?」

「つーええい、何をしていろー！やつらを皆殺しこじるーー！」

怒りを爆発させたように顔は真っ赤に、頭から煙も立ち上る。

「…それわりつけつをつけてやる、ポートフーー！」

皆が魔法使いの杖を切り、繩で体を縛つていく。

「来るな……平民がああつ！」

チュレンヌも土の刃を放つ。 そんなのが効くか、ゲスが。 剣で刃を弾き、サクッと杖を斬る。 そして首筋に剣を突き付けた。

「前衛は全滅。 次の手を見せたらどうだ！？」

メフィストが面倒そうに、チュレンヌの身体に縄を巻いていく。

「ピサロ、頼む。」

後ろではメフィストがピサロに指示する。

「分かった。 立て！」

彼も何を成すべきかを知り、傷ついた兵士も含め全てを一力所に集めていった。

そんななか、ついに扉が開いた。

「…あんたがポトフ？ もっと若いと思つてたんだがな。」

老人だった。 杖を杖として使い、ゆっくり歩いてきた。 その瞳は鷹。 なるほどテクレシテマやチュレンヌとは違う闇の目だ。あの盗賊と同じ目。

「残念だよ。 あの虐殺が行われる前にお前と会つていれば、きっと俺はお前を救おうとした……トリステイン、右大臣ポトフ……」

正直な感想をぶつけた後、俺は剣を向けた。理解している。

この男はこの国を救おうとした。だが味方は誰もいなかつたのだろう。

だから強欲な者達に欲しい者を自由に集めさせるのと引き換えに財源と兵力を集めようとした。

そして、大量の死体は、更なる兵士にするために……

前を見れば彼が杖を振っていた。集まるのは大量の炎の矢。

「大地よ油となせ……」

ドロリと土が油に……ほんの少しだが、これは……まあ鍊金があるんだからこれくらいよくあるよな。

「死ね。」

降り注ぎ始めた。まあ川が周りにあるし……油で爆発的な焼却か。

ドカーン!!

「ど、言つはずなんだけどなー」

アモン、一瞬それが現実になりかけるほどびっくりしたぞ……田の前の壁が崩れたら火の海になつていいんだ。

「俺達はお前がそんなミスをするとは思つてないぞ。」

デューケめ……わざわざオープンハートで心を読みやがつて……馬鹿が……

「ガルーム、端に隠れていた少年は?」

才人か……。

「連れて来てくれ。」

「……メフィスト！ 逃がすな！！」

息を飲んだ後、鎖が擦れあう音が聞こえた。

「痛……」

「ここで待つてろ。いざといつとき守れない。」

痛みは後で治す……目の前の老人は愕然としながら、肩で息をし震えながら再び魔力を高めていた。

「それは無理だな。あんたにもう魔法は使えない。」

吹きすさぶ風で彼はよろける。そんな身体で魔法など使えない。

「私は……ただこの国を変えたかった！ 貴様に邪魔されるわけには行かぬ！！」

「……貴様と議論する気は最初から無い。」

奴は無茶をしながら魔力を杖に集める。  
青・水系統の力か。 吹きすさんだ風は俺達の間にもう一つの風を作る。

「//ゴーデイ、 ストーム！」

濁流：中に紛れてるのは……剣か。 なるほどこいついう光景は初めてだ。 ソードフィッシュ剣の魚：か。

茶色の激流を前にカウンター マグネで返す、火の矢など無力。 それでも逆転する手だてはいくらでもある……久しづりにこれを使うが。

「禁術 66……」

「――66!?」

誰かが叫んだ。 そう禁術の中で上位ランクかつ使用するのを禁じているのが、 この66だ。 ロンセプトは……『死』

「の1……マジックキラー……」

別名……魔素斬り……。 左の中指と人差し指に宿した死の力が魔素を殺す。 魔素が死ぬ=魔法の流れが止まると言つことは発動している魔法が消える。

対魔法専用でありつつ、全ての魔法に通用する。まさに『魔法殺し』である。

ただし魔素の流れを見極めるテクがいるので使い慣れてないと大失敗して、ダメージを負う両刃の剣である。

今回は……ここか。　スパリと空間をなぞった瞬間に目の前に存在していた全ての魔法が消えた。

「馬つ……鹿な……」

ついに倒れる身体。

「ポトフ、今までの全てを悔やめ。　抹消される覚悟は出来たか？」

「ガルーム、後は任せて構わないな？」

「いや、中に入ら連中を全員引つ張つてくれ。」

「分かった。」

ピサロを残して全員が窓から屋敷に殴り込みをかけた。

悲鳴と鉄がぶつかる音が屋敷から聞こえてくる。　毎回十人ほど束縛され、女、男分かれ出て来る。

さて公開処刑かな。

「ずいぶんと集まつたな。」

「ありつたけ探してこれで全員だ。」  
子供が一人、メイドが16人、執事が4人。  
だけ。あと目を回す兵士が50人ぐらい。

後寝巻姿の二人

「ポートフ。 貴様の最期の言葉ぐらい聞いてやる。」

俺の予定ではこれからこいつを殺し、 その首を持ちこの事件に加担した全ての人間を王宮に引っ立てる。 それだけの罪を犯した。 間違いない。

「離せよ!」

「ガルームを止める氣なら悪いが放さない。 奴は正しい。」

「正しい訳ないだろ! あいつまた人を殺そうとしてるじゃないか!...」

「殺していい命はある。 残念なことにな。」

才人……デューク……いいだろつ、てめえらの会議が終わるまで待つ気はない。

「マイクマテリアル。」

ギロチンが現れガチャリと首が中に繋がれる。

「……ここで私を殺す気か?」

「言つただろ? 最期の言葉くらい聞いてやるの……と。」

「おじいちゃんを殺さないで!...」

「何?」

「ダメよ！ 行っちゃダメ！」

子供には繫がれなかつた縄。 僕の方に来る少年。

「罪を犯した者は例えどんな奴であろうが抹殺する。」

それに才人が吠えた。

「だからって…お前のただ一人の主觀で殺すのかよーー！」

「……分かつた。」

そこまで俺に殺させたくないか……面倒だな。

虚空が歪む。 剣が現れる。 ふたふりの双子剣。

「これは裁きと罰の剣。 これでいいだらうーー？」

突き刺した剣。 刃が肉体と首を離した。 それが罰だった。

## 出陣、悪魔の騎士（後書き）

殺しただけでは意味がない。 壊しただけでは意味がない。 重要なのは全てを変革すること。 より良い方向へ、変えていくこと…。

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとつたりの使い魔 飛天の死神

次回もお楽しみに。

## 飛天の死神（前書き）

殺して殺して……俺は一生殺し続けるだけ。誰にも俺を止められない。  
ならば俺の正義はどこにある？正しいことはすべて悪。  
殺すことでしか誰かを救えないこの身に……全ての正義は残酷に俺を貫くのか？

ならば……俺は……

## 飛天の死神

「ほり！ 歩け！！」

町を歩く亡者の群。先頭では袋を持つガルームが。他の悪魔達が間隔を取つて、亡者の隣に立つ。

彼らが目指すはそびえ立つ白の建物。あまりに真っ白で百合の花が似合うそこで赤い血の花を咲かせようつと考えていた。

唯一彼の行動を非難した少年は……主の隣に転送されていた。

「……で貴族一家まる」と惨殺した場句にメイド、執事達は解雇……  
どうじょうもない鬼畜だな。」

「確かにやり過ぎだ。」

サタンの言葉に頷くようテューケが言った。

「それにあの少年の田の前でそれを行い腹の中の物、全部ぶちまかせるとは……」

「悪いがこの件は全て報告する。」

白い皿をしてテビラーとアザゼルが言い放つ。

「……聞いているのか？」

「もちろん。」

「……俺達もポートフを殺す所までは容認する。 ジャッジメントセイバー、パニッシュメントセイバーを使用したのだからな。」

「だが、そのあと禁術66の4 デス・オブ・ザ・ライフにより家族を血肉にバラバラにした……これは単純な殺人だ。」

……あれは魔力で作つたハンドガンに死の魔法弾を装填し撃ち放つ。 対象は皮が消し飛び、全ての骨を失い肉と血だけがその場に残る  
……グロテスクすぎる禁術。

「……このあとはどうするつもりだよ？ どうせ話は聞いてねえだろ？ 退散するにはお前の指示を全部聞かなきゃ帰してくれないだろ？」

その通りだよ、アモン。

「後は全員縛り上げて王宮に連れていく……だけでいい。 町中を歩かせてな。」

月光が煌めく。 今夜は紅い月の方が強く輝いているな。

「何 m 「邪魔だ、失せろ。 波動波」

俺だけには見える青い光。 一人の兵士が吹き飛び扉を破壊して何処かに当たつて、やつと止まる。

「どうした！？」

「何があつた！？」

それを見届けてから罪人を中に入れ、足を振り上げ地面を勢いよく踏み付けた。 城すらも揺るがす怪音波となり近い壁にはひびが入る。

ぐわんぐわん……

「何だこれは！？」

中の人々がエントランスに現れる。……兵士ばつかだな。

「てめえらには用はない、 失せろ。 波動波。」

再び吹き飛ぶ。

魔法の呪文、魔法使いがようやく来たか。

風の弾丸。速いし狙いも正確だ……だが魔素の流れは単純だな。すぱっと切り裂く。田の前で裂けた。

「……面白い技を使うね。」

陰から現れたのは灰色の髪をした男が出て來た。青が似合つてゐるが……何處か黒いな。

「あんたは?」

「君に言ひ気はないよ。しかも……貴族に平民……そんなに連れて何をしようつていうんだい?」

質問に質問で返すな……。それでも答えてしまつのが情けない所ではあるが……

「裁きに來たんだよ。愚かしい貴族を。」

「……平民を見下すのは僕の流儀では無いが、君は何に成り上がつたつもりだい?」

「単純な質問だな?……悪魔だよ。」

蝙蝠の翼が広がり、消える。流石に顔を歪め剣を更に強く握る。

更に足音が増えた。三つか。

「…平民か。」

片眼鏡をつけた金髪の男、「こいつは結構年を喰つてゐるな。更に赤いマントをつけた男、こいつも金髪さんと一緒にだな。後は付き人の兵士か。

「……お下がりください。こいつは危険すぎます。」

男達は杖を構える。そして土と炎と風が放たれた。危険すぎるか。俺はそれに袋をほうり込み、それらがぶつかつた所で魔法殺し、魔素斬り。

「「なつー。」」

「ポートフ……！」

生首四つ。絶望で染まつた表情を浮かべたあの顔のまま。

「くつ、貴様はやはり、ここで殺す！ サンダークラウド……！」

あの青い服を纏う男の杖剣から稻妻がほとばしる。はいはい、魔素斬り。

搔き消えた。

「くつー。」

「サンダークラウド……！」

魔素斬り。それが何度も繰り返された。もちろん、時には別の魔法、あるいはギターが使った『遍在』を大量に使ってきたが無駄。

「もう止せ。貴様、何が目的だ？」

「こういう手段しかこの国は変えられない。だから……さ。俺の主のために。そう……魔法が使えない誇り高き貴族のために。」

「……まさか、お前は……」

「?! もしかして君の主は……」

二人は理解し一人は首を傾げる。俺はそれから武装を解いた二人と対話することになる。

その場で。生首を燃やしつくして、そしてチュレンヌ達は解放しないで。

金髪の名はレオン。銀髪のおじさん、いやまだ26だという男はワルドと名乗った。ルイズとの関係は父親といいなずけだという。ちつ、ラッキーか…アンラッキーか…。

「ではまず貴方達に質問します。町を管理していた二人、デクレスティマとチュレンヌ。この二人の管理がどうなっていたか、聞いていますか？」

「……知らないな。僕は魔法兵士隊の隊長でね。」

管轄外つて事か。

「すまないが、私も知らない。」

「……そうか。俺は立ち上がりチュレンヌに双子剣を突き付けた。当然ジャッジメントセイバー、パニッシュメントセイバーだ。

「チュレンヌ……貴様の罪を曝せ。」

ふたふりの内片方、白い柄を持つ剣を彼の腹に突き付ける。血ではなく何処からか声が聞こえてくる。女の声だ。

この男は7年と二ヶ月前から商業を営む者を中心に通常より1・8倍の税を要求し七年間、自らの富とする。

王宮に対しては必要最低限の税を献上し自ら大量の金を着服する。

「……兵士よ、杖を剥脱し牢屋へ連れていけ！！」

「兵士はどうするつもりだい？」

「そうだな……」こいつらは……

「雑用でもさせとけ。」

それに……俺はマイクマテリアルで双子剣を大量に複製し城の中を

駆け巡らせる。

「貴様、何w。ぐつ！」

レオンの胸に深々と剣が突き刺さる。当然もう一人の方にも。

「貴族を全て裁く。誰にも邪魔はさせない……全ての悪を裁く……」

この日城に雷が落ちた。兵士が何人か死に、更に厨房では火が急に強くなりコックが死に……と城での事故死がこの日以来急増した。

## 飛天の死神（後書き）

死神は笑う。笑い疲れて落下した。誰か、俺を止めて。自分ではもう止められない。誰か、助けて……

次回ツインシンフォニー 中世に飛翔するもつひとりの使い魔 償  
いの宿

次回をお楽しみに

## 償<sup>む</sup>いの宿（前書き）

ちょっと、下書き紛失、考え込んでこのように収まりました。

## 償いの宿

「ふふふ、はっははは！－！」

暗闇の中で悪魔が笑う。 双月に照らされ屋根の上に立つ悪魔。 あの日城にいた、貴族の半分以上が翌日牢獄に閉じ込められた。 全ての罪を明らかにされ、 横領、殺人を行っていた貴族は町の掃除を強要された。

主、友、大切な人を差し置いて。

鞭を扱い武器を扱い、悪魔は貴族を彼らが平民と接していたように扱った。 貴族は平民からは石を投げられ、その家族は路頭をさまに迷う。 それでも悪魔は何の慈悲を与えず武器を振るつた。 力尽きた者が始めた。

だがそれで悪魔は止まらなかつた。 平民にも牙を剥きはじめた。 貴族と密接に繋がり、 不当な嘗みを行う者を王宮に突き出しあじめた。

全ての店を調べ、 適切なアドバイスを与える悪事を問答無用で裁く。

あまりに強引に。 彼に全ての罪を明らかにする剣を持つが故に。

業火と雷撃、嵐が過ぎた後悪魔は一番豪華だった宿の布団に倒れ込んでいた。

「…………やっぱ、最低だな。暗黒の救世主様々は。」

いくら正しい事をしても全ての人は俺を恐れ、憎む。

後のプランは残っている貴族に、王女に託してある。脅し付きだが。やってくれる。後は……。

「ようやく見つけたわよ。」

「ちつ……もう探し当てるのか。

「王宮から人形をコントロールしてたからその人形に当たれなかつたけど……。夜中、飛び回っていたのは貴方で間違いないわね？」

俺は確かに自らの手で奴らを鞭打ち、力尽きた連中を焼いた。だが昼は最初に死んだ兵士の遺体を腐敗状態を遅らせた上で操作し、夜だけは影に紛れて飛び回り引っ捕らえる。この一日間……そんな事ばかりしていた。本体は王宮の庭で死体を処理。人形は掃除をせつせと行っていた。

「…何で暗黒の救世主に戻った?」

この口調は力ナカ。

「そりすぐべきと思つたまでの事。」

「…才人君、 相当怒つてたわよ？」

「ユキナ、 それは平和ボケした日本人だからだ。 才人も…恐らく戦いを知らない人間は俺の行為を否定するだろう。 だが俺は正しい。 あのふたふりの剣に過ちは何一つ無いのだからな。」

彼女は口許を歪め氷の腕を突き付けた。

…貫いてはいなが…

「何の真似だ…？」

氷が部屋を満たしていく。 ディーネが水蒸気を発生させ、 テティが拡散させ、 ユキナが凍らせているのか？

「いい加減にしてよ。 再びあの苦しみと悲鳴に満ちたあの頃に戻りたいの？」

ユキナの力を維持したままテティが出て来るとは…

「安心しろ。 僕は変わらない。 今度こそ闇には落ちずに暗黒の救世主になるさ。」

何故自分がそんな事を言つのか分からない。 少し黙つて…ほおをなでられて… 彼女は言った。

「隣、 良い？」

好きにしや。」

ほんの少しだけ枕方向にずれる。……何でずれる必要性があつたんだ？　彼女は左に座るのに。

「で……あれがあんたの正義？　もう少ししまともになつてくれたと思つたら昔と一緒になのね。」

「……メガラ……この世界の憎しみが俺を闇に……暗黒の救世主に戻しあだけのこと……。」

「……」

沈黙とともに刃で貫かれたような痛みを感じ腹を触るが……何もない。

「ガルーム、言つたよね『俺たちがあいつらを導く』って。……その気持ち……どこに消えたのよ！？」

彼女らが苦しみ『帰ろう』と言い出した時確かにそう言つた……だけど実体はもつとひどくて……良い奴もいれば……悪い奴もいる……欲望に身を任せるのはどの世界においても同じ……

「結局……俺のしたい」とは世界破壊だったのかな……。」

「……分かんないよ……あんたの考えてることなんて……」

またおなかが痛い……

「さあや…帰るへ。 ルイズちやんたちにもつ一度会わなきゃダメだ  
よ。」

「やうだな… とこりか学院に帰らうか…」

学院といつ言葉を知らない彼女であり頷く… もつじの町に残るのは  
…こやだつた。

## 償いの宿（後書き）

俺は才人の挑戦を再び受けた。怒りに満ちた少年の拳が俺に届くことをなど…ない！

次回 シインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔  
私闘、リベンジそして暴走

次回をお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8321p/>

---

ツインシンフォニー 中世に飛翔するもうひとりの使い魔

2011年7月18日13時03分発行